

かながわの考古学

2013.3

公益財団法人 かながわ考古学財団

か な が わ の 考 古 学

2013.3

公益財団法人 かながわ考古学財団

はじめに

当財団の前身である財団法人かながわ考古学財団は、1993（平成5）年10月21日に神奈川県によって設立されました。今年で20周年を迎えることとなります。

この研究紀要は、1990（平成2）年11月に神奈川県立埋蔵文化財センターによって刊行された『かながわの考古学』第1集から受け継がれてきたものです。神奈川県立埋蔵文化財センターが刊行した『かながわの考古学』は、1995（平成7）年11月の第5号で終刊となりましたが、1996（平成8）年3月には神奈川県立埋蔵文化財センターと財団法人かながわ考古学財団によって新たに研究紀要1『かながわの考古学』が刊行されました。二つの機関による刊行は1999（平成11）年3月の研究紀要4まで続き、研究紀要5からは財団法人かながわ考古学財団の刊行物となりました。

さらに公益財団法人に移行し、2012（平成24）年の研究紀要17からは公益財団法人かながわ考古学財団として刊行を続けています。

神奈川県の組織改編や当財団の変遷にかかわらず、「かながわの考古学」は神奈川県内の考古学に関する資料を提供しており、研究の成果を問うています。記念すべきこの年に当たり、今後もこの姿勢を保っていきたいと考えていますので、ご高評、ご批判をお待ちしております。

2013（平成25）年3月

公益財団法人かながわ考古学財団

目 次

神奈川県における旧石器時代の遺物分布(その6) - B 2層 -	
旧石器時代研究プロジェクトチーム	1
神奈川県における縄文時代文化の変遷IX	
一後期前葉期 堀之内式土器文化期の様相 その4一 一堀之内2式土器の変遷一	
縄文時代研究プロジェクトチーム	11
神奈川県内出土の弥生時代土器棺(2) 一弥生時代中期後葉から古墳時代前期一	
弥生時代研究プロジェクトチーム	23
考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡(10) 一通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介一	
古墳時代研究プロジェクトチーム	34
神奈川県における古代の鉄(3) 一生産関連遺物の集成一	
奈良・平安時代研究プロジェクトチーム	44
神奈川の中世城館(5)	
中世研究プロジェクトチーム	71

例 言

1. 本書は、公益財団法人かながわ考古学財団の職員で構成する研究プロジェクトチームが、時代ごとに共同研究を行った結果を掲載するものである。
2. 各研究プロジェクトチームの構成は以下のとおりである(五十音順・◎はプロジェクトリーダー、○はサブリーダーを示す)。
 - ・旧石器(先土器・岩宿)時代研究プロジェクトチーム
井関文明・◎大塚健一・栗原伸好・鈴木次郎・畠中俊明・○三瓶裕司・脇 幸生
 - ・縄文時代研究プロジェクトチーム
◎阿部友寿・○天野賢一・井辺一徳・岡 稔・小川岳人
 - ・弥生時代研究プロジェクトチーム
飯塚美保・◎池田 治・櫻井真貴・新開基史・戸羽康一・○渡辺 外
 - ・古墳時代研究プロジェクトチーム
◎植山英史・○柏木善治・小西絵美・新山保和
 - ・奈良・平安時代研究プロジェクトチーム
◎加藤久美・川嶋実佳子・齊藤真一・○相良英樹・諏訪間直子・高橋 香・中田 英・宮井 香
 - ・中世研究プロジェクトチーム
◎松葉 崇・○宮坂淳一
 - ・近世研究プロジェクトチーム
◎木村吉行
3. 中世研究プロジェクトチームと近世研究プロジェクトチームは合同で研究を行い、いずれかの研究成果を報告するものとし、今回は中世を掲載することにした。

神奈川県における旧石器時代の遺物分布（その6）

－B 2 層－

旧石器時代研究プロジェクトチーム

はじめに

当プロジェクトでは、1996 年のかながわ考古学財団研究紀要発刊より 6 ヶ年にわたり「旧石器時代後半における石器群の諸問題」と題して、資料集成を行い、集成データを元にした傾向や問題点の抽出を行い、相模野編年や遺跡間接合資料についても検討を行ってきた。その後は、「神奈川県内における旧石器時代の遺構」として、やはり 6 ヶ年をかけて資料の集成と、そのまとめを行ってきた。2007 年度からは、「神奈川県における旧石器時代の遺物分布」として資料集成を開始しており、これまでに L 1 H 層～L 1 S 層から始まり、前年度は B 1 層～L 2 層出土石器群を対象として、その分布状態の集成結果の一部を掲載するとともに、集成結果から若干のまとめを行った。今後、全ての集成作業が終了した後に、全体を通しての総括を行う予定である。

今年度は、昨年度までに B 1 層～L 2 層までの集成とまとめが終了したため、更に下層の B 2 層出土遺物を対象として、集成作業を行った。昨年度までの B 1 層～L 2 層同様、本層位帰属の遺物も多く、本年度は集成結果のみの掲載となる。次年度以降にまとめ等の作業を行う予定である。（大塚）

第 1 表 B 2 層の遺物分布

No.	遺跡名	出土層位	文化層	調査面積 (㎡)	各集中 No.	分布範囲 (m)	石器点数	分布密度	分布状態	器種組成	石材組成	備考 (共存遺構など)
70	栗原中丸	B2U	VI	12000	1	8.0×3.0	31	1.29	散漫	ナ6、尖棒1、RF2、UF1、F16、Ch4、磨1	黒、細磁、粘、玄	
70	栗原中丸	B2LLL	VI	12000	1	8.0×8.0	16	0.25	散漫	ナ、梗、核、F、Ch	黒、細磁、粘 (文化層全体)	
70	栗原中丸	B2LLL	VII	12000	2	0.5×0.8	10	25.00	集中	梗、F、Ch	黒、細磁、粘 (文化層全体)	
70	栗原中丸	B2LLL	VII	12000	3	3.3×3.5	11	0.95	散漫	ナ、核、F、Ch	黒、細磁、粘 (文化層全体)	
73	かしわ台駅前	B2U	IV	3800	1	4.0×0.1	4	10.00	散漫	UF、F	黒	
73	かしわ台駅前	B2LM	V	3800	1	4.5×1.0	7	1.56	散漫	F、核	凝	
74	柏ヶ谷長ツサ	B2LU	VII		1	9.0×6.0	67	1.24	散漫	ナ5、鏃1、削1、UF1、RF2、F61、Ch1、斧1、核4	黒、硬磁凝、ナ、頁、方黒安、ホ、結晶片岩、珪質岩 (文化層全体)	
74	柏ヶ谷長ツサ	B2LU	VII		2	径6.0	164	5.80	散漫	ナ4、削2、F139、Ch14、核5	黒、硬磁凝、ナ、頁、方黒安、ホ、結晶片岩、珪質岩 (文化層全体)	
74	柏ヶ谷長ツサ	B2LU	VII		3	1.6×1.0	3	1.88	散漫	F3	黒、硬磁凝、ナ、頁、方黒安、ホ、結晶片岩、珪質岩 (文化層全体)	

旧石器時代研究プロジェクトチーム

№	遺跡名	出土 層位	文化 層	調査 面積 (㎡)	各 集 中 №	分布 範囲 (m)	石器 点数	分布 密度	分布 状態	器種組成 (※1)	石材組成 (※2)	備 考 (共伴遺構など)
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2UU	VI	—	1	径4.0	75	5.97	散漫	ナ5、削2、接 1、磨1、RF1、 F47、Ch18	黒、ガ黒安、 硬細凝、安	確群1~4
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2UU	VI	—	2	8.0×5.6	70	1.09	散漫	ナ5、磨1、削 1、磨1、RF1、 F53、Ch10、核4	黒、ガ黒安、 硬細凝、安	確群5~8
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2UU	VI	—	遺構 外	—	36	—	—	ナ3、磨1、F32	—	遺構外
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LU	VII	—	1	径4.0	866	68.94	密集	ナ16、角2、削 7、磨10、核3、 台1、RF1、 UF1、F674、 Ch120、核31	黒40、チ18、 珪質11、珪質 岩2、ヒン2、 ホ91、硬細凝 629、流50、ガ 黒安10、不明 13	確群3~9
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LU	VII	—	2	径6.0	31	1.09	散漫	ナ1、磨1、 F24、Ch2、核3	黒10、ガ黒安 6、硬細凝14、 不明1	
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LU	VII	—	3	径7.0	6	0.15	極めて 散漫	F5、核1	ホ1、硬細凝 4、不明1	
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LU	VII	—	4	径8.0	5	0.09	極めて 散漫	F4、Ch1	黒1、硬細凝 1、不明3	
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LU	VII	—	5	径10.0	45	0.57	散漫	磨1、F40、 Ch2、核2	黒8、硬細凝 30、ガ黒安6、 不明1	確群10~12
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LU	VII	—	6	径6.0	11	0.38	散漫	F10、Ch1	不明11	
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LU	VII	—	7	径8.0	154	3.06	やや 散漫	ナ6、磨3、磨 1、RF1、UF1、 F110、Ch23、核 9	黒31、硬細凝 113、ガ黒安10	
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LM	IX	—	1	径10	27	0.34	散漫	ナ1、F20、 Ch3、核1、核2	黒9、ガ黒安 4、ナ2、硬細 凝11、デイス イト1	
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LM	IX	—	2	径4.0	73	5.81	集中	ナ2、UF1、 F65、Ch2、核3	黒12、ガ黒安 2、ホ16、硬細 凝42、黒頁1	
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LM	IX	—	3	径4.0	131	10.43	集中	ナ4、UF1、磨 1、F109、Ch7、 核9	黒41、鉄石英 1、ガ黒安2、 流2、ホ24、硬 細凝61	
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LM	IX	—	4	径4.0	20	1.59	散漫	磨1、UF1、 F15、核3	黒4、ホ2、ガ 黒安2、硬細凝 12	
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LM	IX	—	5	径16.0	718	3.57	集中	ナ41、角1、尖 2、磨2、角4、 UF1、RF5、磨 1、F683、 Ch44、核21、磨 3	黒272、ガ黒安 61、ホ17、ナ 2、硬細凝 287、流1、黒 頁1、粘1、黒 頁72、安1、不 明3	
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LM	IX	—	6	径8.0	247	4.92	集中	ナ5、削2、 UF1、RF1、 F220、Ch3、核 14、原石1	黒77、ガ黒安 80、ホ18、硬 細凝68、中凝3	

神奈川県における旧石器時代の遺物分布（その6）

№	遺跡名	出土 層位	文化 層	調査 面積 (㎡)	各 集 中 №	分布 範囲 (m)	石器 点数	分布 密度	分布 状態	器種組成 (※1)	石材組成 (※2)	備 考 (共存遺構など)
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LM	IX	—	7	径10.0	66	0.87	散漫	ナ1、RF1、 F61、核5	黒5、ガ黒安 5、ホ3、硬細 磁53、流磁1、 細安1	
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LM	IX	—	8	径16.0	163	0.81	散漫	ナ4、彫1、削 2、撿1、RF1、 UF2、磨7、 F132、Ch4、核9	黒80、ガ黒安 42、ホ8、硬細 磁26、不明7	
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LM	IX	—	9	径8.0	181	3.60	散漫	ナ7、角1、削 1、撿1、RF1、 UF6、磨1、磨 2、F146、Ch5、 核10	黒92、ガ黒安 40、硬細磁 45、珪質2、不 明2	
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LM	IX	—	10	径8.0	215	4.28	集中	ナ12、削2、磨 1、撿1、磨1、 F185、Ch4、核 8、原石1	黒93、ガ黒安 30、ホ12、チ 2、硬細磁76、 珪質1、不明1	
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LM	IX	—	11	4.0×12.0	134	2.79	散漫	ナ5、削1、磨 2、磨9、F109、 Ch5、核4	黒76、ガ黒安 4、ホ3、チ2、 硬細磁39、珪 質岩1、黒頁1	
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LM	IX	—	12	16.0×8.0	179	1.40	散漫	ナ8、削3、 RF1、UF1、磨 1、F155、Ch1、 核9	黒35、ガ黒安 96、ホ14、硬 細磁33、中磁1	
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LM	IX	—	13	径4.0	21	1.67	散漫	ナ1、磨1、 F17、核2	黒6、ガ黒安 7、ホ1、硬細 磁6、不明1	
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LM	IX	—	14	径10.0	177	2.25	散漫	ナ8、削2、撿 2、RF2、UF1、 F166、Ch1、核3	黒106、ガ黒安 19、ホ5、チ 10、硬細磁 28、流1、珪 質岩6、黒 頁1	
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LM	IX	—	15	径8.0	72	1.43	散漫	ナ1、UF1、撿 1、磨11、F66、 核1、原石1	黒50、ホ1、チ 1、硬細磁9	
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LM	IX	—	16	径8.0	81	1.61	散漫	磨1、F70、 Ch3、核7	黒48、ガ黒安 4、硬細磁24、 安1、珪質4	
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LM	IX	—	17	径8.0	97	1.93	散漫	ナ4、削1、 RF1、UF1、撿 1、F77、Ch11、 原石1	黒77、ガ黒安 7、ホ1、硬細 磁12	
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LM	IX	—	18	径8.0	75	1.49	散漫	ナ1、削2、撿 1、RF1、UF1、 磨9、F57、 Ch1、核2	黒21、ガ黒安 14、ホ2、チ 1、硬細磁27、 珪質岩1、不明 9	
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LM	IX	—	19	径6.0	45	1.59	散漫	磨1、RF1、 F40、Ch2、核1	黒34、ガ黒安 2、硬細磁9	
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LM	IX	—	20	径12.0	39	0.35	散漫	ナ2、削3、撿 3、F28、核3	黒7、ガ黒安 10、チ1、硬細 磁18、流2、不 明1	
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LM	IX	—	21	径4.0	33	2.63	散漫	ナ3、磨1、 F26、Ch2、核1	黒6、ガ黒安 7、チ1、硬細 磁18、安1	
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LM	IX	—	22	径6.0	11	0.39	散漫	F7、Ch3、核1	黒6、ガ黒安 1、硬細磁4	

旧石器時代研究プロジェクトチーム

No.	遺跡名	出土 層位	文化 層	調査 面積 (㎡)	各 集 中 No.	分布 範囲 (m)	石 器 点 数	分布 密度	分布 状態	器種組成 (※1)	石材組成 (※2)	備 考 (共伴遺構など)
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LM	IX	—	23	径12.0	33	0.29	散漫	ナ3、RF2、蔵 1、F22、Ch3、 核2	黒13、ガ黒安 2、ホ2、硬締 凝16	
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LM	IX	—	24	径4.0	15	1.19	散漫	磨6、F7、核2	黒1、ガ黒安 1、ナ2、硬締 凝5、不明5	
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LL	X	—	1	17.0× 11.0	84	0.46	散漫	ナ2、角1、削 1、蔵2、RF2、 F64、Ch3、核9	黒、ガ黒安、 硬締凝、他	縄群12～17、配石10
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LL	X	—	2	20.0× 12.0	163	0.67	散漫	ナ10、角1、削 4、蔵1、RF1、 UF2、F126、 Ch4、核13、原 石1	黒、ガ黒安、 硬締凝、他	縄群6～9・11、配石6 ～9
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LL	X	—	3	—	11	0.88	散漫	F9、核2	黒、ガ黒安、 流、ホ、チ、 硬締凝（文化 層全体）	
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LL	X	—	4	—	11	0.88	散漫	F8、核3	黒、ガ黒安、 流、ホ、チ、 硬締凝（文化 層全体）	
74	柏ヶ谷 長ツサ	B2LL	X I	—	単	—	不明	—	—	ナ・角・F	—	
81	月見野上野 第1地点	B2I- B2I境	Ⅷ	約 8500 ／4	1	3.0×2.0	47	7.83	集中	ナ1・角2 (3)・角米1 (3) F39	黒3・玄44	
81	月見野上野 第1地点	B2I- B2I境	Ⅷ	約 8500 ／4	外	—	2	—	—	ナ1・UF1	黒1・凝1	
87	長堀南	B2LI	VI	5300	1	4.2×3.0	21	1.66	散漫	角1・スク1・ RF1・F16・核2	黒・他	
92	上草柳 第2地点	B2LI	II	248	A	6.3×5.6	546	15.51	密集	ナ7、角9、スク 5、RF1、UF2、 F320、Ch197、 核3、不明2	黒540、チ1、 玄1、貫4	
92	上草柳 第2地点	B2LI	II	248	B	8.3×7.5	20	0.32	散漫	ナ2、角1、 F13、Ch3、核1	黒19、不明1	
92	上草柳 第2地点	B2LI	II	248	外	—	11	—	—	削1、F8、核2、	黒9、チ1、水1	
96	寺尾	B2LI- B2LIU	V	1200	1	2.0×1.5	6	2.00	散漫	ナ・UF・F・ 核・磨	玄・砂・輝	
99	早川天神森	B2LI	VI	3850	1	—	3	—	—	F、蔵、礫片	黒、玄、硬凝	
99	早川天神森	B2LI	VI	3850	2	15.0×8.0	16	0.13	散漫	磨2、磨3、F8、 核2、蔵1	黒、玄、硬凝	
99	早川天神森	B2LI	VI	3850	3	4.0×1.0	21	5.25	集中	磨1、核1、礫・ 礫片19	黒、玄、硬 凝、粗凝	
102	吉岡C区	B2	—	—	1	径3.2	5	0.62	散漫	ナ1、切1、鋸 1、F1、Ch1	黒2、硬締凝3	
102	吉岡C区	B2	—	—	2	径3.6	16	1.57	散漫	ナ1、削2、 UF1、F10、 Ch1、核1	黒2、硬締凝14	
102	吉岡C区	B2	—	—	3	3.3×2.4	3	0.38	散漫	磨1、台2	中凝1、底2	

神奈川県における旧石器時代の遺物分布（その6）

No.	遺跡名	出土 層位	文化 層	調査 面積 (㎡)	各 集 中 No.	分布 範囲 (m)	石 器 点 数	分布 密度	分布 状態	器種組成 (※1)	石材組成 (※2)	備 考 (共伴遺構など)
102	吉岡C区	B2	-	-	4	3.4×3.0	27	2.65	散漫	ナ1、切1、 RF1、F15、 Ch1、核4、礫器 1、破2、磨1	黒1、硬砂凝 20、中凝1、方 黒安1、安1、 ホ1、破2	
102	吉岡C区	B2	-	-	5	径3.5	20	2.08	散漫	角1、磨1、彫 1、RF1、UF1、 F7、核3、破1、 磨4	硬砂凝12、中 凝2、方黒安 1、安5	
102	吉岡C区	B2	-	-	6	3.2×1.8	4	0.69	散漫	切1、Ch1、核 1、礫器1	硬砂凝3、ホ1	
102	吉岡C区	B2	-	-	7	径8.0	6	0.12	散漫	削1、F2、Ch2、 磨1	黒4、安1、ホ1	
102	吉岡C区	B2	-	-	8	径7.0	40	1.04	散漫	ナ2、磨2、核 1、F9、Ch26	黒35、硬砂凝 2、方黒安3	
102	吉岡C区	B2	-	-	9	4.6×2.2	8	0.79	散漫	ナ1、角1、F3、 Ch2、核1	黒8	
102	吉岡C区	B2	-	-	10	4.6×3.7	4	0.24	散漫	核1、F1、破1、 磨1	硬砂凝1、中凝 1、方黒安1、 砂1	
102	吉岡C区	B2	-	-	11	径4.6	10	0.60	散漫	RF1、F6、Ch2、 核1	黒9、硬砂凝1	
102	吉岡C区	B2	-	-	12	4.0×2.3	5	0.54	散漫	切1、UF1、F2、 核1	黒1、硬砂凝 3、方黒安1	
102	吉岡C区	B2	-	-	13	径5.6	20	0.81	散漫	ナ3、切3、削 2、RF2、F8、 Ch1、磨1	黒16、硬砂凝 2、方黒安1、 安1	
102	吉岡C区	B2	-	-	14	3.4×2.0	12	1.76	散漫	ナ1、F3、Ch7、 核1	黒12	
102	吉岡C区	B2	-	-	15	径4.0	28	2.23	散漫	ナ1、切1、彫 1、RF1、F15、 Ch6、核1、礫器 1、破1	黒26、硬砂凝 1、ホ1	
102	吉岡C区	B2	-	-	16	2.5×1.4	3	0.86	散漫	UF1、F2	珪頁1、黒頁 1、方黒安1	
102	吉岡C区	B2	-	-	17	12.7×8.1	75	0.73	散漫	ナ5、切7、削 1、磨1、彫1、 削片2、RF5、 F19、Ch28、核 5、台1	黒70、硬砂凝 1、方黒安1、 安1、ホ2	
102	吉岡C区	B2	-	-	18	7.0×5.7	38	0.95	散漫	切1、彫2、核 1、RF2、RF1、 F15、Ch14、核 1、磨3	黒12、ナ15、 硬砂凝8、安 2、ホ1	
102	吉岡C区	B2	-	-	19	13.2×7.6	169	1.68	散漫	ナ4、切4、角 1、削4、磨2、 彫3、RF4、 F64、Ch41、核 14、磨25、台3	黒75、ナ22、 硬砂凝32、方 黒安11、安 22、ホ1、磨6	
102	吉岡C区	B2	-	-	20	径13.7	103	0.70	散漫	ナ1、削1、磨 1、RF2、UF2、 F29、Ch21、核 6、黒1、磨36、 台1、砥1、原1	黒46、ナ2、硬 砂凝7、中凝 2、流凝1、頁 1、黒1、方黒 安3、安34、ホ 6	
102	吉岡C区	B2	-	-	21	9.0×5.4	54	1.11	散漫	切1、角1、削 2、磨5、彫1、 RF1、F20、 Ch20、核3	黒3、硬砂凝 18、中凝2、ホ 6	

旧石器時代研究プロジェクトチーム

No.	遺跡名	出土 層位	文化 層	調査 面積 (㎡)	各 集中 No.	分布 範囲 (m)	石器 点数	分布 密度	分布 状態	器種組成 (※1)	石材組成 (※2)	備 考 (共伴遺構など)
102	吉岡C区	B2	—	—	22	2.2×1.3	20	6.99	集中	RF1、戴2、磨 16、台1	黒1、安19	
102	吉岡C区	B2	—	—	23	6.0×2.5	4	0.27	散漫	振1、F3	黒1、硬締凝3	
102	吉岡C区	B2	—	—	24	8.6×7.5	120	1.86	散漫	ナ1、切5、振 6、RF2、UF1、 F20、Ch59、核 4、戴1、磨18、 台3	黒87、硬締凝 4、ガ黒安6、 安22	
102	吉岡C区	B2	—	—	25	2.8×2.3	4	0.62	散漫	F1、核2、磨1	黒1、硬締凝 2、安1	
102	吉岡C区	B2	—	—	26	7.2×3.3	7	0.29	散漫	切1、RF1、 Ch3、核1、磨1	黒1、チ1、硬 締凝2、頁1、 ガ黒安1、安1	
102	吉岡C区	B2	—	—	27	11.0×8.5	166	1.78	散漫	ナ3、切11、角 2、削3、振4、 核2、RF4、 UF1、F45、 Ch54、核8、戴 1、磨28	ガ黒安4、ホ 11、黒105、硬 締凝16、中凝 1、安29	
102	吉岡C区	B2	—	—	28	7.2×4.6	309	9.33	集中	ナ5、切10、角 4、振16、核1、 削1、RF5、 UF2、F88、 Ch129、核16、 皿1、磨28、台 3、核2	黒180、チ1、 硬締凝92、場 1、ガ黒安2、 ホ1、安32	
102	吉岡C区	B2	—	—	29	8.1×5.5	37	0.83	散漫	ナ2、切1、角 1、RF1、F10、 Ch18、磨4	黒28、硬締凝 5、安4	
102	吉岡C区	B2	—	—	30	9.7×4.5	23	0.53	散漫	角1、振1、 UF1、F7、Ch3、 皿1、磨9	黒7、硬締凝 5、安10、ホ1	
102	吉岡C区	B2	—	—	31	10.0×5.2	138	2.65	散漫	ナ7、切4、角 2、削1、振5、 核3、削12、 RF6、UF2、 F40、Ch53、核 4、磨9	黒105、チ2、 硬締凝17、埴 頁1、安9、ホ4	
102	吉岡C区	B2	—	—	32	5.9×5.5	181	5.58	集中	ナ1、切4、削 4、振2、RF7、 UF2、F45、 Ch34、核15、戴 1、皿5、磨57、 台4	黒66、硬締凝 28、埴1、ガ黒 安18、安67、 ホ1	
102	吉岡C区	B2	—	—	33	2.6×1.1	4	1.40	散漫	磨4	安4	
102	吉岡C区	B2	—	—	34	9.4×5.5	28	0.54	散漫	角1、削1、振 4、戴2、F4、 Ch3、核2、磨11	黒9、硬締凝 8、安11	
102	吉岡C区	B2	—	—	35	2.4×1.4	4	1.19	散漫	鉄1、RF1、F2	黒1、硬締凝 2、ホ1	
102	吉岡C区	B2	—	—	36	7.9×3.5	56	1.19	散漫	角1、F10、 Ch41、核4	黒46、硬締凝 9、硬頁1	
103	吉岡D区	B2U	—	—	1	8.0×7.0	85	1.52	散漫	ナ6、切1、角 1、削2、振4、 削1、RF5、 UF5、F36、 Ch17、核5、硬 器1、戴1	黒32、チ1、硬 締凝37、中凝 2、戴2、ガ 黒安7、ホ4	
103	吉岡D区	B2U	—	—	2	径4.6	75	4.52	集中	ナ4、切3、角 3、彫1、RF11、 UF1、F6、Ch46	黒73、チ1、硬 締凝1	

神奈川県における旧石器時代の遺物分布 (その6)

No.	遺跡名	出土 層位	文化 層	調査 面積 (㎡)	各 集 中 No.	分布 範囲 (m)	石器 点数	分布 密度	分布 状態	石器組成 (※1)	石材組成 (※2)	備 考 (共伴遺構など)
103	吉岡D区	B2U	—	—	3	2.2×2.0	16	3.64	集中	F3、核1、 Ch12、核1	黒16	
103	吉岡D区	B2U	—	—	4	1.5×0.7	8	7.62	集中	ナ1、F2、核4、 台1	黒2、硬細礫 4、ガ黒安1、 輝1	
103	吉岡D区	B2U	—	—	5	11.2×5.2	10	0.17	散漫	ナ1、削1、削 1、彫2、F4、 Ch1	黒8、珪1、ガ 黒安1	
171	原口	B2	II (風 室A エリア P)	73	1	4.0×2.6	66	6.30	やや 散漫	ナ1、角1、掻1、 RF1、核1、F類 61	黒43、ガ黒安 15、硬細礫8、	
192	草柳一丁目	B2U- B2LU	—	148	1	6.2×5.5	169	4.96	中心 部濃 く、 周 り 散漫	ナ・スク・彫・ RF・F・核	凝・チ、安、 黒	
266	小園前澤	—	—	330	A	径5.0	44	1.76	散 漫?	ナ2、RF2、核 5、F35	頁1、凝36、安 4、不明3	
266	小園前澤	—	—	330	B	不明	5	—	—	ナ1、角?1、F3	玄1、凝4	
95	福田札ノ辻	L2- B2U(B 2U)	IV	144	1	2.1×1.6	10	3.00	集中	UF2、F2	黒10	
95	福田札ノ辻	B2L	VI	144	1	1.6×1.6	21	8.29	やや 密集	ナ1、F20	黒21	
243	本人こざつ原	B2	IV	6200	1	2.5×0.5	5	4.00	密集	ナ1、角1、 RF1、F2	黒2、凝1、頁1、 ホ1	
274	地蔵坂	B2LU	—	—	1ヶ所	不明	54	—	—	ナ・掻・UF・ RF・F・核	—	
274	地蔵坂	B2UL	—	—	3ヶ所	不明	94	—	—	ナ・削・UF・ RF・F・核・磨	—	
274	地蔵坂	B2ULL	—	—	1ヶ所	不明	9	—	—	ナ・RF・F・核	—	
275	上土棚南 6次	L2- B2L (B2U 集中)	I	323	1-1	径2.0	12	3.00	散漫	核2、F10	チ7、ホ4、安1	
275	上土棚南 6次	L2- B2L (B2U 集中)	I	323	1-2	—	不明	—	—	ナ、掻、削、 核、F	黒、安、他	
275	上土棚南 6次	L2- B2L (B2U 集中)	I	323	1-3	3.0×10.0	不明	—	—	ナ、掻、削、 核、F	黒、凝、砂、 頁、他	
275	上土棚南 6次	L2- B2L (B2U 集中)	II	323	2-1	径5.0	不明	—	—	角、ナ、掻、 削、彫、核、F	ホ、黒、砂、 凝、チ、頁、 安	

旧石器時代研究プロジェクトチーム

No.	遺跡名	出土層位	文化層	調査面積 (㎡)	各集中No.	分布範囲 (m)	石器点数	分布密度	分布状態	器種組成 (※1)	石材組成 (※2)	備考 (共伴遺構など)
275	上土曜南6次	L2-B2L (B2L集中)	II	323	2-2	4.0×12.0	不明	—	—	角、ナ、棒、削、彫、核、F	ホ、黒、凝、チ、頁、安	
308	高座渋谷団地	B2U~B2L	V	2960	1	8.0×3.0	96	4.00	集中	ナ7、挟入1、RF1、UF1、F30、凝55	—	
308	高座渋谷団地	B2U~B2L	V	2960	2	6.7×3.8	107	4.20	散漫	ナ9・角1、スク1、RF8、UF3、核5、F54、凝23	—	
308	高座渋谷団地	B2U~B2L	V	2960	3	4.4×3.5	102	6.60	散漫	ナ7、スク1、RF2、UF2、核4、F56、Ch30	—	
308	高座渋谷団地	B2U~B2L	V	2960	4	5.0×3.4	47	2.76	求心的	ナ7、RF1、F21、Ch18	—	
308	高座渋谷団地	B2U~B2L	V	2960	5	3.4×2.2	27	3.60	散漫	ナ2、スク1、RF2、核4、F13、Ch5	—	
308	高座渋谷団地	B2U~B2L	V	2960	6	5.0×4.0	29	1.45	北西部に偏る	ナ3、RF3、核1、F21、Ch1	—	
308	高座渋谷団地	B2U~B2L	V	2960	7	3.2×2.0	28	4.37	南側に偏る	ナ5、スク1、核1、F11、Ch10	—	
308	高座渋谷団地	B2U~B2L	V	2960	8	径3.8	23	2.03	散漫	ナ2、角1、RF3、UF1、核1、F14、Ch1	—	
308	高座渋谷団地	B2U~B2L	V	2960	9	4.0×2.4	23	2.39	散漫	ナ4、スク3、UF2、核2、F9、Ch3	—	
308	高座渋谷団地	B2U~B2L	V	2960	10	5.0×1.2	20	3.33	散漫	ナ3、RF2、C2、F9、Ch4	—	
308	高座渋谷団地	B2U~B2L	V	2960	11	6.0×4.6	24	0.86	散漫	ナ2、スク1、核3、F14、Ch3	—	
308	高座渋谷団地	B2U~B2L	V	2960	12	6.2×1.6	7	0.70	散漫	ナ1、安2、RF1、F3	—	
308	高座渋谷団地	B2U~B2L	V	2960	13	2.6×1.8	7	1.49	散漫	F6、Ch1	—	
308	高座渋谷団地	B2U~B2L	V	2960	14	—	—	—	—	ナ1、F1	—	
327	上草柳遺跡群大和配水池内	B2UL	Ⅷ	3849	1	5.0×3.0	7	0.47	散漫	掘1、RF1、F5	凝1、チ3、頁3	
327	上草柳遺跡群大和配水池内	B2UL	Ⅷ	3849	2	3.1×2.3	10	1.40	散漫	ナ2、RF1、F7	チ6、頁4	
327	上草柳遺跡群大和配水池内	B2UL	Ⅷ	3849	3	2.0×1.3	5	1.90	散漫	ナ1、F4	チ3、頁2	
327	上草柳遺跡群大和配水池内	B2UL	Ⅷ	3849	4	1.3×0.9	5	4.27	散漫	ナ1、F4	凝1、チ3、ホ1	
327	上草柳遺跡群大和配水池内	B2UL	Ⅷ	3849	5	3.1×1.7	8	1.51	散漫	ナ1、掘1、F5、核1	黒3、凝2、チ3	
327	上草柳遺跡群大和配水池内	B2LL	IX	3849	1	2.3×1.4	9	2.79	散漫	F6、凝器3	黒5、頁4	

神奈川県における旧石器時代の遺物分布（その6）

№	遺跡名	出土 層位	文化 層	調査 面積 (㎡)	各 集 中 №	分布 範囲 (m)	石 器 点 数	分布 密度	分布 状態	器種組成 (※1)	石材組成 (※2)	備 考 (共伴遺構など)
327	上草柳遺跡群 大和配水池内	B2LL	IX	3849	2	5.0×3.2	46	2.89	散漫	ナ1、彫1、横 3、RF2、F38、 蔵1	黒37、チ8、砂 1	
327	上草柳遺跡群 大和配水池内	B2LL	IX	3849	3	4.9×3.3	31	1.92	散漫	横1、横2、 UF3、F25	黒25、安1、チ 1、頁4	
327	上草柳遺跡群 大和配水池内	B2LL	IX	3849	4	5.2×3.0	49	3.14	散漫	横1、横5、 RF3、UF19、 F26、横2	黒45、チ3、頁 1	
327	上草柳遺跡群 大和配水池内	B2LL	IX	3849	5	3.8×2.2	8	0.96	散漫	彫1、F7	黒2、チ3、頁3	
327	上草柳遺跡群 大和配水池内	B2LL	IX	3849	6	2.1×1.3	11	4.03	散漫	横2、RF3、F5、 横1	黒5、安1、チ 2、頁3	
327	上草柳遺跡群 大和配水池内	B2LL	IX	3849	7	1.5×0.9	6	4.44	散漫	横1、F5	チ1、頁5	
327	上草柳遺跡群 大和配水池内	B2LL	IX	3849	8	1.5×1.2	5	2.78	散漫	ナ2、UF1、F2	黒3、チ1、頁1	
327	上草柳遺跡群 大和配水池内	B2LL	IX	3849	9	3.5×1.9	11	1.66	散漫	横1、横1、F7、 横2	黒11	
327	上草柳遺跡群 大和配水池内	B2LL	IX	3849	10	4.6×1.0	8	1.74	散漫	横1、UF1、F6	黒8	
327	上草柳遺跡群 大和配水池内	B2LL	IX	3849	11	5.7×2.4	18	1.32	散漫	ナ2、UF2、 F12、横2	黒16、頁1、ホ 1	
327	上草柳遺跡群 大和配水池内	B2LL	IX	3849	12	2.3×0.8	10	5.43	散漫	F10	黒10	
334	鷹見塚	B2L	遺物 群V	1406	1	2.8×2.5	29	4.14	散漫	角1、削3、 RF1、UF4、 F18、横2	硬砂凝17、黒 12	
334	鷹見塚	B2L	遺物 群V	1406	2	0.7×0.3	3	14.29	集中	削1、F1、台1	黒2、中凝1	
348	神明若宮 地区内 C地区	L2LL ～ B2LU	Ⅲ	約285 ㎡	1	0.6×2.2	23	1.74	散漫	ナ6・UF4・F9・ Ch2・横2	黒・凝	
348	神明若宮 地区内 C地区	L2LL ～ B2LU	Ⅲ	約285 ㎡	2	5.4×3.8	23	1.12	散漫	ナ3・F14・Ch6	黒・安	
359	当麻亀形	L2L	Ⅲ	—	1	4.6×3.3	49	3.23	集中	ナ3、RF3、 UF1、横3、F39	黒ほか	
360	真田北金目	B1L	B1 下部	277.2	S1	7.4×7.0	307	5.93	集中	ナ7、削1、横 1、RF3、横30、 刃1、蔵1、F263	黒、チ、細 凝、火燐凝、 ホ、角閃安、 輝石安	

※1 器種組成 (ナ:ナイフ形石器 横:横先形尖頭器 横:横器 削:削器 スク:スクレイパー 彫:彫器 横:横形石器 明:明石 打:打製石斧
台:台石 横:石球 刃:刃器 UF:使用痕ある剥片 RF:調整痕ある剥片 餘:接離器)

※2 石 材 (丹安:ダラス質黒色安山岩 安:安山岩 角閃安:角閃石安山岩 粘:粘板岩 黒:黒曜石 チ:チャート 砂:砂岩 頁:頁岩
凝頁:凝灰質頁岩 凝:凝灰岩 硬凝凝:硬質凝灰岩 凝:凝灰岩 凝:凝灰岩 凝:凝灰岩 凝:凝灰岩 凝:凝灰岩 凝:凝灰岩 凝:凝灰岩 凝:凝灰岩
石閃:石閃岩 花閃:花閃岩 凝:凝灰岩 凝:凝灰岩 凝:凝灰岩 凝:凝灰岩 凝:凝灰岩 凝:凝灰岩 凝:凝灰岩 凝:凝灰岩 凝:凝灰岩
硬砂:硬質砂岩)

引用文献

- 70 鈴木次郎 1984 「第V章 第7節 第VI文化層」『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告3 栗原中丸遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター p. 293-297
- 73 小池 聡 ほか 1987 「4. 第IV文化層」『相武考古学研究所調査報告第3集 かしわ台駅前遺跡』相武考古学研究所 p. 63-65
- 74 下角圭司・服部隆博 1983 「IV 第8節 第VII文化層」『海老名市柏ヶ谷長ヲサ遺跡』柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団 p. 32-37
- 74 下角圭司・服部隆博 1983 「IV 第7節 第VI文化層」『海老名市柏ヶ谷長ヲサ遺跡』柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団 p. 31
- 74 下角圭司・服部隆博 1983 「IV 第9節 第VIII文化層」『海老名市柏ヶ谷長ヲサ遺跡』柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団 p. 38-42
- 74 下角圭司・服部隆博 1983 「IV 第10節 第IX文化層」『海老名市柏ヶ谷長ヲサ遺跡』柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団 p. 43-56
- 74 下角圭司・服部隆博 1983 「IV 第11節 第X文化層」『海老名市柏ヶ谷長ヲサ遺跡』柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団 p. 57-61
- 74 下角圭司・服部隆博 1983 「IV 第12節 第XI文化層」『海老名市柏ヶ谷長ヲサ遺跡』柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団 p. 62-63
- 81 相田 薫 1986 「第VI章 第8節 第VIII文化層」『神奈川県大和市文化財調査報告書 第21集 つきみ野遺跡群上野遺跡第一地点 発掘調査報告書』 p. 697-714
- 87 麻生順司 1987 「第III章 第6節 第VI文化層」『神奈川県大和市文化財調査報告書 第28集 長堤南遺跡発掘調査報告書』大和市教育委員会 p. 198-208
- 92 大和市教育委員会 1984 「第V章 上草柳第2地点遺跡 第5節 第II文化層」『大和市文化財調査報告書 第15集 一般国道246号(大和・厚木バイパス) 地域内遺跡発掘調査報告書II』大和市教育委員会 p. 151-217
- 96 白石浩之・鈴木次郎 1980 「第V章 第6節 第V文化層」『神奈川県埋蔵文化財調査報告 18 寺尾遺跡』神奈川県教育委員会 p. 179-183
- 99 岡本孝之・鈴木次郎 1983 「第7章 第6節 第VI文化層」『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告2 早川天神森遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター p. 361-376
- 171 島中俊明 2002 「第四章 遺構と遺物 第2節 旧石器時代 第II文化層(B2層相当)の調査」『かながわ考古学財団調査報告 135 原口遺跡IV』 p. 383-560
- 192 加藤晋平 1979 「V 出土石器」『大和市草柳一丁目遺跡』草柳一丁目遺跡調査会 p. 13-17
- 266 鈴木次郎・小野正敏 他 1972 「IV 出土した石器と第三期の石器群」『綾瀬町文化財調査報告 第一集 一小園前遺跡発掘調査報告書』 p. 19-28
- 243 高村公之・中根 賢 1996 「第四章 第4節 第IV文化層」『かながわ考古学財団調査報告 13 本入こざつ原遺跡』 p. 72-77
- 274 鈴木次郎・矢島國雄 1974 「V 出土した石器と石器群の問題」『綾瀬町文化財報告 第二集 地蔵坂遺跡発掘調査報告書』 p. 18-21
- 275 矢島國雄 1996 「第2章 第2節 市内の遺跡」『綾瀬市史 9 別編考古』 p. 206-247
- 308 小池 聡 1995 「第四章 第6節 第V文化層」『大和市県営高座渋谷団地内遺跡』 p. 85-140
- 327 麻生順司 2008 「第二章 後期旧石器時代 第8節 第VII文化層・第9節 第IX文化層」『神奈川県大和市上草柳遺跡群大和配水池内遺跡』I 玉川文化財研究所 p. 219-283
- 334 松田光太郎ほか 2004 「第三章 第3節 第3項 旧石器時代遺物群V」『かながわ考古学財団調査報告 171 山ノ神遺跡 鷹見塚遺跡』財団法人かながわ考古学財団 p. 283-308
- 348 小池 聡 1997 「第V章 C区の調査 第5節 旧石器時代の調査 (3) 第III文化層」『神明若宮地区内遺跡』神明若宮地区内遺跡発掘調査団 p. 247-263
- 353 鈴木啓介・八重畑ちか子 2001 「第二章 第2節 予備調査」『東国歴史考古学研究所調査報告第28集『藤沢市№468遺跡発掘調査報告書』東国歴史考古学研究所 p. 4-5

神奈川県における縄文時代文化の変遷Ⅹ

一後期前葉期 堀之内式土器文化期の様相 その4一

一堀之内2式土器の変遷一

縄文時代研究プロジェクトチーム

はじめに

今年度は、平成23年度に行った堀之内1式土器の変遷に引き続き、堀之内2式の編年案構築を目指す。

堀之内2式の土器研究については、すでに『研究紀要15』の研究略史でふれたように、1980年代後半以降細分化がはかられてきた。これらの細分の基軸として石井寛による5細分(石井1984)がある。今回はこれに準拠し、新たに一括出土事例をもとに鉢や注口土器等も含め検討を行った。器種については、精製の深鉢形土器として朝顔形土器(昨年度のF群)、粗製の深鉢形土器として称名寺式土器の系譜を引くもの(いわゆる「下北原系」、昨年度のA群)の沈線文が主体的に施される土器と無文や地文のみが施文されたものがある。これにいわゆる「金魚鉢」の器形を呈する有頸の鉢形(昨年度のC群)や無頸の鉢形、浅鉢形土器、注口土器、小型土器がある。編年案作成については、朝顔形の器形を呈するものを中心に、5段階に分け、文様モチーフについて石井の分類をもとに一部改変した。文様の整理が進行し、空白部が広くとられる典型的な堀之内2式土器の成立を中段階にすえ、これ以前の堀之内1式の影響が残り、文様の多条化、多重化がみられる段階を古段階とし、文様帯が狭まり、内面文様が出現する段階を新段階とした。なお、石井が提示した朝顔形の深鉢を中心とする5段階の変遷について以下のような理解のもと、各段階設定を行っている(石井1984)。

古段階前半：石井のa段階。堀之内1式土器からの影響が残り、器面の画一化が進む。

古段階後半：石井のb段階。充填縄文手法が広く採用され、文様の多条化、多重化がみられる。

中段階：石井のc段階。文様の整理が進行し、空白部が広くとられる。

新段階前半：石井のd段階。さらに文様の整理が進み、文様帯の幅が狭くなる。

新段階後半：石井のe段階。突起や内面文様が発達する。

(阿部)

	深鉢形土器(精製)										深鉢形土器(粗製)			その他	
	X字状文	変形文	人線文	渦巻文	斜行文	三角文	屈曲文	対称文	重層文	並行文	棒状文	横帯文	下北原系 (沈線文)	浅鉢形土器	注口土器
古段階前半	■	■	■			■			■			■	■	■	■
古段階後半	■	■	■	■		■			■		■	■	■	■	■
中段階			■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
新段階前半				■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
新段階後半					■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■

■ 土器文様のおおよその消長・多寡を示すが、必ずしも厳密なものではない。

第1図 後期前葉期 堀之内2式土器 文様変遷模式図

古段階前半

古段階前半は、堀之内1式土器の影響が残る段階で、石井の言うa段階に相当する。

横浜市原出口遺跡20号住居跡出土資料（1・3・6・7・10・11・13・14・16・17・24～27）、横浜市稲荷山貝塚第2地点貝層Ⅱ-5層出土資料（2・8・9・12・19・20・28・29）、同貝塚第2地点貝層Ⅱ-4層出土資料（15・21・22）を基準資料とし、横浜市東正院遺跡包含層出土資料（4・5）、伊勢原市下北原遺跡包含層出土資料（18・23）を補足資料として抽出した。

堀之内1式からの変遷は漸移的で、口唇部に横位沈線が施される資料（1・6・7・12・13・16・18・19・22・23）や、縦位区画が施される資料、縦位基調の文様構成をとる資料（2・4・6・8・12・13・22～24）など、1式に特徴的な要素をもつ資料が多い。一方で、1～4・6・11・13・14などの朝顔形深鉢には、文様帯下端区画の明確化、文様の多重化といった顕著な傾向が看取され、1式段階に比べ、器面の画一化がより進行する段階として捉えることができる。

本段階を構成する土器は、上述した原出口遺跡20号住居跡出土一括資料、稲荷山貝塚第2地点貝層Ⅱ-5層出土一括資料を中心に、朝顔形深鉢（精製深鉢：1～14）、縦位基調の沈線が施される深鉢（粗製深鉢：15～21）、有頸鉢（22～24）、注口土器（25～29）が確認されている。その他、編年図に掲載はしなかったが、原出口遺跡20号住居跡出土一括資料中には、碗状をなす小形の無頸鉢も存在する。浅鉢、小型土器については、明らかに本段階に帰属すると考えられる良好な供伴事例を確認することができなかった。これらの器種については、1式から2式への変遷を明確に捉え切れているわけではなく、従って、単体資料の抽出も困難であった。

深鉢形土器の主体をなす朝顔形深鉢では、文様変遷模式図（第1図）に示したように、X字状文（1・2・4）、菱形文（3）、入組文（5～8）、三角文（9～11）、懸垂文（12）、重弧文（13）、横帯文（14）などの文様モチーフが採用されている。1・2・5～8・12～14のごとく、文様帯あるいは施文範囲は概して広く、縦位区画や懸垂文との組み合わせでモチーフが表出されているものが多い（2・4・6～8・12・13）。2・3・6～8・12・13のごとく、地文や沈線・刺突等の充填文で器面を密に埋める傾向があり、一定の余白を伴ってモチーフが横位展開するものは、横帯文資料（14）以外では菱形文（1）や三角文（9～11）をモチーフとする資料に散見される程度である。このような資料は、朝顔形深鉢における充填縄文手法の普遍化とあいまって次段階以降に急増するようであるが、本段階については、このような様相の萌芽が認められる段階として捉えられよう。

朝顔形深鉢以外の深鉢（15～21）では、縦位沈線を基調とする文様が展開する、いわゆる下北原系の深鉢（15～19）が主体を占める。前述のごとく、これらの資料には口唇部に1単位の沈線が廻るものが少なく、単体では1式との識別が困難なものが多い。これは、地文と縦位基調の沈線による文様構成をとる深鉢（20・21）についても言える。無文、あるいは地文のみが施される粗製深鉢は、単体での段階判別が困難であるため、資料の抽出にあたっては朝顔形深鉢等との供伴事例に拠らざるを得ないが、今回の作業では、本段階に帰属する好例を抽出することができなかった。本段階の器種組成を検討する上での課題である。

有頸鉢（22～24）は、胴部文様帯の下端区画が不明瞭で、縦位区画が施されている資料（23）、あるいは縦位構成のモチーフが展開する資料（22・24）が主体を占める。口唇部に横位沈線が廻る22・23などは、下北原系深鉢同様、1式との識別に難渋する。有頸鉢に用いられる主要なモチーフのひとつである杵状文は、県西部における1式段階の資料中に多くみられるものの、本段階に帰属する確実な事例を抽出することは出

来なかった。かかるモチーフは、次段階以降では朝顔形深鉢のモチーフとして流用され、一般化していくことが明らかになっているが、本段階における様相については今後の課題として認識しておく。

注口土器（25～29）は、胴部が算盤玉状をなし、2単位の把手とその直下にやや短めの注口部が付されるものが一般的である。文様は、多重沈線による幾何学的なモチーフが胴部上半を埋め尽くすように施されるもの（25・27・28）を主体とするが、26は2単位の沈線区画内に縄文を充填した縄文帯で幾何学的なモチーフを表出する資料で、やや後出の印象を受ける。（井辺）

古段階後半

古段階後半は堀之内1式からの影響が残り、器面の画一化が進んだ前段階から充填縄文手法が広く採用される。文様内への充填縄文手法の普遍化により縄文施文部が強調され、文様間の空白部分には多条化・多重化されたモチーフが広い空間部を残さぬよう施文されるようになる。これら多条化・多重化されたモチーフは、やがて整理が進行し空白部分が広くとられる中段階へと移行する。本段階は横浜市川和向原遺跡8号住居跡（33・57・59・64）、平塚市上吉沢市場遺跡群A地点J1号住居跡（40・44・49・58・60～62・67～70・75）の一括出土資料を基準とした。

深鉢形土器には精製土器である朝顔形深鉢形土器と粗製深鉢形土器とがある。本段階の朝顔形深鉢には前段階から続く文様としてX字状文・菱形文、入組文、三角文、重弧文などがあり、本段階から急増する文様として渦巻文、杵状文がある。

本段階の県内出土資料を概観してみると、X字状文・菱形文は、文様内への充填縄文手法の普遍化により縄文施文部が強調されることになる。30・31は文様内に充填縄文が施され、文様間の空白部分を埋めるようにモチーフの多重化が施されている。また、菱形文では前段階で特徴的であった集合沈線による文様空白部分への充填が本段階でも多用される。37などがその例である。

入組文・渦巻文では、X字状文・菱形文同様に充填縄文手法が取り入れられ、縄文施文部が強調される。渦巻文は本段階から急増し新段階前半まで見られる。文様構成は斜行文により渦巻文が連絡されるものが多い。39～44などがその例としてあげられる。

三角文は本段階で急激に増加する。モチーフ内への充填縄文手法が広く取り入れられるようになり、文様間の空白部分には三角文を二重に配置するもの（48）、3本の沈線で三角文を描くもの（50）、また三角文が二段で構成されるもの（53）などの文様構成が認められるようになる。

重弧文は前段階での重弧文とそこから下る懸垂文の文様構成から懸垂文が衰退する。54は重弧文間の空白部分を4～5本の沈線と縄文を施文することにより空白部分の処理を行っている。55は懸垂文が消滅する。重弧文は横位に連続し二段構成となり、空白部分に縄文が施されている。

杵状文は本段階から出現する文様である。杵状文が朝顔形深鉢に一般化してくるのが本段階からであり、文様構成は空白部分を埋めるために文様の多重化が施されている。56は地文に縄文を施した器面に二段の杵状文が配置される。57は横長の杵状文を三段配置し、下端を2本の沈線により区画している。文様間には縄文が充填されている。

横帯文は古段階前半から新段階後半まで確認されているが、本段階では良好な出土資料がなく図示することができなかった。

深鉢形土器には精製である朝顔形深鉢の他に粗製深鉢形土器がある。粗製土器には沈線文によりモチーフ

が施されるもの、地文のみ、無文のものなどがある。沈線文の土器は所謂下北原系土器と呼ばれる一群で、沈線によりH字状文と懸垂文が施されるものが多い。また、口唇部には沈線が巡るものも多く存在する。

鉢形土器には有頸鉢形土器と無頸鉢形土器、浅鉢形土器とがある。有頸鉢形土器は前段階に比べると頸部の屈曲や胴部の張りは若干弱くなる。67は沈線による縦位区画を施し、下端は刻み隆帯により区画する。68も下端区画を有する土器である。69・71～73は下端区画をもち、縦位に多条の沈線を施すものである。73は渦巻文がアクセントとして施されている。

本段階に帰属する注口土器は算盤玉形で最大形を胴中央部から胴下半部に有する器形を呈する。2単位の把手と斜方向に立ち上がる注口部を有し、胴部には渦巻状のモチーフが描かれる。渦巻状のモチーフ周辺には帯縄文による施文や空白部分を埋めるように多条の沈線が施される。小型土器は浅鉢を小型化したものが見られる。

(岡)

中段階

中段階は典型的な堀之内2式として確立する段階である。朝顔形深鉢において前段階のモチーフが整理され、文様帯内に余白を多く残すようになる。この段階は、小丸遺跡 48号住居跡、(86・89・110～114・120・124・128・132)、西富貝塚4号跡(93・98・99・106)の一括資料を基準としている。当段階の器種には、深鉢形土器として精製の朝顔形深鉢と沈線文および地文のみ・無文の粗製深鉢形土器があり、深鉢形土器以外のものとして有頸深鉢形土器、鉢・浅鉢形土器、注口土器、小型土器がある。朝顔形深鉢には、前段階を引きつぐモチーフに、入組文・渦巻文、斜行文・三角文、重弧文や杵状文などがあり、いずれも、文様が整理され、文様帯内に空白部が多くを占めるようになる。前段階の主体をなしていたX字状文・菱形文の資料が極端に減少し、かわって対弧文が急増し、中段階以降主体となる杵状文や横帯文が一定の割合を占めるようになる。粗製土器では、沈線文によって描かれる系統のものと、地文のみもしくは無文の深鉢のものがあり、胴部上半で緩くくびれるものと、くびれをもち直線的に広がる形状のものがある。沈線文のモチーフによって前段階もしくは後続のものとの区別は難しい。編年案として抽出はできていないが、地文のみ・無文の粗製土器は、沈線文同様、粗製土器を構成する土器として一定程度を占めるようになる。有頸鉢形土器は、器形において前段階のいわゆる金魚鉢形から若干頸部の屈曲や体部の張りが弱くなる傾向があるものの、文様モチーフに大きな変化はない。注口土器として大型注口土器が見られる一方で、体部にやや丸みを帯びた器形のものも出現する。以下に、挿図に沿って資料を個別にとりあげ、本段階の特徴を詳述する。

まず精製土器、朝顔形深鉢について文様モチーフごとに取り上げる。中段階においてX字状文・菱形文の典型的な事例をあげることができない。数量として極端に減少する。これには多分にモチーフの類似した三角文への変化が影響するものと思われる。古段階にて胴部上半の大部分を占めるように幅広い文様帯であったのに対し、この段階で文様帯が狭まっていく。このため、幅広い文様帯を前提に成立していたX字状文・菱形文は、それを三角文に変えその割合を減少させていったのであろう。入組文・渦巻文では、84や86のように斜行文に連結した渦巻文が文様帯を区画する帯状文から離れ、単位文化する流れにある。これは新段階で単位文化する前兆としておさえられる。斜行文・三角文がこの時期、数量を増す。それは先に述べたように、X字状文・菱形文が三角文に転化したことも要因のひとつだろう。ただし、90や93のように狭い文様帯に二段構成をなすものも残存している。二段構成は重弧文にも認められ、一部、後続の段階においてもモチーフが縮小し多段化するものが残る。懸垂文・対弧文の増加もこの段階を特徴づける。鉢形土器の文様モチ

ーフであった対弧文や杵状文が深鉢に転用され、また一方で、前段階のX字状文や重弧文等にみられた充填文としての懸垂文や対弧文が、文様帯の整理に伴い単独モチーフとして成立したものであろう。この意味で、古段階に残る堀之内Ⅰ式由来の縦位区画の影響はこの段階まで遺存しているともいえる。対弧文は、渦巻文と同様に新段階にて単位文化する。重弧文では102のように懸垂文を伴う例や103のように多段構成を残すものが確認できる。中段階以降その割合を増加させるものとして杵状文、横帯文がある。杵状文や横帯文にみられるように、中段階以降に共通する空白部の出現と幅の狭い文様帯の確立はこの段階に求めることができる。

朝顔形深鉢以外の器種についてふれておく。粗製土器では、沈線文によるモチーフは前段階と大きく変化はないものの、口唇部をめぐる沈線はその多くを失う。一方、113のように口縁部直下に刻み陸帯をもち、縄書文的モチーフをなすものがある。地文のみもしくは無文粗製深鉢である114は、器形そのものが沈線文を有するものに共通するものの、口縁部直下に太く浅い沈線をめぐらせ、以下胴部最大径まで横方向のつよいナデによる凹凸を残している。有頭鉢形土器は、頸部のくびれや体部の張りが弱まるものの、前段階から大きな変化がない。121や122にあるように砲弾型を呈する無頭鉢には有頭鉢の体部に共通するモチーフが描かれている。浅鉢である123は、体部下半に屈曲をもち、注口土器に共通するモチーフが描かれる。注口土器は体部が丸みを帯び、帯縄文による施文が主体となる(125以外のすべて)。これは前代からの文様が整理され、文様帯に空白部が生じる朝顔形深鉢と同様の傾向であろう。小型土器は鉢や浅鉢を小型化したものが見られる。

(阿部)

新段階前半

新段階後半は、文様の整理が進み、文様帯の幅が狭くなる石井e段階に相当し、各構成に盛衰を認めながらも新段階後半に移行していくことを前提とした。また朝顔形深鉢の口縁突起部意匠の顕著化や口縁内面にめぐる横位の沈線文の顕在化も傾向として捉えられる。

深鉢形土器(精製土器)は、古段階に盛行していたX字状文・菱形文はみられず、133・134など入組文・渦巻文の系譜は衰退の傾向にある。中段階を主体に盛行した斜行文・三角文は、135~141などは前段階から継承されていることが把握できる。文様帯幅の狭小化傾向や文様の簡素化などが想定されるが、明瞭ではない。144・145など懸垂文・渦巻文の好例はあまりみられず、入組文・渦巻文と同様の傾向を示している。146の重弧文は、中段階から系譜を継承するものと思われる。重弧文の重層化・多段化は文様帯構成の狭小化の傾向と連動して捉えたいが好例は少なく、今後の出土事例の増加を望みたい。147~150の杵状文は文様構成が簡素であるため、文様帯の狭小化に関しては前段階との差異はあまり顕著ではないが、後述の新段階後半期に盛行する。また151などの横帯文は極端な文様の簡略であるため、安定的な組成を構成しているか否かは現状では捉えられない。深鉢形(精製土器)の口縁部突起は山形や瘤状などがあり、口縁直下で横位にめぐる刻みなどの施された横位の陸帯は136・137・149・150などで多段化している。

深鉢形土器(粗製土器)の沈線文土器は文様が極端に簡略された154などがあり下限付近に位置していると思われる。有頭鉢形土器は口縁部の開きや頸部部の括れが弱くなる傾向を継承していくことが把握できる。無頭の鉢形土器は、現状で良好な伴出事例が認められず様相は不明である。また本段階の特徴として大きく開く器形の浅鉢形土器の構成がある。164~166は外反しながら大きく開くもので、内面に重層化した横位の沈線文や四分点などに渦巻き文などが施されるものである。また内湾気味に開く167なども認められる。

注口土器は伴出資料での好例は認められず、様相は明瞭ではない。胴部が中段階では算盤玉状を呈するものが主体であるが、新段階後半では球状を呈するものが主体的となるため、前後どちらかの傾向または過渡的な段階を示している可能性がある。小形土器も組成の一つを示していると思われるが現状では好例は少ない。(天野)

新段階後半

新段階後半は前述の通り、朝顔形の深鉢に口縁部の突起が著しく発達するとともに、口唇部直下の内面に多段化した沈線とを主とした文様が施される。石井の言うe段階に相当するが、石井が後続する加曽利B1式としてとらえる下北原遺跡14号敷石住居跡出土資料(170・180・187・190・191・193・194・200・210・221)も本段階に含めて扱っている。同住居跡出土資料は堀之内2式土器とする見解(大塚1983)と加曽利B1式土器とする見解(鈴木1980、石井1984)に分かれているが、双方の相違については解消されず、同住居跡出土資料を堀之内2式の範疇とするか加曽利B1式に含めるか定まっていない。ここではあくまで便宜的にはあるが、加曽利B1式との境界を、精製土器の口縁部を飾ってきた紐線文と8の字状添付文の消失と、横帯文を除いた斜行文・三角文をはじめとする各文様系統の途絶、あるいは無単位横帯文への収斂へ、また堀之内1式から2式へと存続してきた下北原系土器の消失に置くものとした。

稲荷山貝塚第2地点II-1層出土資料(177・185・189・196~199・203~205・207・208・224)、華藏台遺跡35号住居出土資料(169・171~175・183・184・186・188・192・201・206・209・211・212・215・218・222)、下北原遺跡14号敷石住居跡出土資料(上述)を基準とする。

新段階後半においては朝顔形深鉢の各文様の系統の退潮傾向がよいよ顕著なものとなり、入り組み文・渦巻き文、懸垂文・対孤文はほぼ途絶する。各文様の系統は斜行文・三角文、重孤文、枠状文、横帯文に収斂し、特に古段階・中段階から認められていたがごく限られた存在であった枠状文(178~184)と横帯文(185~200)が主体を占めるようになる。また重孤文は上下の帯縄文を孤状の帯縄文が繋ぐ斜行文・三角文・懸垂文・対孤文に共通した前段階までの構成から、幅の狭まった上下の沈線間に孤状の文様を施したもの(176)になる。下端区画による文様帯の成立と上下の横帯間をX字状・菱形文・渦巻き文・斜行文・懸垂・対孤文・重孤文で連絡あるいは埋めることを堀之内2式における朝顔形深鉢の文様構成の典型とすれば、枠状文や横帯文の隆盛に示されるように文様の狭小化が進んだことを(三角文・斜行文は残るが)本段階の特徴とすることができる。口縁部突起の発達も文様の狭小化とともに新段階後半を特徴づけるもので球頭状になった177・186をはじめとし、191・193・194などはその典型である。一方深鉢にはこうした突起を持たないものも多い。

朝顔形深鉢以外の器種については、下北原系土器は少数ながら共伴事例が知られ(201)、本段階まで存続するものとしてよいだろう。ただ下北原系土器と粗製深鉢については、今回集成した資料の中に良好な共伴にめぐまなかったこともあり、事例を抽出することができず、その具体的な様相について必ずしも明らかにできなかった。

有頸鉢形土器(203~210)は豊富な事例が知られ、前々段階、前段階に引き続いて土器組成の一角を占めている。堀之内1式以来の沈線や多条化沈線による文様(206・209)も見られるが、新段階に入ると、朝顔形深鉢に共通する紐線や8の字状添付文や沈線間への充填縄文あるいは縄文施紋が多く認められる(203~205・207)。また頸部の括れは弱くなり、器高に比して口径が大きくなる傾向はなおいっそう進む。

	深鉢形土器(精製土器)	X字状文・菱形文	入組文・渦巻文
古段階前半	 1	 2  3	 4  5  6  7  8
古段階後半	 30  31  32	 33  34  35	 36  37  38  39  40  41  42  43  44
中段階			 82  83  84  85  86
新段階前半			 133  134
新段階後半	各段階内における土器配置の上下関係は、必ずしも時間的前後を示すものではない。		

第2図 神奈川県における縄文時代文化の変遷Ⅸ その1 (S=1/8)

浅鉢形土器は新段階に入ると事例が多数知られるようになり、その前半後半を含めて新段階における特徴の一つとすることができるとも考えられる。この浅鉢形土器を比較的顕著に組成する傾向は続く加曽利B1式に引き継がれる。

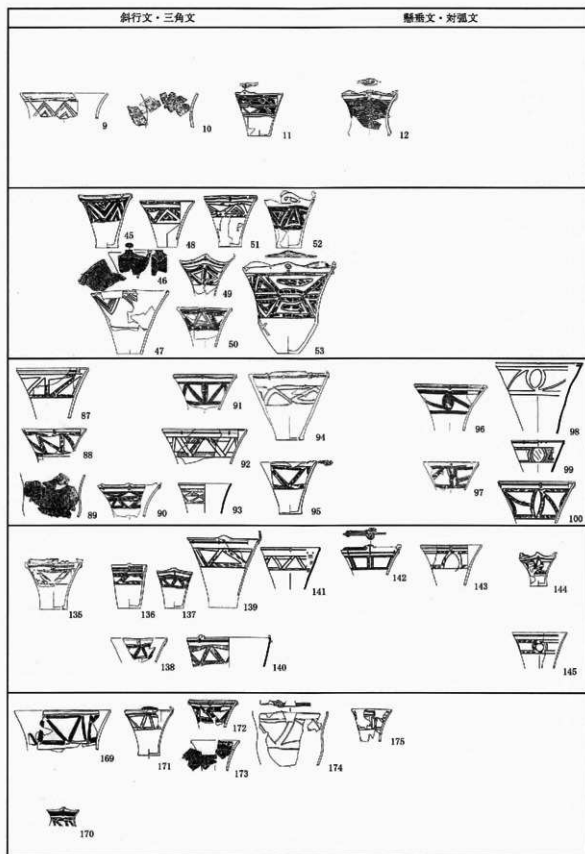
注口土器はこの時期に頭部の発達が著しくなる(215~219)。あわせて中段階以来のそろばん玉形を呈する器形に対し、球形の器形(216・221)が出現する。注口土器の文様は、沈線あるいは東沈線による注口土器独特の精緻なものが描かれ、他の器形の文様とは一線を画する。ただ、図に示してはいないが、新段階後半の神奈川県域においては極めて僅かながらこの注口土器の装飾が朝顔形深鉢など他器種に施される例があり、注口土器が一端を担っていた儀礼行為の当該地域における高まりと関連付ける考えがある(秋田1997)。

小形土器も質・量ともに増大する。通常の深鉢を小形化したもの(222・223)の他、丁寧に製作された小形の盃形土器(224)や鉢形土器(225)などがあり、新段階後半を特徴づけている。またこうした小形の鉢形土器の存在は前述した浅鉢形土器などとともに加曽利B1式・B2式へ引き継がれ発達する。

(小川)

第1表 出土遺跡・遺構一覧

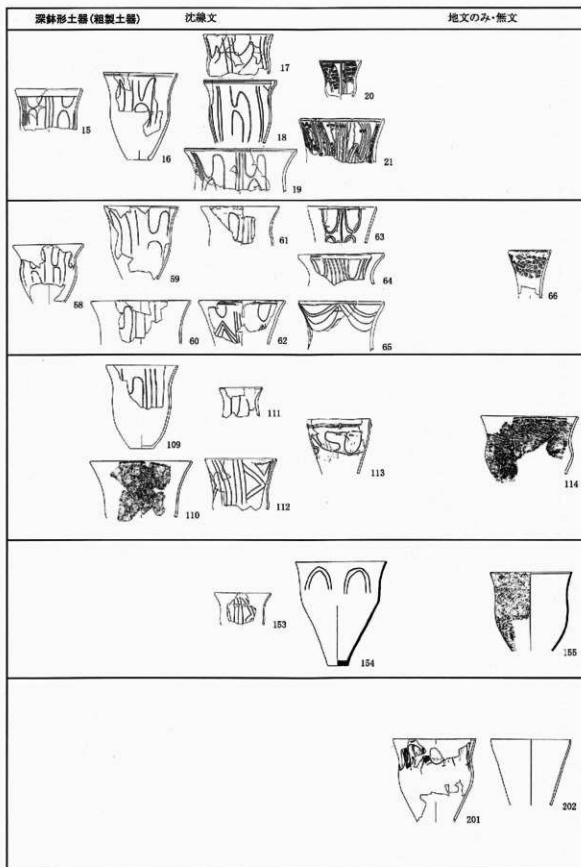
原出口遺跡	20号住居跡	1・3・6・7・10・11・13・14・16・17・24~27
稲荷山貝塚	第2地点貝層Ⅱ5層	2・8・9・12・19・20・28・29・35
東正院遺跡	—	4・5・36・48・87・92・100・101・105・107・108・116・117・133・139・142・176
稲荷山貝塚	第2地点貝層Ⅱ4層	15・21・22・34・39・41・43・50・52~55・63・65・66・71~73・77・83・85・90・91・94・96・97・102・103・115・118・121・123・126・127・130・131・135
下北原遺跡	—	18・23・31・109・136・137・143・145・147・148・150・179・181・195
華藏台遺跡	47号住居跡	30・32・213
川和向原遺跡	8号住居跡	33・38・57・59・64・74
岡上丸山遺跡	遺構外	37・84
上吉沢市場地区遺跡群A地区	J1号住居跡	40・44・49・58・60~62・67~70・75
山田大塚遺跡	土坑一括	42・88
久野北側下遺跡第IV地点	柱穴	45・104
華藏台遺跡	43号住居跡	46・56
月出松遺跡	J7号住居跡	47・82・119・122
中里遺跡	J1号敷石住居跡	51
月見野遺跡群相ノ原V地点	—	76・80
藤原大原北遺跡	5号土坑	78・81
小丸遺跡	20号住居跡	79
小丸遺跡	48号住居跡	86・89・110~114・120・124・128・132
西富貝塚	第4号跡	93・98・99・106・134・140・141・146・149・151・154~159・164・165
稲ヶ原遺跡A地点	B-11号土坑	96・129
西ノ谷貝塚	麻坑(P40号)	125
稲荷山貝塚	第1地点貝層Ⅱ②層	138・160・162
華藏台遺跡	35号住居跡	144・169・171~175・183・184・186・188・192・201・206・209・211・215・218・222
上吉沢市場地区遺跡群A地区	J2号住居跡	152・153・163・166
西富貝塚	J2号住居跡	161
稲ヶ原遺跡A地点	B-9号土坑	167・168
稲荷山貝塚	第2地点貝層Ⅱ1層	177・185・189・196~199・203~205・207・208・224
中里遺跡	遺構外	178
中里遺跡	J4~7号配石	182
小丸遺跡	22号住居跡	212・216
華藏台遺跡	48号住居跡	217・219・220・223
下北原遺跡	J14号敷石住居跡	170・180・187・190・191・193・194・200・202・210・214・221・225



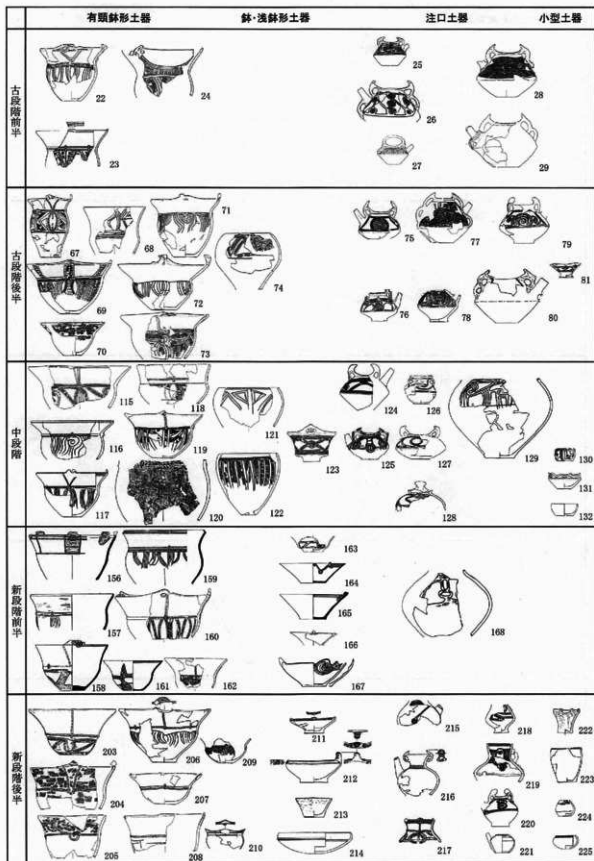
第3図 神奈川県における縄文時代文化の変遷区

	重弧文	蛇行文	杵状文	横帯文
古段階前半	 13			 14
古段階後半	 54  55	 56	 57	
中段階	 101  102  103	 104  105  106	 107  108	
新段階前半	 146	 147  148  149	 150  151  152	
新段階後半	 176  177	 178  179  180  181  182  183  184	 185  186  187  188  189  190  191  192  193  194  195  196  197  198  199 200	

第4図 神奈川県における縄文2式土器編年案 その3 (S=1/8)



第5図 神奈川県における縄文時代文化の変遷Ⅱ 2式土器編年案 その4 (S=1/8)



第6図 神奈川県における堀之内2式土器編年案 その5 (S=1/8)

神奈川県内出土の弥生時代土器棺（2）

－弥生時代中期後葉から古墳時代前期－

弥生時代研究プロジェクトチーム

前回から「神奈川県内出土の弥生時代土器棺」について集成・検討を行っているところであるが、今回は弥生時代中期後葉から古墳時代前期の事例を集成する。

今回は弥生時代初頭から中期中葉までの事例を対象として、土器棺および土器棺の可能性のある事例をも含めて集成および考察を加えた。その本文中でも触れていることであるが、弥生時代中期中葉までは土器棺再葬墓が行われている時期であるのに対して、弥生時代中期中葉以降は新たな墓制として方形周溝墓が関東地方にも導入されるようになり、神奈川県内の地域においても弥生時代中期中葉以降は方形周溝墓が主たる墓制となっていくことが明らかである。しかしながら、このような墓制転換の後の時期においてなお、土器棺と考えられる状態で土器が出土することが認められ、古墳時代初頭に至るまでこのような事例が見られることもまた事実である。

今回からは主たる墓制の転換後における土器棺と類推される事例を集成し、土器棺としての共通点や地域的特長が見いだせるかどうか、先行研究を頼りとしつつ検討を試みようとするものである。

今回の土器棺集成は、弥生時代研究プロジェクトチームのメンバーで地域を分担して神奈川県内全域を対象として集成を行った。集成にあたって、時期区分は弥生時代中期後葉、弥生時代後期、古墳時代前期（弥生時代終末～古墳時代前期）に区分することとした。各遺構の時期判断は基本的に各報告書に記載された出土遺構の時期判断に従っている。文章記述のみで出土状態や出土土器の図が掲載されていない事例については、今回の集成対象から除いた。写真のみで図のない事例も同様である。また、先行集成・研究において集成されている事例においても、図が提示されていない事例については、今回は省略することとした。

今回の集成作業では、32遺跡46事例の資料を集成することが出来た。集成結果は第1表に市区町村別にまとめ、第1図から第8図に掲載した。図の掲載にあたって、土器棺の出土状況図については縮尺1/60で統一し、土器棺を構成する土器の掲載縮尺は1/8に統一した。図は報告書等に掲載された図をコピーして縮尺を揃えた。掲載図の範囲は各報告書の図を改変し、土器棺としての該当部分を抜き出して掲載した。なお、一部の資料は報告書掲載図よりも拡大掲載となったものがあるが、再トレース等は行っていない。

今回は集成した事例を提示するだけとなったが、各資料の出土状況の検討および集成結果についての分析は、次回を行う予定とする。今回の集成に遺漏等があれば、ご指摘ご教示頂けると幸いである。

（池田）

参考文献（図の出典文献は第2表を参照）

- 大島慎一 1988 「神奈川県内の墓制資料―再葬墓・土器棺墓・土坑墓―」『第9回 三県シンポジウム 東日本の弥生墓制―再葬墓と方形周溝墓―』北武蔵古代文化研究会編
坂口滋治 1991・1992 「東日本弥生墓制における土器棺墓（1）、（2）」『神奈川考古』第27号・第28号

第1表 神奈川県内出土土器集成（弥生時代中期後葉～古墳時代前期）

資料番号	所在地 (市区町村名)	遺跡名	遺構名または出土位置	時期	文献番号
1	川崎市高津区	三荷座前遺跡	環濠 覆土中	弥生時代後期	1
2	〃	三荷座前遺跡	1号方形周溝墓 西溝(1)	弥生時代後期	
3	〃	三荷座前遺跡	1号方形周溝墓 西溝(2)	弥生時代後期	
4	川崎市宮前区	野川神明社境内遺跡	1号土器棺墓	弥生時代後期	2
5	〃	野川神明社境内遺跡	2号土器棺墓	弥生時代後期	
6	〃	野川神明社境内遺跡	3号土器棺墓	弥生時代後期	
7	横浜市中区	八幡山遺跡	竈	弥生時代中期後葉	3
8	〃	境田遺跡	Y1号住居址P2	弥生時代中期後葉	4
9	〃	歳勝土南遺跡	3号方形周溝墓	弥生時代中期後葉	5
10	〃	歳勝土遺跡	S3号方形周溝墓 T1号壺棺	弥生時代中期後葉	
11	〃	歳勝土遺跡	S4号方形周溝墓 T2号壺棺	弥生時代中期後葉	
12	〃	歳勝土遺跡	T3号壺棺	弥生時代後期	6
13	〃	歳勝土遺跡	T4号壺棺	弥生時代後期	
14	〃	権田原遺跡	F区5号土坑	弥生時代中期後葉	7
15	〃	宮原遺跡	H溝内土坑	弥生時代中期後葉	8
16	〃	折本西原遺跡	7号方形周溝墓	弥生時代中期後葉	9
17	横浜市緑区	東耕地遺跡	壺棺	古墳時代前期	10
18	横浜市港北区	山王山遺跡	39号土坑	弥生時代後期	11
19	〃	山王山遺跡	1号埴輪	弥生時代後期	
20	横浜市保土ヶ谷区	上星川遺跡	第12号住居址	弥生時代後期	12
21	逗子市	沼間ポンプ場南台地遺跡	3号住居址内壺	古墳時代前期	13
22	〃	池子遺跡群No.1-A地点	第2号方形周溝墓 北溝	古墳時代前期	14
23	横浜賀市	三足谷遺跡	1号壺棺	古墳時代前期	15
24	〃	住吉遺跡	第1号住居址覆土内合わせ口壺	古墳時代前期	16
25	藤沢市	大源太遺跡	1号土坑	弥生時代中期後葉	17
26	〃	石名板遺跡第5地点	1号住居址内土坑	弥生時代中期後葉	18
27	〃	石名板遺跡第5地点	3号方形周溝墓 南溝	弥生時代中期後葉	
28	〃	石名板遺跡第5地点	4号方形周溝墓 西溝	弥生時代中期後葉	
29	〃	大庭城址公園内遺跡	方形周溝墓SD10 東溝	弥生時代後期	19
30	〃	高倉枯藪遺跡	第1号方形周溝墓 西溝	古墳時代前期	20
31	海老名市	社家宇治山遺跡	YK3号方形周溝墓 東溝	弥生時代後期	21
32	〃	中野桜野遺跡	11号方形周溝墓 北溝	弥生時代中期後葉	22
33	〃	本郷中谷津遺跡	1号方形周溝墓 東溝	弥生時代中期後葉	23
34	〃	本郷遺跡	25号方形周溝墓 北溝	弥生時代後期	24
35	〃	本郷遺跡	34号方形周溝墓 西溝	弥生時代後期	
36	〃	本郷遺跡	環濠 覆土上層	弥生時代後期	
37	寒川町	大蔵東原遺跡	6号方形周溝墓 東溝(1)	弥生時代後期	25
38	〃	大蔵東原遺跡	6号方形周溝墓 東溝(2)	弥生時代後期	
39	〃	寒川町No.14遺跡	採集資料	弥生時代後期	
40	平塚市	坪ノ内遺跡(第3地区)	SDH01(1号方形周溝墓)	弥生時代中期後葉	27
41	〃	真田・北金目遺跡群	57A・G1区SK049	弥生時代後期	28
42	〃	原口遺跡	第37号方形周溝墓 西溝周溝内土坑	弥生時代後期	29
43	〃	原口遺跡	YH22号土坑	弥生時代中期後葉	
44	〃	向原遺跡	219号住居址内土坑	古墳時代前期	
45	葉野市	砂田台遺跡	16号住居址P7	弥生時代中期後葉	31
46	小田原市	千代南原遺跡第XVI地点	9号遺構	弥生時代後期	32

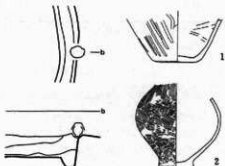
※資料番号は第1図～第8図中の遺構番号に対応、文献番号は第2表に対応

神奈川県内出土の弥生時代土器 (2)

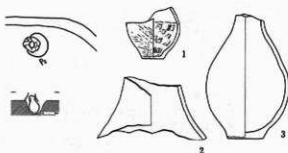
第2表 文献一覧表

文献 番号	文献(報告書)名	刊行年	編集機関
1	『三荷座前遺跡 第2地点』	1997	三荷座前遺跡発掘調査団
2	『川崎市史 資料編1』	1988	川崎市
3	『八幡山遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告31	2002	財団法人横浜市ふるさと歴史財団
4	『調査研究集録』第4巻	1979	港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
5	『大塚山神社遺跡 歳時土南遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告43	2010	財団法人横浜市ふるさと歴史財団
6	『歳時土遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告V	1975	横浜市埋蔵文化財調査委員会
7	『港北のむかし』86	1988	港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
8	『宮原』	1976	佐江戸遺跡調査会
9	『折木西原遺跡』	1980	横浜市埋蔵文化財調査委員会
10	『東橋地遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告14	1986	神奈川県立埋蔵文化財センター
11	『山王山遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告8	1985	神奈川県立埋蔵文化財センター
12	『釜谷町上星川遺跡』	1985	和武考古学研究所
13	『沼間三丁目遺跡群』	1989	沼間三丁目遺跡調査団
14	『池子遺跡群X』かながわ考古学財団調査報告46	1999	財団法人かながわ考古学財団
15	『吉井・池田地区遺跡群I』	1997	吉井・池田地区埋蔵文化財発掘調査団
16	『住吉遺跡発掘調査報告書』	1981	住吉遺跡調査団
17	『片瀬大源太遺跡発掘調査報告書』	1997	大源太遺跡発掘調査団
18	『稲荷台地遺跡群石名坂遺跡第5地点発掘調査報告書』	2009	株式会社博通
19	『大庭城址公園内遺跡発掘調査報告書』	1991	大庭城址公園整備事業区域内埋蔵文化財発掘調査会
20	『藤沢市高倉枳敷遺跡発掘調査報告書』	1988	藤沢市高倉枳敷遺跡発掘調査団
21	『辻家字治山遺跡』かながわ考古学財団調査報告264	2011	公益財団法人かながわ考古学財団
22	『中野野道遺跡』かながわ考古学財団調査報告231	2009	財団法人かながわ考古学財団
23	『本郷中谷津遺跡-第9次調査-』	1994	本郷中谷津遺跡調査団
24	『海老名本郷遺跡X』	1995	本郷遺跡調査団
25	『大蔵東原遺跡発掘調査報告書』	1993	大蔵東原遺跡発掘調査団
26	『寒川町史8 別編 考古』	1996	寒川町
27	『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書2』	1989	平塚市遺跡調査会
28	『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書9』	2012	平塚市真田・北金目遺跡調査会
29	『原口遺跡II』かながわ考古学財団調査報告104	2001	財団法人かながわ考古学財団
30	『向原遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告1	1982	神奈川県立埋蔵文化財センター
31	『砂田台遺跡I』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告20	1989	神奈川県立埋蔵文化財センター
32	『千代南原第XVI・XVII・XX地点』小田原市文化財調査報告書第154集	2010	小田原市教育委員会

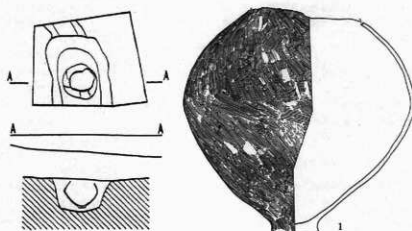
7. 八幡山遺跡 壺棺



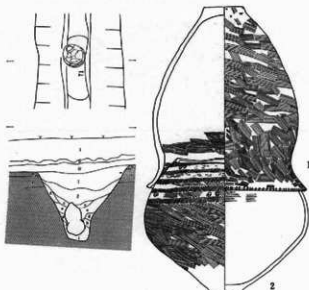
8. 埴田遺跡 Y1号住居址P2



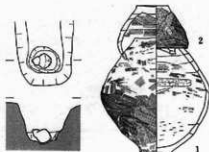
9. 歳勝土南遺跡 3号方形周溝墓



10. 歳勝土遺跡 S3号方形周溝墓 T1号壺棺



11. 歳勝土遺跡 S4号方形周溝墓 T2号壺棺

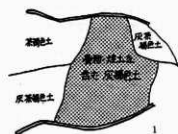
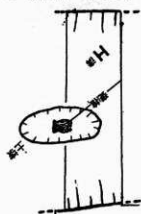


14. 榎田原遺跡 F区5号土坑

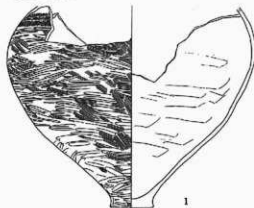


第1図 弥生時代中期後葉の土器棺 (1) [遺構図 1/60、土器 1/8]

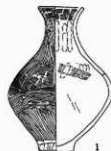
15. 宮原遺跡 H溝内土坑



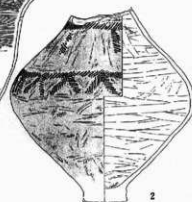
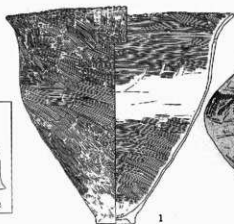
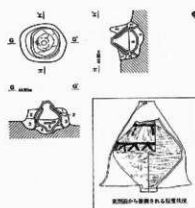
16. 折本西原遺跡 7号方形周溝墓



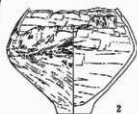
25. 大源太遺跡 1号土坑



26. 石名坂遺跡 1号住居址内土坑

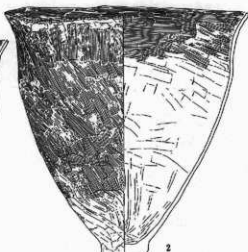
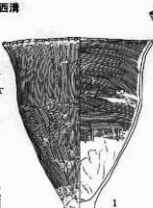
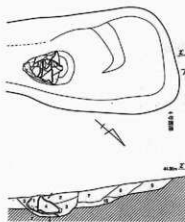


27. 石名坂遺跡 3号方形周溝墓 南溝

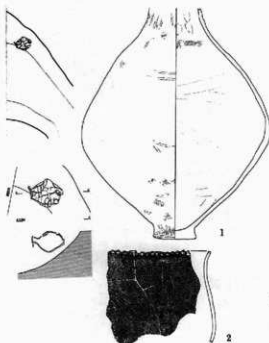


第2図 弥生時代中期後葉の土器棺（2）[遺構図 1/60、土器 1/8]

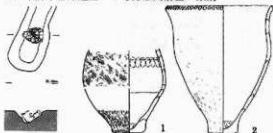
28. 石名坂遺跡 4号方形周溝墓 西溝



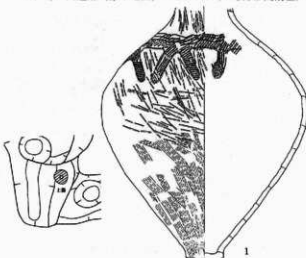
32. 中野桜野遺跡 11号方形周溝墓 北溝



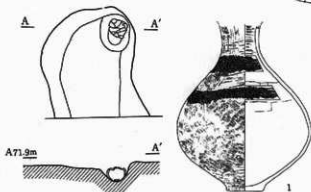
33. 本郷中谷津遺跡 1号方形周溝墓 東溝



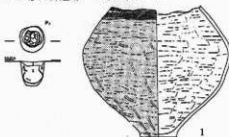
40. 坪ノ内遺跡 (第3地区) SDH01(1号方形周溝墓)



43. 原口遺跡 YH22号土坑

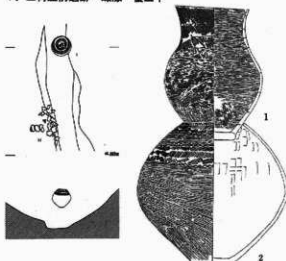


45. 砂田台遺跡 16号住居址P7

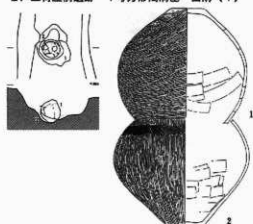


第3圖 弥生時代中期後葉の土器棺 (3) [遺構図 1/60、土器 1/8]

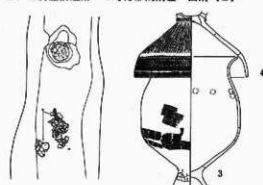
1. 三荷座前遺跡 環濠 覆土中



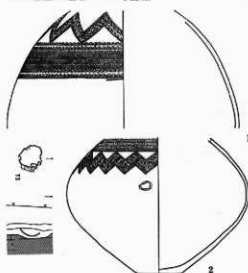
2. 三荷座前遺跡 1号方形周溝墓 西溝 (1)



3. 三荷座前遺跡 1号方形周溝墓 西溝 (2)



12. 歳勝土遺跡 T 3号査棺

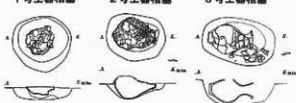


4～6. 野川神社境内遺跡

1号土器棺墓

2号土器棺墓

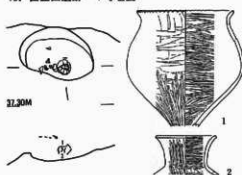
3号土器棺墓



13. 歳勝土遺跡 T 4号査棺



19. 山王山遺跡 1号埋壺

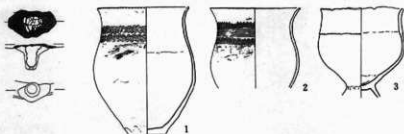


18. 山王山遺跡 39号土坑

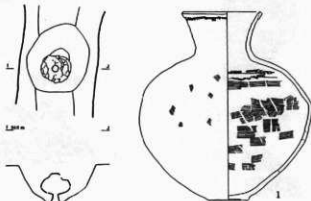


第4図 弥生時代後期の土器棺 (1) [遺構図 1/60、土器 1/8]

20. 上星川遺跡 第12号住居址



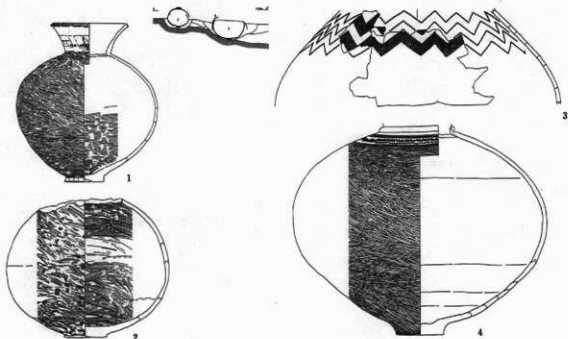
29. 大庭城址公園内遺跡 方形周溝墓SD10 東溝



37. 大蔵東原遺跡
6号方形周溝墓 東溝 (1)

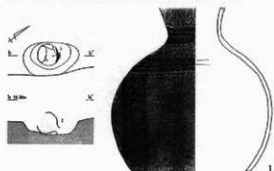


38. 大蔵東原遺跡 6号方形周溝墓 東溝 (2)

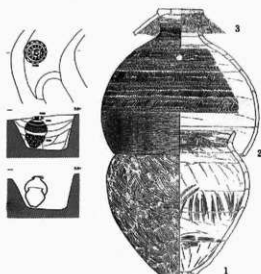


第5図 弥生時代後期の土器棺 (2) [遺構図 1/60、土器 1/8]

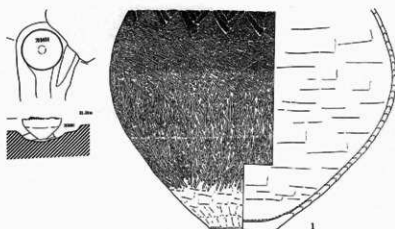
31. 社家宇治山遺跡 YK3号方形周溝墓 東溝



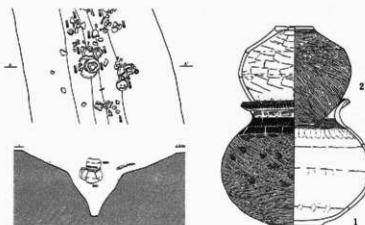
34. 本郷遺跡 25号方形周溝墓 北溝



35. 本郷遺跡 34号方形周溝墓 西溝

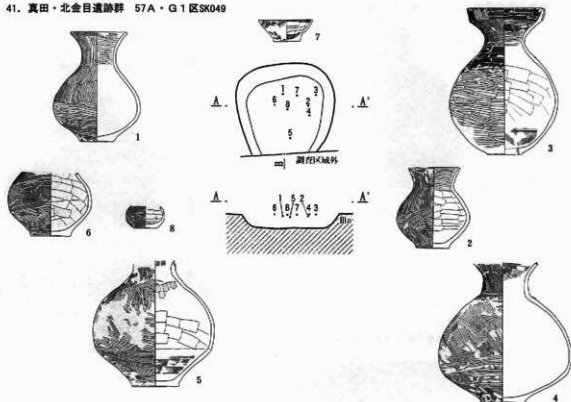


36. 本郷遺跡 環濠 覆土上層

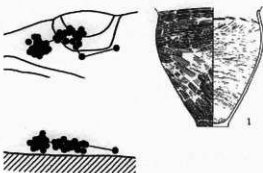


第6圖 弥生時代後期の土器棺 (3) [遺構図 1/60、土器 1/8]

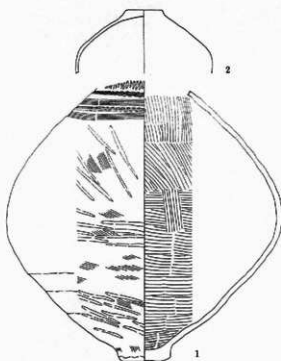
41. 真田・北金目遺跡群 57A・G1区SK049



42. 原口遺跡 第37号方形周溝墓 西溝周溝内土坑



39. 寒川町No.14遺跡 採集資料

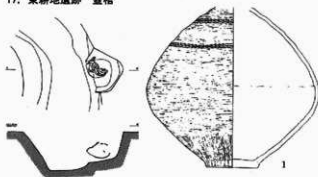


46. 千代南原遺跡第XVI地点 9号遺構



第7図 弥生時代後期の土器棺(4) [遺構図 1/60、土器 1/8]

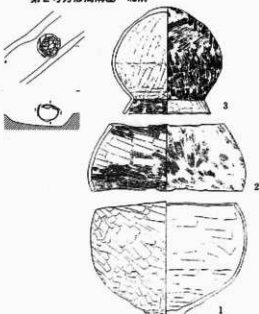
17. 東耕地遺跡 壺棺



21. 沼間ポンプ場南台地遺跡 3号住居址内壺



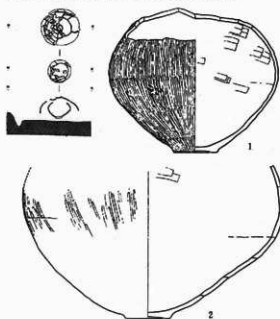
22. 池子遺跡群No. 1-A地点
第2号方形周溝墓 北溝



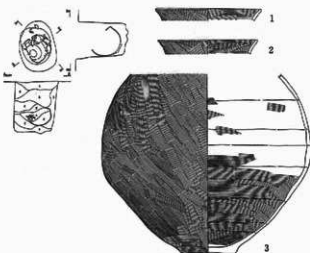
23. 三足谷遺跡 1号墓横



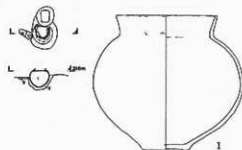
24. 住吉遺跡 第1号住居址覆土内合わせ口壺



44. 向原遺跡 219号住居址内土壺



30. 高倉枯藁遺跡 第1号方形周溝墓 西溝



第8図 古墳時代前期の土器棺 [遺構図 1/60, 土器 1/8]

考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡(10)

一通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介ー

古墳時代研究プロジェクトチーム

例 言

- ・通称「赤星ノート」の神奈川県埋蔵文化財センター保管分の古墳時代に関する項目を抜粋し、報告・掲載していくものである。
- ・研究紀要第18号には横浜市域にあたる01268番、相模原市域の10013番、横須賀市域の03007・03011番を掲載している。
- ・番号は埋蔵文化財センター年報14～18に記載されている番号に対応している。
- ・執筆分担は横浜市01268番：植山英史、相模原市10013番：新山保和、横須賀市03007番：小西絵美、03011番：柏木善治が行った。
- ・各記述は「1. 赤星ノートの内容」「2. 記載資料の整理」の2つに大きく分け、1.の細目は[調査(踏査)年月][資料保管場所][記載内容概略]とし、2.は[(遺跡及び)遺物(遺構)概要][掲載図書][掲載図書概略][小結]などとし、資料に応じ該当部分を記載した。
- ・挿図や図版は基本的に作図者のタッチを重視し、赤星氏の図、もしくは実測者の図をそのまま掲載し、写真に關しても同様である。
- ・「赤星ノート」は遺構図では略測図に寸法の数字が記載されるものが多く、遺物図は基本的に原寸に近い図ではあるが、なかにはそれから外れるものも存在するため、縮尺は任意掲載のことが多い。



第1図 対象遺跡及び遺物位置図

年報番号 横浜市 01268 瀬戸ヶ谷古墳 (7) 横浜市保土ヶ谷区瀬戸ヶ谷

1. 赤星ノートの内容

[調査(踏査)年月] 1943・1950年

[資料保管場所] 東京国立博物館

[記載内容概略]

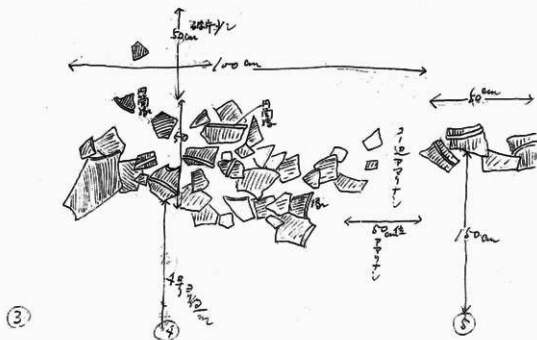
[瀬戸ヶ谷古墳と赤星ノート7]

前回に続き、12268-1(3)にあたる方眼ノートの記載内容について見ていくこととする。方眼ノートは昭和18(1943)年時の調査内容について、埴輪の出土位置や出土状況等を記載したもので、前々回・前回は後円部の西側斜面でくびれ部に向けて並ぶ埴輪列の概略図、出土位置スケッチについて紹介した。

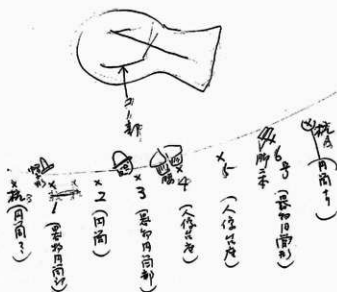
今回紹介する図はそれに続くページに描かれたものである。第2図は円筒埴輪の出土状況スケッチで、左上隅に「18年8月1日調」とインクで、右隅には縦書きで「八月一日」と鉛筆で書かれている。出土状況のスケッチ及び図の距離はすべて鉛筆の下書きをインクでそのままなぞる、または若干位置を変えて書き直したものである。図の内容は円筒埴輪が散乱して出土した状態が描かれており、口縁部には「円筒縁」の記載が為されている。ページ左から中央一帯には、斜面に平行する距離約100cm・幅50cmの間の円筒埴輪出土状況が描かれ、上方50cmは「破片少し」と書かれている。また、右側50cm程は「コノ辺アマリナシ」と記されている。その右側は距離50cmに渡って再び円筒埴輪と思われる破片の出土状況が描かれている。下端には右から③④⑤と数字が書かれており、中央の出土状況は「4号ヨリ約1m」と記され、左側の出土状況は

18年8月1日調

5/2/10



第2図 西側斜面円筒埴輪出土状況スケッチ① (縮尺70%)



第3図 墳輪出土位置スケッチ② (再掲図) (縮尺 70%)



第4図 前方部墳輪出土位置概略図 (縮尺 70%)



第5図 西側斜面円筒埴輪出土状況スケッチ② (縮尺70%)

矢印で⑤から150cmと記されている。この③④⑤の数字については明確な説明をした箇所がないが、前後関係から前々回紹介した埴輪出土位置スケッチ①②に描かれた、埴輪列に振られた左から「B・1～6・A」の番号を指していると考えられ、ここで同図を再掲する(第3図)。従って、第2図の左から中央は前々回紹介したスケッチ第3図で4と振られた人物台座より埴輪頂部側に約1m、右側は5と振られた人物台座から同じく埴輪頂部側約150cmの状況を描いたものであろう。

次のページには、前方部の埴輪の出土について記載されている。第4図には前方部端中央一帯にドットと考えられる点が描かれ、「コノ付近円筒断片散在せん由」と〇書きで「中に厚キモノアリ、ユキ等のハ片二〇〇」と記載され、右側にその破片のスケッチが描かれている。破片のスケッチの下には、先の記載から棒線が引かれ、「家の」と書かれており、器財・もしくは家形埴輪片だったと推定される。これらは、すべて鉛筆で書かれており、インクでの清書は認められない。次のページには再び前方部西側斜面の状況と考えられる状況描かれている。第5図は6(号)の器物(円筒形の台に脚二本の埴部が残存している人物埴輪)から北方100cmの位置に埴輪の断片が散在する様子が描かれている。右側には杭Aが平行して杭Aの位置「×」と径「円筒ナルが如し」と、第3図では杭Aは6の西側の埴輪列端に描かれおり、その⑤の100cm北側を描いた本図では、位置はやや右下に「×」とされている。第3図が後円部の曲がりに沿った埴輪列を表現したものに対して、本図は主軸方向に平行して描かれたものであることが、この位置関係からも判る。位置関係や距離等の表現が同じ第2図も同様に主軸方向に対して描かれたものであろう。

前々回から紹介してきた資料によって、後円部西側の中央からくびれ部一帯の斜面には、人物を中心とした埴輪列が後円部の形状に沿って樹立されており、その上方100～150cmには円筒埴輪を中心とした破片が散在している様相についてその詳細が明らかとなった。今回紹介した埴輪列上方の円筒の破片の散在は、埴輪部に樹立された個体が割れたものの崩落の可能性が考えられる。また、前方部端部中央一帯からも円筒埴輪片に形象埴輪を含む破片の出土状況が判明した。本方眼ノートは他の箇所の埴輪の出土状況についても詳細が記されており、次回引き続き出土状況についてみていくこととする。

(植山)

年報番号 相模原市 10013 勝坂祭祀遺跡(2) 相模原市磯部字勝坂 1904

1. 赤星ノートの内容

[調査(踏査)年月日]

赤星氏のメモに年月日の記載は認められない。

[資料保管場所]

個人蔵

[記載内容概略]

前号では、明治村通信の封筒に入っていた資料について紹介したが、本号も引き続き本封筒に入っていた資料について紹介する。

今回詳細する資料は、県史考古資料の神奈川県内主要遺物調査表 1 通で、県史考古資料 A と書かれている。この資料には、表面と裏面の両方に記載がある(第 6 図)。

表面には、神奈川県相模原市勝坂祭祀遺跡の出土遺物について書かれている。出土遺物の概要として、青銅饕餮鏡 3・石製模造品(鏡 1・勾玉 6・白玉 54・大白玉 3・刀子 1・剣形 16・双孔円板 2・単孔円板 2・子持勾玉 1・碧玉製管玉大形 1)・手握土器 2(木葉を押圧した底部もあり)・土師器(小壺・坏・高坏)と記載されており、土師器については丹塗りが多いと記載されている。また、土師の時期について和泉期・鬼高期と書かれている。青銅饕餮鏡について、「いずれも小形鏡で、一つは欠けている。最小の鏡は径 4.3 cm、背面に縦横文と珠文がみられ、面の反りもあって小形仿製の内ではいいに作られたものといえる」のコメントが記載されている。また下段には、遺跡の時期・性格について、「土師器から和泉期・鬼高期があることから継続的に形成されたと考えられる。石製模造品は時代により精粗・材質の異なるものがある。最低 2 グループに分けられ数回にわたって行われた祭祀跡であると理解される。」と述べられ、「子持勾玉は果下 3 番目の出土、水神信仰特有の馬形はみられない。5 世紀前半から 6 世紀へかけて水霊を祭った遺跡と証明される」と書かれている。

裏面には本遺跡の概要が記載されており、「相模川の河岸段丘が鳩川によって開析され浅い谷をつくっているが、その一部の水田中から遺物が発見された。畑を 1 メートル弱掘り下げ、水田に改変した際出土したとのことで、この地より上流約 100 メートルの崖下には湧水地点があり、かたわらに有鹿神社の石宮が建てられている。この社の伝説に蛇が度々現れることも水神らしく、社も崖下の低湿地に占地している。かつて和鏡も発見されているというが、延喜式神名帳相模国高座郡有坂神社との関係も考えられて興味を持たれる。口絵に原色版 現地写真と遺物写真がある。」と述べられている。その記載の下には、「関東」と眉山林羅氏の名前が記載されており、『神道考古学講座 第 2 巻 原始神道期一』『古墳時代の祭祀遺跡』との著作名が書かれている。その下段には、県下から出土した子持勾玉出土地名が記載されており、「三浦三戸 1…湧水地、湯河原竹の花遺跡 1…湧水地、勝坂 1…湧水地」と書かれている。その他に、「P16 伴出土器のこと」「小出義治氏」との記載も見られる。

2. 記載資料の整理

[遺構・遺物概要]

本資料は、神奈川県相模原市勝坂祭祀遺跡について書かれている。本遺跡は、昭和 47 年 6 月に刊行された『神道考古学講座 第 2 巻 原始神道期一』に「神奈川県勝坂」として紹介されたのが初見と見られる。記

年報番号 横須賀市 03007 鴨居なたぎり遺跡・とりがさき 浦郷町・鴨居二丁目所在

1. 赤星ノートの内容

[調査(踏査)年月]

資料が収められている封筒には株式会社蒼洋社の銘があり、封筒の宛名は赤星氏個人となっている。料金別納郵便で送られたようで、封筒に消印等の日付は残されていない。また、封筒内の資料にも日付は記載されておらず、資料に関する年月は定かではない。

[資料概略]

封筒の裏面には赤星氏の筆跡で「鴨居なたぎり資料図 とりがさき横穴分布写真(貴重資料)」と書かれており、その脇には「要保存赤」と書き添えられている。

資料は2種類のものがあり、一つ目は鳥ヶ崎洞窟に関するもの、二つ目はなたぎり遺跡に関するものである。鳥ヶ崎洞窟に関する資料には、その概略が記されていると共に、横穴についての説明が記載されている。資料に貼付された写真には複数の開口部を有する斜面がとらえられており、写真右下付近の開口部には作業をしている人の姿が小さく写り込んでいる。写真からは、斜面に穿たれた開口部が少なくとも7箇所以上あることがうかがえる。写真右端には赤色で「鳥ヶ崎洞窟□□」と書き込まれているが、赤色のインクがぼやけてしまっているため末尾2文字は判読できない状態である。

もう一方の資料については、幾度にも折りたたまれた状態で封筒に納められており、その裏面の一角には墨書きで「原史時代遺物 (鴨居八幡 なたぎり)」と記されている。開いた状態の資料は横約 109cm、縦約 77cmを測り、概ねB1判に相当する大判サイズである。資料の左端にはやや大きめの文字で書かれた「原史時代遺物(住居址発掘品)」という表題があり、紙面には考古遺物を模写したスケッチが描かれている。紙面中央には「(左)横須賀市鴨居八幡社境内」、「(右)横須賀市浦郷町なたぎり」と書かれており、それぞれ当該地からの出土遺物であることが分かる。紙面左側には鹿角製刀子柄、刀子、石製刀子模造品、鎌、骨製品、角製品、貝剣、瑪瑙製曲玉、骨製織、右側には骨製・角製品、滑石製容器、鉄鏃、土製管玉、土製小玉、土製曲玉、滑石製模造品、滑石製白玉がそれぞれ描かれている。スケッチは墨書きしたものに彩色されており、一部の遺物には鉛筆書きによるメモが認められる。

2. 記載資料の整理

[遺跡・遺物概要]

鳥ヶ崎洞窟は大正13年の山腹切崩工事に際に見えられ、同所に所在する鳥ヶ崎横穴群も同様に発見された。横穴群の正確な数は分からずおよそ60基とされており、調査が行われたのは数基である。資料に添付された写真は、その一端を写したものと考えられる。一方のスケッチに描かれた遺物は、鴨居八幡社境内貝塚及びなたぎり遺跡から出土した遺物である。赤星氏が作成したなたぎり遺跡の報告書にはこのスケッチと近似した遺物の図が掲載されていることが確認できるが、両者の時期的な前後関係は定かではない。

[掲載図書]

これらの資料が掲載された文献等は、管見に及ぶ限り見当たらない。

(小西)

引用・参考文献

- 赤星直忠 1954 『横須賀市なたぎり遺跡 横須賀市史別冊』 横須賀市博物館
 赤星直忠 1955 『神奈川県鴨居の八幡社貝塚』『日本考古学年報』3 日本考古学会
 神奈川県県民部史編集室 1979 『神奈川県史 資料編20 考古資料』 神奈川県



写真1 烏ヶ崎洞窟写真

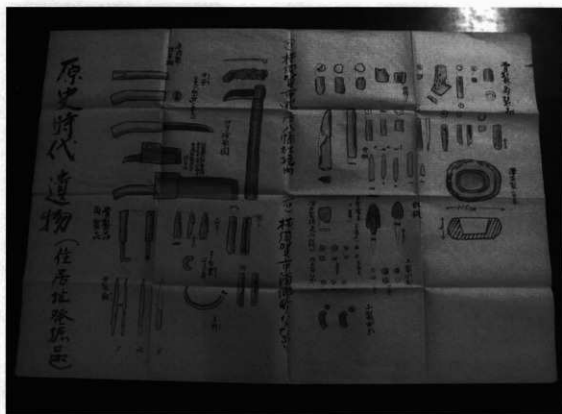


写真2 鶴居八幡社境内・なたぎり出土遺物スケッチ

年報番号 横須賀市 03011 走水神社宝物

1. 赤星ノートの内容

走水神社の祭神は日本武尊とその后弟橘媛命の二柱で、神社の創建については享保年間の火災で記録や社宝が消失し不明とされる。ただ、伝説では景行天皇の御代、東夷征討の命を受けた日本武尊から村民が冠を賜り、石櫃に納めて、社殿を建てて尊を祀ったことに始まると伝わる。

ノートの資料には有形文化財台帳（調査報告書）〔横須賀市教育委員会〕と実測図3枚がある。台帳には曲玉の詳細が記載され、実測図には①曲玉2と金環1、②提瓶1、③フラスコ形長頸瓶1が描かれている。

〔調査（踏査）年月〕

文化財台帳には、総合調査の年月日として「昭和51年12月12日」、調査者「赤星直忠」と記される。『横須賀市文化財総合調査報告書』を刊行する際の実地調査であったと推察される。

〔資料保管場所〕

文化財台帳には「走水神社 走水 2-12-5」と記されるが、氏子の方への聞き取りでは（平成25年1月3日現在）、観音崎自然博物館に納めたとのことであった。しかし、同館学芸員の方も所在は知らず、その後の横須賀市自然・人文博物館への聞き取りでも所在は不明であった。

〔記載内容概略〕

文化財台帳には曲玉の詳述があり、所見には「木箱に金銅環と2個の曲玉が納められているので、何れの曲玉が伊勢山崎出土か不詳」と記される。伝来には「同じ木箱に納められており、次の如く社務所口にある。1個は明治39年走水伊勢山崎海岸より発見。1個は明治41年走水低砲台（旗山）海岸より発見」とある。法量は「(1)長2.9cm淡藍色、(2)長3.1cm藍色」、品質は「(1)頭がやや大きい（淡藍色の方）、(2)コ字形（藍色の方）」とされる。

実測図は3枚あるが、①曲玉・金環には、玉類箱蓋裏の墨書として「明治41年海軍発電所工事ノタメ走水伊勢山元神明神社跡ヨリ発見」とあるが（誤りと判定する）と書かれている。また、伊勢山崎海岸発見のものには「伊セ山3」とあり、もう一点の曲玉には「走水低砲台海岸」と記される。

金環は「金環1個 金（銅？）環 径6分 明治39年伊勢山崎より発見」「伊セ山2」とあり、いずれもほぼ実寸大の図が描かれる。その他、土器の情報として「陶焼平形径8寸 大正13年字楯ノ木より発掘」（提瓶）、「陶焼丸形径5寸 明治35年伊勢山崎より発掘」（フラスコ形長頸瓶）とある。

土器のうち、②提瓶は「走水神社宝物」「須恵器環耳付提瓶」「大正13年字楯ノ木より発掘」「高27cm、胴径23.8cm、厚14.9cm、口径10cm」と記され、図がほぼ実寸大であることがわかる。③フラスコ形長頸瓶は「走水神社宝物」「須恵器退化横瓶（口縁欠一平にすっている）」「明治39年伊勢山崎より発掘」「高17.5cm、胴径16.2cm、15.2cm」「伊セ山1」とあり、こちらもほぼ実寸大である。

2. 記載資料の整理

〔遺構・遺物概要〕

曲玉は2点で淡藍色は頭がやや大きく、藍色はコ字形と評されている。長さは2.9cmと3.1cmで、いずれも瑪瑙製とされ、図での欠損等はみられない。総合調査報告書の写真からは、肉厚な身であることが窺える。金環は1点で金銅製とされ「金色少々残る」と記される。外径は最大2.1cm、内径1.1cmで、環の直径は0.5mmほどである。

提瓶は環状の把手に存在感があり、大振りである。器高は27cm、口縁部高は5cm程度で、体部は片側が扁平で口縁部が短いという特徴がある。フラスコ形長頸瓶は体部から頸部の一部まで遺存し、胴部最大径は16.2cm、頸部端は「平に擦られている」ために長さが不明である。図からは成形の指あとが縦方向に観察される。

[掲載図書]

横須賀市教育委員会 1981『横須賀市文化財総合調査報告書』第1集 一浦賀地区一

[掲載図書概略]

先にふれた遺物に関する概要が記されるとともに、全ての遺物の写真が掲載されている。

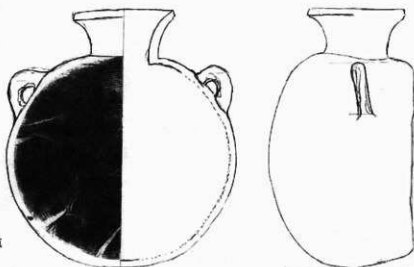
[小結]

横須賀市の走水神社の周辺には、伊勢山崎横穴群 (No.304)、壺ノ木横穴群 (No.328)、入の奥横穴群 (No.402) など多くの横穴墓群が存在している。図にメモされた「伊セ山1・2・3」という記述のものは伊勢山崎や入の奥横穴群付近で、字壺ノ木と記される提瓶は壺ノ木横穴群が近く、他の曲玉は旗山海岸との記述から旗山崎台場跡 (No.109) 付近であったことが窺える。旗山崎には走水低砲台が明治19年に竣工されるが、箱書きの「明治41年」からは起工時出土とは思われない。走水神社氏子の方の話では、神社前面の道路は軍用として整備されたといい、これらの遺物はその際に出土したことも想起される。

提瓶に限れば、器形からおおよそ6世紀後半代という時期があげられる。これを横穴墓出土遺物と仮定すれば、県内において築造が始まる初現的な時期の遺物とみなすことができる。

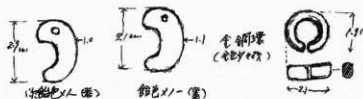
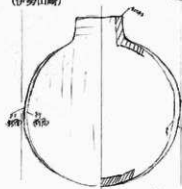
なお、本調査には稲村繁氏 (横須賀市自然・人文博物館) のご協力を得ましたことを申し添えます。(柏木)

提瓶 (壺ノ木)



フラスコ形長頸瓶

(伊勢山崎)



曲玉 (伊勢山崎1点、旗山海岸1点)

金環 (伊勢山崎)

第7図 走水神社宝物 (装身具は約1/2、土器は約1/4)

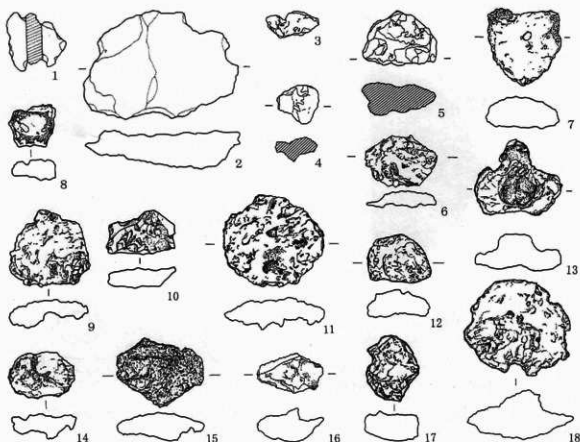
神奈川県における古代の鉄(3)

一生産関連遺物の集成一

奈良・平安時代研究プロジェクトチーム

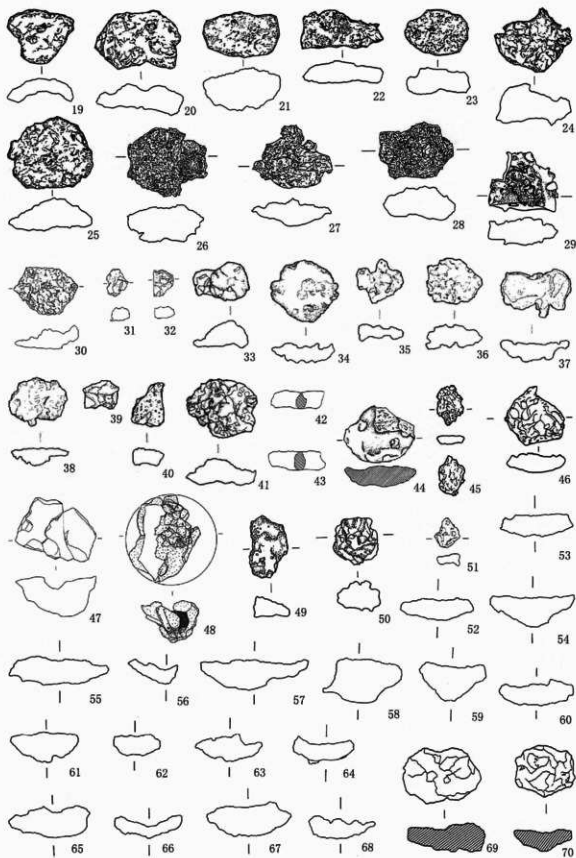
1. はじめに

奈良・平安時代研究プロジェクトチームでは一昨年度から県内各地で出土した鉄生産に関連する遺物の集成を開始した。その目的はどのような規模、施設で生産行為が行われていたのか、地域差があるのかを明らかにすることである。昨年度まで2年にわたり相模国を中心に掲載してきたが、平塚市の出土例が多いため、すべてを載せることが出来なかった。今年度は平塚市出土の鉄滓と鉄製品、および旧武蔵国(横浜・川崎地域)の鉄生産関連遺物を掲載する。紙面の都合上、生産遺構と補遺を掲載することが出来なかったが、今年度で集成の大半は終了した。次年度は未掲載分の掲載と、ここで得られたデータを元にした分析に着手したいと考えている。鉄滓については、出土量が多い場合は遺構毎に点数・重量のみ報告されている場合が多い。図化・計測されている鉄滓は、計測値を掲載したが、それ以外は点数・重量のみ記載した。他の遺物では、報告書に記載が無く、図がある場合は計測して記載した。また、図版はすべて1/4に統一した。

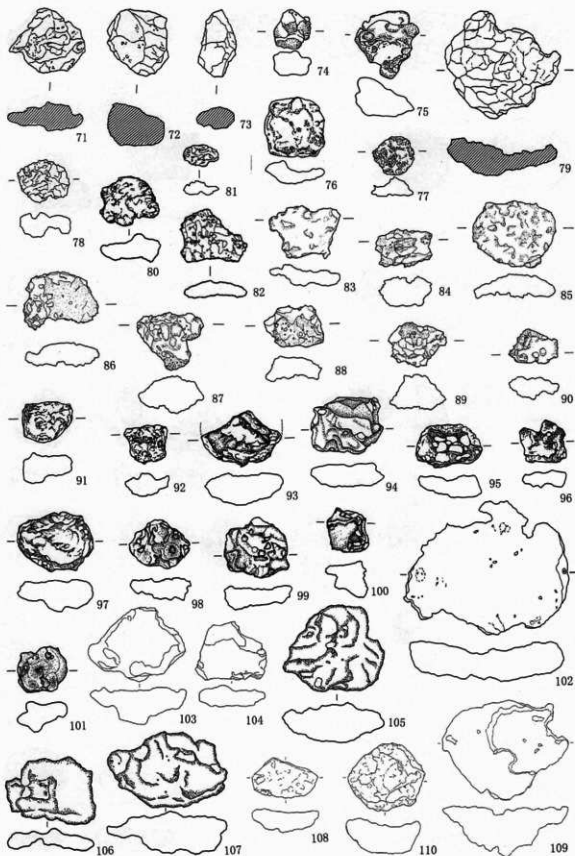


第1図 鉄生産関連遺物 1

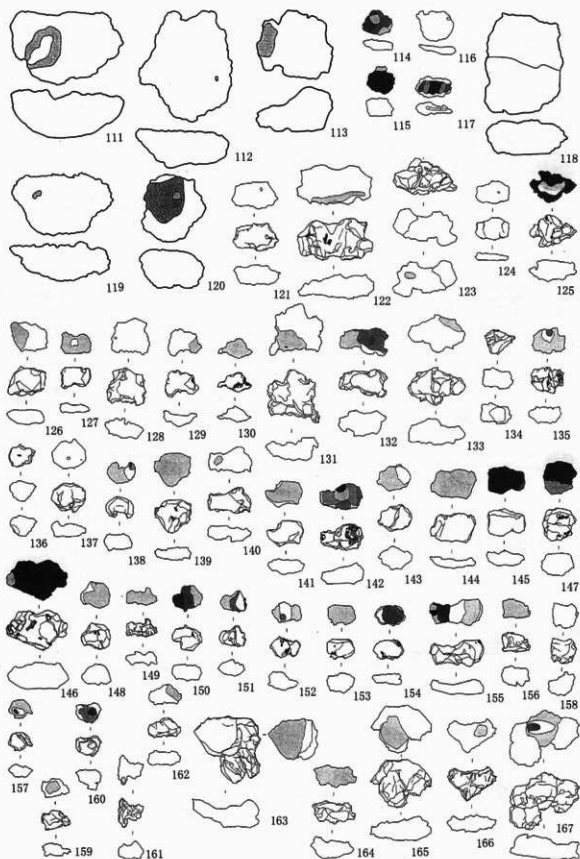
神奈川県における古代の鉄(3)



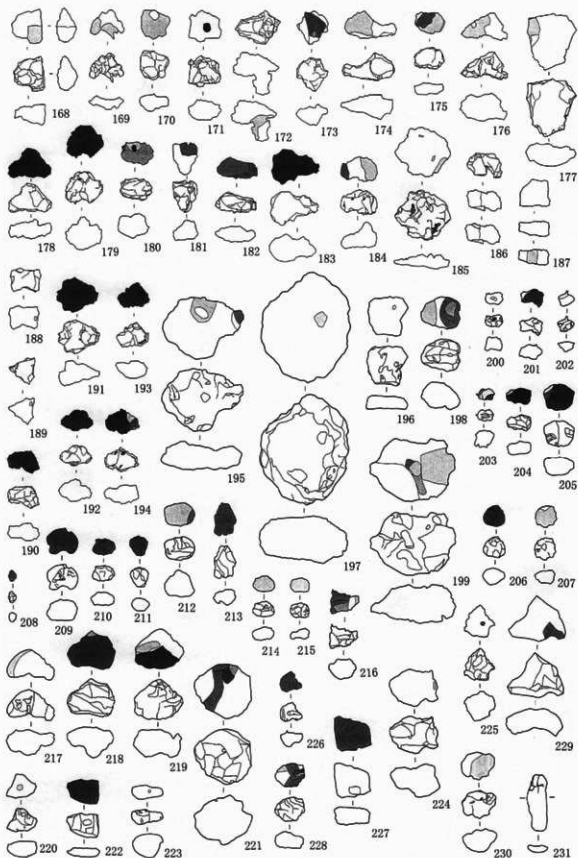
第2図 鉄生産関連遺物2



第3図 鉄生産関連遺物 3



第4図 鉄生産関連遺物4



第5図 鉄生産関連遺物5



第6図 鉄生産関連遺物 6



第7図 鉄生産関連遺物7

【鉄滓・銅滓】

平塚市

No.	器種名	遺跡名	出土遺構	出土位置	遺存状況	造 量 (cm)				遺構の時期	備考	文献名
						長さ	幅	厚さ	重量(g)			
	鉄滓	神明久保遺跡	A-SI01	覆土		-	-	-	496.2		10点	明石新他1991『神明久保遺跡-第1地区-』平塚市埋蔵文化財シリーズ 第19集平塚市教育委員会
	鉄滓	神明久保遺跡	A-SI02	覆土		-	-	-	3675.0		73点	
	鉄滓	神明久保遺跡	A-SI03	覆土		-	-	-	2431.2		56点	
	鉄滓	神明久保遺跡	A-SI04	覆土		-	-	-	4620.2		116点	
	鉄滓	神明久保遺跡	A-SI06	覆土		-	-	-	193.8		3点	
	鉄滓	神明久保遺跡	A-SI07	覆土		-	-	-	73.0		15点	
	鉄滓	神明久保遺跡	A-SI08	覆土		-	-	-	670.4		31点	
	鉄滓	神明久保遺跡	A-SI09	覆土		-	-	-	1949.2		40点	
	鉄滓	神明久保遺跡	A-SI10	覆土		-	-	-	32.4		1点	
	鉄滓	神明久保遺跡	A-SI11	覆土		-	-	-	497.4		17点	
	鉄滓	神明久保遺跡	A-SI12	覆土		-	-	-	226.6		4点	
	鉄滓	神明久保遺跡	A-SI13	覆土		-	-	-	719.2		16点	
	鉄滓	神明久保遺跡	A-SD群	覆土		-	-	-	1251.4		21点	
	鉄滓	神明久保遺跡	A-SI15	覆土		-	-	-	209.2		7点	
	鉄滓	神明久保遺跡	A-SI16	覆土		-	-	-	424.2		6点	
	鉄滓	神明久保遺跡	A-SI17	覆土		-	-	-	49.2		2点	
	鉄滓	神明久保遺跡	A-SI18	覆土		-	-	-	54.6		3点	
	鉄滓	神明久保遺跡	A-SI19	覆土		-	-	-	1936.2		12点	
	鉄滓	神明久保遺跡	A-SI20	覆土		-	-	-	38.8		2点	
	鉄滓	神明久保遺跡	A-SI22	覆土		-	-	-	41.0		3点	
	鉄滓	神明久保遺跡	A-SI23	覆土		-	-	-	532.6		6点	
	鉄滓	神明久保遺跡	A-SI24	覆土		-	-	-	635.2		7点	
	鉄滓	神明久保遺跡	A-SI25	覆土		-	-	-	28.0		2点	
	鉄滓	神明久保遺跡	A-SI27	覆土		-	-	-	3353.2		32点	
	鉄滓	神明久保遺跡	A-01溝	覆土		-	-	-	1199.4		19点	
	鉄滓	神明久保遺跡	A-01集	覆土		-	-	-	3074.6		23点	
	鉄滓	神明久保遺跡	B-SI01	覆土		-	-	-	242.2		3点	
	鉄滓	神明久保遺跡	B-SI03	覆土		-	-	-	664.2		3点	
	鉄滓	神明久保遺跡	B-SI04・5	覆土		-	-	-	148.6		6点	
	鉄滓	神明久保遺跡	B-SI08	覆土		-	-	-	401.4		6点	
	鉄滓	神明久保遺跡	B-SI12	覆土		-	-	-	113.2		2点	

No.	器種名	遺跡名	出土遺構	出土位置	遺存状況	法 量(cm)			遺構の時期	備考	文献名
						長径	短径	厚み			
	鉄滓	神明久保遺跡	B-SI16	覆土		-	-	-	287.8	8点	明石新他1991『神明久保遺跡-第1地区-』平塚市埋蔵文化財シリーズ 第19集平塚市教育委員会
	鉄滓	神明久保遺跡	B-SI18	覆土		-	-	-	38.0	1点	
	鉄滓	神明久保遺跡	B-SI21	覆土		-	-	-	164.8	1点	
	鉄滓	神明久保遺跡	B-P921	覆土		-	-	-	98.0	1点	
	鉄滓	神明久保遺跡	B-O1溝	覆土		-	-	-	128.4	2点	
	鉄滓	神明久保遺跡	B-O1井戸	覆土		-	-	-	30.8	1点	
	鉄滓	神明久保遺跡	C-SI01	覆土		-	-	-	166.6	2点	
	鉄滓	神明久保遺跡	C-SI03	覆土		-	-	-	395.8	4点	
	鉄滓	神明久保遺跡	C-SI04	覆土		-	-	-	1845.2	46点	
	鉄滓	神明久保遺跡	C-SI05	覆土		-	-	-	943.6	39点	
	鉄滓	神明久保遺跡	C-SI06	覆土		-	-	-	152.0	16点	
	鉄滓	神明久保遺跡	C-SI07	覆土		-	-	-	422.8	15点	
	鉄滓	神明久保遺跡	C-SI09	覆土		-	-	-	53.6	10点	
	鉄滓	神明久保遺跡	C-SI10	覆土		-	-	-	184.4	1点	
	鉄滓	神明久保遺跡	C-SI14	覆土		-	-	-	35.4	2点	
	鉄滓	神明久保遺跡	C-SI18	覆土		-	-	-	91.8	6点	
	鉄滓	神明久保遺跡	C-SI19	覆土		-	-	-	205.8	2点	
	鉄滓	神明久保遺跡	C-SI22	覆土		-	-	-	745.6	18点	
	鉄滓	神明久保遺跡	遺構外	覆土		-	-	-	41493.4	580点	
1	鉄滓	神明久保遺跡	SI03	床面	1/2以下	3.0	2.6	0.8	17.0		若林勝司他1991『神明久保遺跡-第4地区-』平塚市埋蔵文化財調査報告書第8集平塚市教育委員会
2	鉄滓	神明久保遺跡	SD01	覆土	-	8.2	5.3	1.6	116.4		
3	鉄滓	神明久保遺跡	SD02	覆土		5.3	2.7	1.4	35.0	11世紀前半	
4	鉄滓	神明久保遺跡	SD03	覆土		4.3	4.0	2.0	38.0	10世紀後半～11世紀前半	小島弘義他1988『神明久保遺跡第5地区』平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書3 昭和63年度発掘調査 六ノ坂遺跡ほか8ヶ所』平塚市教育委員会
5	鉄滓	神明久保遺跡	SE01	覆土		7.8	5.5	3.3	170.0		
6	鉄滓	神明久保遺跡	SI01 竪穴住居址	覆土		5.2	7.3	15.5	82.2		
7	鉄滓	神明久保遺跡	SI04 竪穴住居址	覆土		7.4	7.4	3.0	250.0		菅沼圭介他2003『神明久保遺跡第8地区』平塚市埋蔵文化財シリーズ38 平塚市教育委員会
8	鉄滓	神明久保遺跡	SI018 竪穴住居址	覆土		4.3	4.5	2.2	81.6		
9	鉄滓	神明久保遺跡	SI08 竪穴住居址	覆土		8.0	8.0	2.5	168.4		
10	鉄滓	神明久保遺跡	SI09 竪穴住居址	覆土		4.5	7.0	2.0	91.4		
11	鉄滓	神明久保遺跡	SI10 竪穴住居址	覆土		9.5	10.5	2.8	288.2		

No.	郡名	遺跡名	出土遺構	出土位置	遺存状況	法 量(cm)				遺構の時期	備考	文献名
						長さ	幅	厚み	重量(g)			
12	鉄滓	神明久保遺跡	SI10 竪穴住居址	覆土		5.0	6.7	2.6	142.8			菅沼圭介他2003『神明久保遺跡第8地点』平塚市埋蔵文化財シリーズ38 平塚市教育委員会
13	鉄滓	神明久保遺跡	SI14 竪穴住居址	覆土		7.5	8.8	3.4	175.4			
14	鉄滓	神明久保遺跡	SI20 竪穴住居址	覆土		4.4	6.7	2.3	95.0			
15	鉄滓	神明久保遺跡	SI25 竪穴住居址	覆土		7.2	8.9	2.8	211.2			
16	鉄滓	神明久保遺跡	SI27 竪穴住居址	覆土		6.8	4.1	3.5	94.0			
17	鉄滓	神明久保遺跡	SI28 竪穴住居址	覆土		5.4	6.7	2.7	155.4			
18	鉄滓	神明久保遺跡	SI33 竪穴住居址	覆土		9.8	10.9	5.1	367.6			
19	鉄滓	神明久保遺跡	SI35 竪穴住居址	覆土		5.5	6.8	1.9	90.2			
20	鉄滓	神明久保遺跡	SI35 竪穴住居址	覆土		5.8	8.5	2.8	225.4			
21	鉄滓	神明久保遺跡	SI36 竪穴住居址	覆土		3.8	8.5	2.2	78.6			
22	鉄滓	神明久保遺跡	SD1溝状遺構	覆土		4.8	7.9	4.2	203.8			
23	鉄滓	神明久保遺跡	SD4溝状遺構	覆土		4.8	6.5	2.7	118.6			
24	鉄滓	神明久保遺跡	SD5溝状遺構	覆土		7.9	6.7	3.5	161.4			
25	鉄滓	神明久保遺跡	SD5溝状遺構	覆土		7.6	8.5	3.1	229.4			
26	鉄滓	神明久保遺跡	ビット51	覆土		7.0	8.0	3.0	181.4			
27	鉄滓	神明久保遺跡	ビット51	覆土		6.0	8.2	2.8	88.4			
28	鉄滓	神明久保遺跡	ビット74	覆土		6.0	7.7	3.0	161.0			
29	鉄滓	神明久保遺跡	ビット225	覆土		6.2	7.1	3.0	188.6			
30	鉄滓	神明久保遺跡	SI.1 竪状遺構			5.1	6.6	2.5	84.0		碗型鉄滓	上原正人他2006『神奈川 平塚市 神明久保遺跡-第10地点-』テイク アンド株式会社
31	鉄滓	神明久保遺跡	SI.1 竪状遺構			2.2	3.0	1.5	5.0			
32	鉄滓	神明久保遺跡	SI.1 竪状遺構			2.1	2.8	1.2	14.0			
33	鉄滓	橋之内遺跡	SI40			5.7	4.0	2.5	88.0			
34	鉄滓	橋之内遺跡	SI49			7.1	6.5	2.9	99.4			大野悟他2000『橋之内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』三共株式会社平塚工場 建設に伴う発掘調査 三共株式会社
35	鉄滓	橋之内遺跡	SK12			-	-	-	10.2			
36	鉄滓	橋之内遺跡	SD14			4.7	5.8	2.7	78.2			
37	鉄滓	橋之内遺跡	ビット216			7.3	4.7	1.9	89.2			
38	鉄滓	橋之内遺跡	ビット216			6.1	4.8	1.8	82.2			
39	鉄滓	橋之内遺跡	SK01			4.0	2.8	-	25.4			

No.	器種名	遺跡名	出土遺構	出土位置	遺存状況	法 量 (cm)				遺構の時期	備考	文献名
						長さ	短径	厚み	重量(g)			
40	鉄滓	橋之内遺跡	SX03			-	-	-	37.8			大野哲他2000『橋之内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』三共株式会社平塚工場建設に伴う発掘調査 三共株式会社
41	鉄滓	橋之内遺跡	遺構外			6.2	7.2	2.8	141.8			
42	鉄滓?	山王A遺跡	9号溝状遺構	覆土		5.3	1.8	1.0	21.2	9世紀後半～10世紀前半	結が著しい	
43	鉄滓?	山王A遺跡	9号溝状遺構	覆土		5.9	2.0	1.0	26.8	9世紀後半～10世紀前半	結が著しい	上原正人他1993『山王A遺跡 第2地点』『山王A遺跡 第2・3地点-』平塚市埋蔵文化財調査報告書 第10集 平塚市教育委員会
44	鉄滓	山王A遺跡	4号住居址	覆土		6.0	7.3	2.0	88.6		下部は取版型	
45	銅滓	山王A遺跡	SB06			4.2	3.0	0.9	27.0	時期不詳		栗山雄輝他2006『山王A遺跡 第4地点』平塚市埋蔵文化財シリーズ41 平塚市教育委員会
46	鉄滓	山王A遺跡	遺構外			6.1	5.7	2.0	70.6			
47	鉄滓	四之宮山王B遺跡	SI02	覆土	2/3	8.5	6.2	4.2	238.0	10世紀第2～3四半期		細野高伯1987『四之宮山王B遺跡』平塚市埋蔵文化財シリーズ4 平塚市教育委員会
48	銅滓	四之宮山王B遺跡	遺構外		1/2	9.6	4.2	-	-			
	鉄滓	山王B遺跡	遺構外			9.0	8.3	3.3	2803.0			菅沼圭介他1998『山王B遺跡第3地点』『山王久保遺跡他』平塚市埋蔵文化財シリーズ31 平塚市教育委員会
49	鉄滓	山王B遺跡	P18	覆土	-	4.0	6.2	2.1	63.6	-		菅沼圭介他2002『山王B遺跡第12地点』『御殿B/山下長者屋敷/御宿宮/山王B』平成10～11年度市内遺跡緊急調査報告 平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書10 平塚市教育委員会
50	鉄滓	山王B遺跡	P47	覆土	-	4.4	4.8	3.3	85.2	-		菅沼圭介他2012『山王B遺跡第5・6地点』平塚市埋蔵文化財シリーズ45 平塚市教育委員会
51	鉄滓	山王B遺跡	SI11	覆土	完形	[3.1]	[2.1]	[1.2]	4.6			
	鉄滓	高林寺遺跡	1K-SI01	-	-	-	-	-	64.5	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	1K-SI03	-	-	-	-	-	213.3	-	3点	
	鉄滓	高林寺遺跡	1K-SI04	-	-	-	-	-	123.4	-	11点	
	鉄滓	高林寺遺跡	1K-SI05	-	-	-	-	-	79.6	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	1K-SI06	-	-	-	-	-	61.5	-	3点	
	鉄滓	高林寺遺跡	1K-SI07	-	-	-	-	-	33.7	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	1K-SI09	-	-	-	-	-	80.8	-	2点	
	鉄滓	高林寺遺跡	1K-SI10	-	-	-	-	-	27.1	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	1K-SI11	-	-	-	-	-	76.1	-	3点	小島弘義他1984『四之宮下郷』神田・大野遺跡発掘調査団
	鉄滓	高林寺遺跡	1K-SI15	-	-	-	-	-	14.3	-	2点	
	鉄滓	高林寺遺跡	1K-SB01	-	-	-	-	-	10.1	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	1K-SB01(P2)	-	-	-	-	-	270.5	-	2点	
	鉄滓	高林寺遺跡	1K-SB01(P3)	-	-	-	-	-	13.4	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	1K-SB01(P17)	-	-	-	-	-	60.8	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	1K-SB02(P05)	-	-	-	-	-	5.2	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	1K-SB06(P27)	-	-	-	-	-	66.8	-	1点	

No.	器種名	遺跡名	出土遺跡	出土位置	遺存状況	法 量(cm)				遺物の時期	備考	文献名
						長径	短径	厚み	重量(g)			
	鉄洋	高林寺遺跡	1K-P37	-	-	-	-	-	13.7	-	1点	
	鉄洋	高林寺遺跡	1K-SF01	-	-	-	-	-	124.2	-	1点	
	鉄洋	高林寺遺跡	1K-SD01	-	-	-	-	-	4414.2	-	40点	
	鉄洋	高林寺遺跡	1K-SF02	-	-	-	-	-	150.6	-	5点	
	鉄洋	高林寺遺跡	1K-G	-	-	-	-	-	321.9	-	8点	
	鉄洋	高林寺遺跡	2K-SI01	-	-	-	-	-	135.8	-	4点	
	鉄洋	高林寺遺跡	2K-SI03	-	-	-	-	-	142	-	4点	
	鉄洋	高林寺遺跡	2K-SI04	-	-	-	-	-	32.3	-	1点	
	鉄洋	高林寺遺跡	2K-SI05	-	-	-	-	-	172.3	-	4点	
	鉄洋	高林寺遺跡	2K-SI06	-	-	-	-	-	125.5	-	3点	
	鉄洋	高林寺遺跡	2K-SI07	-	-	-	-	-	101.8	-	2点	
	鉄洋	高林寺遺跡	2K-SI08	-	-	-	-	-	33.7	-	1点	
	鉄洋	高林寺遺跡	2K-SI09	-	-	-	-	-	41.0	-	1点	
	鉄洋	高林寺遺跡	2K-SI15	-	-	-	-	-	35.9	-	1点	
	鉄洋	高林寺遺跡	2K-SI16	-	-	-	-	-	239.2	-	5点	
	鉄洋	高林寺遺跡	2K-SI17	-	-	-	-	-	211.1	-	2点	
	鉄洋	高林寺遺跡	2K-SI21	-	-	-	-	-	75.3	-	4点	小島弘義他1984『西之宮下葬』 神田・大野遺跡発掘調査団
	鉄洋	高林寺遺跡	2K-SI23	-	-	-	-	-	436.5	-	3点	
	鉄洋	高林寺遺跡	2K-SK12	-	-	-	-	-	221.0	-	1点	
	鉄洋	高林寺遺跡	2K-SX02	-	-	-	-	-	527.9	-	4点	
	鉄洋	高林寺遺跡	2K-G	-	-	-	-	-	247.9	-	6点	
	鉄洋	高林寺遺跡	3K-SI02	-	-	-	-	-	222.0	-	1点	
	鉄洋	高林寺遺跡	3K-SI03	-	-	-	-	-	1151.9	-	17点	
	鉄洋	高林寺遺跡	3K-SI04	-	-	-	-	-	202.2	-	4点	
	鉄洋	高林寺遺跡	3K-SI05	-	-	-	-	-	76.3	-	1点	
	鉄洋	高林寺遺跡	3K-SI06	-	-	-	-	-	596.5	-	12点	
	鉄洋	高林寺遺跡	3K-SI07	-	-	-	-	-	589.7	-	7点	
	鉄洋	高林寺遺跡	3K-SI08	-	-	-	-	-	22.4	-	2点	
	鉄洋	高林寺遺跡	3K-SI09	-	-	-	-	-	142.5	-	1点	
	鉄洋	高林寺遺跡	3K-SI11	-	-	-	-	-	210.2	-	1点	
	鉄洋	高林寺遺跡	3K-SI12	-	-	-	-	-	397	-	4点	
	鉄洋	高林寺遺跡	3K-SI14	-	-	-	-	-	19.3	-	1点	
	鉄洋	高林寺遺跡	3K-SI18	-	-	-	-	-	111.8	-	3点	

No.	器種名	遺跡名	出土遺物	出土位置	遺存状況	法 量 (cm)				遺物の時期	備考	文献名
						長さ	幅	厚み	重量(g)			
	鉄滓	高林寺遺跡	3IK-SI25	-	-	-	-	-	337.6	-	6点	
	鉄滓	高林寺遺跡	3IK-SB03 (SK49)	-	-	-	-	-	20.9	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	3IK-SB03 (SK57)	-	-	-	-	-	7.4	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	3IK-SB06 (SK73)	-	-	-	-	-	37.6	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	3IK-SK11	-	-	-	-	-	44.0	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	3IK-SK32	-	-	-	-	-	131.2	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	3IK-SK60	-	-	-	-	-	5.1	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	3IK-SK61	-	-	-	-	-	29.0	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	3IK-SK62	-	-	-	-	-	13.4	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	3IK-SK90	-	-	-	-	-	112.9	-	4点	
	鉄滓	高林寺遺跡	3IK-SK93	-	-	-	-	-	44.5	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	3IK-SK113	-	-	-	-	-	34.7	-	2点	
	鉄滓	高林寺遺跡	3IK-SK117	-	-	-	-	-	33.7	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	3IK-P30	-	-	-	-	-	12	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	3IK-P37	-	-	-	-	-	22.1	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	3IK-SD02	-	-	-	-	-	166.8	-	3点	
	鉄滓	高林寺遺跡	3IK-SD06	-	-	-	-	-	2423.4	-	19点	小島弘義他1984『西之宮下葬』 神田・大野遺跡発掘調査団
	鉄滓	高林寺遺跡	3IK-SX04	-	-	-	-	-	271.6	-	4点	
	鉄滓	高林寺遺跡	3IK-G	-	-	-	-	-	2196.1	-	35点	
	鉄滓	高林寺遺跡	4IK-SI08	-	-	-	-	-	21.8	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	4IK-SI10	-	-	-	-	-	15.5	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	4IK-SI19	-	-	-	-	-	137.5	-	6点	
	鉄滓	高林寺遺跡	4IK-SI25	-	-	-	-	-	30.8	-	2点	
	鉄滓	高林寺遺跡	4IK-SI32	-	-	-	-	-	35	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	4IK-SI38	-	-	-	-	-	25.7	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	4IK-SB03	-	-	-	-	-	147.7	-	2点	
	鉄滓	高林寺遺跡	4IK-SK09	-	-	-	-	-	80	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	4IK-SK23	-	-	-	-	-	3.4	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	4IK-P05	-	-	-	-	-	36.3	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	4IK-SE01	-	-	-	-	-	1211	-	2点	
	鉄滓	高林寺遺跡	4IK-SE05	-	-	-	-	-	19.8	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	4IK-SE08	-	-	-	-	-	3.5	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	4IK-SE10	-	-	-	-	-	143.5	-	2点	

No.	器種名	遺跡名	出土遺構	出土位置	遺存状況	法 量 (cm)				遺構の時期	備考	文献名
						長さ	短径	厚み	重量(g)			
	鉄滓	高林寺遺跡	4区-SE15	-	-	-	-	-	56.3	-	2点	小島弘義他1984町田之宮下郷 神田・大野遺跡発掘調査団
	鉄滓	高林寺遺跡	4区-SD04	-	-	-	-	-	266.4	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	4区-SF01	-	-	-	-	-	190.9	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	4区-G	-	-	-	-	-	113.2	-	2点	
	鉄滓	高林寺遺跡	5区-SF06	-	-	-	-	-	49.5	-	3点	
	鉄滓	高林寺遺跡	5区-SD03	-	-	-	-	-	37.3	-	2点	
	鉄滓	高林寺遺跡	5区-SD06	-	-	-	-	-	38.3	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	5区-SD08	-	-	-	-	-	73.5	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	5区-SKD04	-	-	-	-	-	18.4	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	5区-G	-	-	-	-	-	1098.1	-	17点	
	鉄滓	高林寺遺跡	6区-SK04	-	-	-	-	-	28.4	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	7区-SB01	-	-	-	-	-	36.4	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	7区-SB02	-	-	-	-	-	36.2	-	5点	
	鉄滓	高林寺遺跡	7区-SD12	-	-	-	-	-	1685.7	-	60点	
	鉄滓	高林寺遺跡	7区-SD13	-	-	-	-	-	5.0	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	9区-SD16	-	-	-	-	-	77.4	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	9区-G	-	-	-	-	-	80.3	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	10区-SD02	-	-	-	-	-	210.0	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	11区-SD08	-	-	-	-	-	46.2	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	15区-SK03	-	-	-	-	-	3670.7	-	102点	
	鉄滓	高林寺遺跡	15区-SB09	-	-	-	-	-	195.2	-	5点	
	鉄滓	高林寺遺跡	15区-SD04	-	-	-	-	-	207.5	-	2点	
	鉄滓	高林寺遺跡	15区-SD09	-	-	-	-	-	1773.4	-	15点	
	鉄滓	高林寺遺跡	15区-SD12	-	-	-	-	-	27.2	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	15区-SD15	-	-	-	-	-	20.8	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	15区-G	-	-	-	-	-	173.1	-	2点	
	鉄滓	高林寺遺跡	16区-SD01	-	-	-	-	-	2824.8	-	22点	
	鉄滓	高林寺遺跡	16区-SK02	-	-	-	-	-	28.5	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	16区-SK06	-	-	-	-	-	13.4	-	2点	
	鉄滓	高林寺遺跡	19区-SE03	-	-	-	-	-	370.0	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	19区-G	-	-	-	-	-	147.3	-	2点	
	鉄滓	高林寺遺跡	33区-G	-	-	-	-	-	28.0	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	34区-SK01	-	-	-	-	-	132.0	-	1点	

No.	器種名	遺跡名	出土遺構	出土位置	遺存状況	法 量(cm)			遺構の時期	備考	文献名
						長径	短径	厚み			
	鉄滓	高林寺遺跡	34区-SD01	-	-	-	-	79.7	-	2点	小島弘義他1984『四之宮下町』神田・大野遺跡発掘調査団
	鉄滓	高林寺遺跡	34区-SD03	-	-	-	-	72.1	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	34区-SD04	-	-	-	-	93.7	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	34区-SD16	-	-	-	-	13.6	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	34区-SD24	-	-	-	-	103.7	-	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	34区-G	-	-	-	-	73.3	-	2点	小島弘義1985『四之宮高林寺Ⅱ』平塚市埋蔵文化財調査報告書第2集 平塚市教育委員会
	鉄滓	高林寺遺跡	SI01	-	-	-	-	235.9	11世紀前半	5点	
	鉄滓	高林寺遺跡	SI02	-	-	-	-	1108.0	11世紀前半	11点	
	鉄滓	高林寺遺跡	SI03	-	-	-	-	383.2	12世紀前半	9点	
52・53	鉄滓	高林寺遺跡	SI04	-	-	-	-	1084.6	11世紀前半	17点	
	鉄滓	高林寺遺跡	SI05	-	-	-	-	406.9	11世紀前半	6点	
54	鉄滓	高林寺遺跡	SI06	-	-	-	-	186.8	9世紀後半	2点	
	鉄滓	高林寺遺跡	SI07	-	-	-	-	85.2	10世紀中葉	2点	
	鉄滓	高林寺遺跡	SI08	-	-	-	-	185.8	9世紀後半	8点	
	鉄滓	高林寺遺跡	SI09	-	-	-	-	39.7	9世紀後半	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	SI10	-	-	-	-	511.3	10世紀中葉	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	SI11	-	-	-	-	1427.5	12世紀前半	36点	
	鉄滓	高林寺遺跡	SI12	-	-	-	-	302.0	11世紀前半	1点	
	鉄滓	高林寺遺跡	SI14	-	-	-	-	109.0	11世紀前半	3点	
	鉄滓	高林寺遺跡	SI16	-	-	-	-	358.9	8世紀前半	4点	
	鉄滓	高林寺遺跡	SI17	-	-	-	-	444.8	8世紀前半	5点	
	鉄滓	高林寺遺跡	SI18	-	-	-	-	170.7	9世紀後半	2点	
56・57	鉄滓	高林寺遺跡	SD01	-	-	-	-	1674.5	8世紀～10世紀	20点	
	鉄滓	高林寺遺跡	SD05	-	-	-	-	180.0	-	4点	
	鉄滓	高林寺遺跡	SD07	-	-	-	-	285.5	-	9点	
58	鉄滓	高林寺遺跡	SD09	-	-	-	-	1282.2	-	25点	
59	鉄滓	高林寺遺跡	SD10	-	-	-	-	28.4	-	1点	
60	鉄滓	高林寺遺跡	SD11	-	-	-	-	2549.9	-	40点	
61～64	鉄滓	高林寺遺跡	SD12	-	-	-	-	715.4	-	15点	
	鉄滓	高林寺遺跡	SD13	-	-	-	-	890.0	-	12点	
	鉄滓	高林寺遺跡	SD14	-	-	-	-	177.6	-	3点	
	鉄滓	高林寺遺跡	SD15	-	-	-	-	52.2	-	5点	
	鉄滓	高林寺遺跡	SD16	-	-	-	-	120.3	-	3点	
	鉄滓	高林寺遺跡	SD16	-	-	-	-	120.3	-	3点	

No.	器種名	遺跡名	出土遺物	出土位置	遺存状況	法 量 (cm)			遺物の時期	備考	文献名
						長さ	短径	厚み			
	鉄滓	高林寺遺跡	SD20			-	-	-	129.9	2点	小島弘義1985「因之宮高林寺Ⅱ」平塚市埋蔵文化財調査報告書第2集 平塚市教育委員会
	鉄滓	高林寺遺跡	SD22			-	-	-	201.4	3点	
	鉄滓	高林寺遺跡	SD27			-	-	-	182.2	2点	
	鉄滓	高林寺遺跡	SD28			-	-	-	51.8	2点	
	鉄滓	高林寺遺跡	SD29			-	-	-	14.5	1点	
65	鉄滓	高林寺遺跡	その他			-	-	-	878.7	21点	小島弘義1988「因之宮高林寺遺跡第7地区」『諏訪前B・高林寺』平塚市埋蔵文化財シリーズ6 平塚市教育委員会
66-68	鉄滓	高林寺遺跡	遺構外			-	-	-	6742.0	140点	
	鉄滓	高林寺遺跡	緑治工所 SX01			-	-	-	21338.0	283点	
	鉄滓	高林寺遺跡	SX02			-	-	-	-	781点	
	鉄滓	高林寺遺跡	SK02			-	-	-	665.0	12点	
69	鉄滓	高林寺遺跡	SI01	覆土		8.2	5.8	3.0	-	10世紀後半	小島弘義1990「高林寺遺跡第9地区」『梶谷原・高林寺遺跡』平塚市埋蔵文化財シリーズ16 平塚市教育委員会・平塚市遺跡調査会
70	鉄滓	高林寺遺跡	SI01	覆土		6.1	5.3	1.9	-	10世紀後半	
71	鉄滓	高林寺遺跡	SI06	覆土		7.3	6.3	3.0	120.0	10世紀後半	
72	鉄滓	高林寺遺跡	SI'01	覆土		6.8	5.8	5.4	280.0		
73	鉄滓	高林寺遺跡	SI'01	覆土		7.1	3.9	2.2	80.0		
74	鉄滓	高林寺遺跡	8号壁穴住居址	覆土		4.0	3.8	2.5	32.4	8世紀後半	菅沼圭介他1999「高林寺遺跡第12地点」『高林寺遺跡他』平塚市埋蔵文化財シリーズ33 平塚市教育委員会
75	鉄滓	高林寺遺跡	8号壁穴住居址	覆土		6.4	7.1	4.0	120.6	8世紀後半	
76	鉄滓	高林寺遺跡	3号配石遺構	覆土		6.3	6.8	1.4	106.6	13世紀	
77	鉄滓	高林寺遺跡	遺構外			8.9	7.9	3.6	267.0		
78	鉄滓	高林寺遺跡	遺構外			5.1	4.0	2.3	40.8		
79	鉄滓	厚木道遺跡	SE01	覆土		12.5	11.4	3.3	35.0	8世紀前半	小島弘義他1988「厚木道遺跡第2地区」『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書3 昭和63年度発掘調査 六ノ城遺跡12カ8ヶ所』平塚市教育委員会 大野拓也2002「厚木道遺跡第6地点」『厚木道遺跡』平塚市埋蔵文化財シリーズ36 平塚市教育委員会
80	鉄滓	厚木道遺跡	SI06	覆土		6.2	5.0	2.4	76.6	8世紀後半	
81	鉄滓	厚木道遺跡	110号ピット			2.2	3.7	1.3	4.8		
82	鉄滓	梶谷原A遺跡	P184	覆土		7.0	5.2	1.6	180.0		
	鉄滓	御殿C遺跡	遺構外			3.6	4.5	1.6	41.0		
83	鉄滓	稲荷前B遺跡	SI01	覆土		7.6	5.4	1.8	74.8	9世紀前半	菅沼圭介他2000「梶谷原A遺跡第3地点」『梶谷原A遺跡他』平塚市埋蔵文化財シリーズ 34 平塚市教育委員会 栗山雄博1997「稲荷前B遺跡第4地点」『稲荷前B遺跡他』平塚市埋蔵文化財シリーズ30 平塚市教育委員会
84	鉄滓	稲荷前B遺跡	SI01	覆土		5.6	3.8	3.0	95.0	9世紀前半	
85	鉄滓	稲荷前B遺跡	SI01	覆土		8.6	7.0	2.4	170.0	9世紀前半	
86	鉄滓	稲荷前B遺跡	SI01	覆土		7.8	5.0	2.4	131.8	9世紀前半	
87	鉄滓	稲荷前B遺跡	SI01	覆土		7.0	6.2	4.0	114.8	9世紀前半	

No	器種名	遺跡名	出土遺構	出土位置	遺存状況	法 量 (cm)				遺構の時期	備考	文献名
						長さ	短径	厚み	重量(g)			
88	鉄洋	稲荷前B遺跡	SI01	覆土		6.0	4.4	2.2	94.2	9世紀前半		栗山雄揮1997「稲荷前B遺跡第4地点」「稲荷前B遺跡他」平塚市埋蔵文化財シリーズ30 平塚市教育委員会
89	鉄洋	稲荷前B遺跡	SI01	覆土		6.2	4.6	3.6	100.8	9世紀前半		
90	鉄洋	稲荷前B遺跡	SI01	覆土		5.1	3.6	2.2	33.0	9世紀前半		
91	鉄洋	稲荷前B遺跡	SI01	覆土		41.5	50.8	32.3	68.6	9世紀後半		
92	鉄洋	稲荷前B遺跡	SI01	覆土		39.2	43.8	23.5	36.6			
93	鉄洋	稲荷前B遺跡	SI02	覆土		52.5	80.0	30.0	151.2	9世紀後半		
94	鉄洋	稲荷前B遺跡	SI15	覆土		58.0	74.0	23.0	164.8	10世紀前半		
95	鉄洋	稲荷前B遺跡	SI28	覆土		44.0	65.0	22.0	88.6	10世紀後半		
96	鉄洋	稲荷前B遺跡	SB01	覆土		43.0	46.0	16.0	32.4	9世紀代		
97	鉄洋	稲荷前B遺跡	SB01	覆土		58.0	78.0	32.0	188.2	9世紀代		
98	鉄洋	稲荷前B遺跡	遺構外	-		50.0	61.0	23.0	64.0			大野悟他2005「稲荷前B遺跡-第5地点-」平塚市埋蔵文化財シリーズ40 平塚市教育委員会
99	鉄洋	稲荷前B遺跡	遺構外	-		63.0	69.0	22.0	140.2			
100	鉄洋	稲荷前B遺跡	遺構外	-		42.0	40.0	38.0	62.8			
101	鉄洋	稲荷前B遺跡	遺構外	-		47.0	50.0	31.0	54.6			
102	鉄洋	中原大隅橋遺跡	遺構外	-		17.0	14.0	3.4	970.0	-		
103	鉄洋	六ノ城遺跡	9号ピット			6.0	7.1	2.3	105.0			
104	鉄洋	六ノ城遺跡	2号竪穴住居址			7.7	10.2	3.6	273.0	10世紀		
105	鉄洋	六ノ城遺跡	SD01			5.8	5.0	2.3	81.8	9～10世紀		
106	鉄洋	六ノ城遺跡	SE01			4.5	3.5	0.9	17.2		ガラス質	
107	鉄洋	六ノ城遺跡	P26			6.8	4.3	2.3	78.2	7世紀後半～8世紀		栗山雄揮1996「六ノ城遺跡第11地点」「南原B遺跡他」平塚市文化財シリーズ 29 平塚市・平塚市遺跡調査会
108	鉄洋	大会原遺跡	NH34号住居			10.5	13.2	5.4	562.0			
109	鉄洋	大会原遺跡	NH30号住居			4.3	7.0	2.5				
110	鉄洋	大会原遺跡	NH36号住居			7.3	8.2	3.6	285.0			
	鉄洋	六ノ城遺跡	II分層棟敷			-	-	-	39424.0		※中世分と合計	
111	鉄洋	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			12.0	7.8	5.8	549.7			
112	鉄洋	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			12.7	10.0	4.3	383.9			
113	鉄洋	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			8.4	7.2	4.4	276.0			
114	鉄洋	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			5.9	5.4	2.3	82.0	9世紀後半～10世紀後半		
115	鉄洋	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			6.3	5.5	4.0	189.0			柏木善治他2007「湘南新道開通遺跡Ⅱ」(六ノ城第14地点)かながわ考古学財団調査報告210 財団法人かながわ考古学財団
116	鉄洋	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			7.4	7.4	1.8	142.1			
117	鉄洋	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			7.8	4.2	3.1	111.7			
118	鉄洋	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			11.0	8.3	3.9	410.1			

No.	器種名	遺跡名	出土遺構	出土位置	遺存状況	注 量 (cm)				遺構の時期	備考	文献名
						長さ	短径	厚さ	重量(g)			
119	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			10.4	6.8	4.4	210.4	9世紀後半～ 10世紀後半		柏木善治他2007『湘南新道関道跡跡田』(六ノ城第14地点)かながわ考古学財団調査報告210 財団法人かながわ考古学財団
120	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			7.6	6.6	4.2	243.0			
121	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			4.8	3.0	1.8	33.5			
122	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			7.7	4.4	2.5	93.5			
123	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			6.6	3.5	3.6	53.2			
124	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			3.5	2.4	7.0	5.9			
125	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			5.0	4.4	2.3	30.0			
126	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			4.0	3.0	1.6	24.0			
127	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			3.0	2.2	1.2	7.0			
128	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			4.0	3.8	1.9	250.4			
129	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			3.6	2.6	1.4	9.0			
130	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			3.4	2.0	1.4	9.5			
131	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			6.0	5.0	2.7	45.6			
132	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			5.0	3.9	2.7	35.0			
133	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			6.0	3.6	2.9	44.0			
134	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			3.0	2.5	2.0	10.0			
135	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			3.3	2.9	1.6	17.0			
136	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			2.6	2.3	2.0	14.0			
137	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			3.6	3.0	1.4	11.8			
138	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			5.1	5.0	1.6	29.1			
139	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			3.9	3.2	1.2	9.7			
140	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			4.6	2.7	1.5	18.2			
141	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			3.9	2.7	1.5	12.3			
142	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			4.5	2.8	2.0	30.2			
143	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			3.3	2.7	2.5	24.6			
144	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			4.7	3.0	1.3	17.0			
145	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			4.0	2.7	1.6	20.0			
146	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			6.2	4.2	2.5	96.0			
147	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			3.7	3.4	2.2	37.0			
148	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			3.0	2.6	2.1	15.2			
149	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			3.2	1.9	1.2	5.4			
150	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			3.0	2.4	1.5	11.4			
151	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			2.8	2.2	2.0	9.4			

No.	器種名	遺跡名	出土遺構	出土位置	遺存状況	法 量 (cm)				遺構の時期	備考	文献名
						長径	短径	厚み	重量(g)			
152	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			3.0	2.1	1.6	12.6			
153	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			2.0	2.3	2.0	15.8			
154	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			3.0	2.1	1.0	9.1			
155	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			5.7	2.5	1.8	22.7			
156	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			2.9	2.1	1.8	9.0			
157	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			2.4	1.9	1.3	4.0			
158	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			3.1	2.7	2.0	10.0			
159	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			2.9	1.7	1.4	5.0			
160	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			2.4	2.2	2.0	10.0			
161	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			2.8	2.5	1.8	6.0			
162	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			3.3	2.0	1.5	8.2			
163	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			7.3	7.1	2.7	72.8			
164	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			4.5	2.3	2.0	20.0			
165	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			6.1	5.1	2.7	105.0			
166	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			4.5	3.7	1.7	35.4			
167	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			7.2	4.2	2.4	46.9			
168	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			3.6	3.3	1.9	28.9	9世紀後半～ 10世紀後半		柏木善治他2007『湘南新道間遺跡群Ⅲ』(六ノ城第14地点)かながわ考古学財団調査報告210 財団法人かながわ考古学財団
169	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			3.5	3.1	1.4	11.0			
170	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			3.1	2.7	1.9	28.0			
171	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			3.5	3.2	2.1	26.0			
172	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			4.7	3.9	3.0	40.8			
173	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			3.4	3.2	1.8	19.0			
174	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			5.4	2.8	2.3	40.0			
175	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			3.0	2.3	1.0	9.2			
176	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			5.0	3.1	2.5	21.9			
177	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			6.0	5.1	2.1	46.0			
178	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			4.5	2.9	2.1	34.0			
179	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			3.9	3.7	2.8	48.0			
180	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			3.1	2.5	2.3	18.0			
181	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			3.4	2.8	2.0	18.0			
182	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			4.1	2.0	1.6	19.0			
183	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			3.9	3.6	2.7	36.0			
184	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			3.7	2.8	2.6	24.0			

No.	御蔵名	遺跡名	出土遺構	出土位置	遺存状況	法 量 (cm)				遺構の時期	備考	文献名
						長さ	幅	厚み	重量(g)			
185	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			2.0	1.7	1.1	3.7	9世紀後半～ 10世紀後半		柏木善治他2007『湘南新道開道遺跡Ⅲ』(六ノ城第14地点)かながわ考古学財団調査報告210 財団法人かながわ考古学財団
186	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			2.7	2.0	1.8	12.0			
187	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			3.1	2.8	1.3	15.8			
188	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			3.3	2.7	2.1	15.0			
189	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			2.7	2.6	1.6	7.0			
190	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			3.0	2.3	1.7	14.0			
191	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			4.0	3.1	2.6	43.0			
192	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			3.2	2.3	1.9	13.0			
193	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			2.7	2.7	1.7	16.0			
194	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			3.5	2.5	2.5	19.0			
	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1鍛冶工房			-	-	-	149832.7	9世紀後半～ 11世紀後半		柏木善治他2009『湘南新道開道遺跡Ⅳ』(六ノ城第14地点)かながわ考古学財団調査報告243 財団法人かながわ考古学財団
	鉄滓	六ノ城遺跡	NH45号土坑			-	-	-	19793.7			
195	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			8.2	7.0	2.5	148.0			
196	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			4.0	4.2	1.4	36.0			
197	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			11.4	9.2	4.2	589.7			
198	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			3.8	2.8	2.7	44.7			
199	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			9.0	6.9	3.5	300.8			
200	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			1.5	1.3	1.1	3.4			
201	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			2.4	1.8	1.5	7.7			
202	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			1.5	1.4	0.0	2.3			
203	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			1.7	1.6	1.1	3.5			
204	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			3.2	2.8	1.9	21.9			
205	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			2.3	2.1	1.6	10.1			
206	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			2.4	1.7	1.5	7.3			
207	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			2.0	2.0	1.4	7.1			
208	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			9.0	9.0	8.0	0.9			
209	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			3.6	3.2	2.0	25.8			
210	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			2.2	1.6	1.3	6.5			
211	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			1.9	1.9	1.3	7.3			
212	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			3.1	2.8	2.6	25.2			
213	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			3.5	2.2	1.6	15.9			
214	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			2.2	1.6	1.4	6.0			
215	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			2.5	2.3	1.0	3.4			

No.	器種名	遺跡名	出土遺構	出土位置	遺存状況	法 量 (cm)				遺構の時期	備考	文献名
						長さ	幅	厚み	重量(g)			
216	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			2.5	2.3	2.1	13.4	9世紀後半～ 11世紀後葉		柏木壽治他2009『西南新道開通遺跡IVⅥノ城第14地点』かながわ考古学財団調査報告243 財団法人かながわ考古学財団
217	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			5.0	3.5	2.6	35.2			
218	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			5.2	3.4	3.3	64.5			
219	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			5.1	4.3	2.9	74.2			
220	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			3.4	2.5	1.6	15.0			
221	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			6.0	5.7	4.9	169.2			
222	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			3.7	3.4	1.4	29.8			
223	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			3.3	2.5	1.3	6.9			
224	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			5.4	3.9	3.8	48.2			
225	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			3.6	3.3	2.6	20.1			
226	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			2.3	1.9	1.5	5.6			
227	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			4.1	3.6	1.7	18.8			
228	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			3.3	2.5	1.6	16.4			
229	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			5.6	5.3	2.4	15.8			
230	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1大型鍛冶工房			3.2	2.8	2.4	25.5			
231	銅滓	七ノ城遺跡	5号壺穴住居址	覆土		1.4	3.9	0.5	11.8	10世紀～ 11世紀		栗山雄輝1998『七ノ城遺跡-第2地点-』平塚市埋蔵文化財調査報告書15 平塚市教育委員会
232	鉄滓	七ノ城遺跡	15号溝状遺構	覆土		6.1	7.0	2.7	149.4	8世紀以降	取崩の形状を残す	
233	鉄滓	七ノ城遺跡	SK01	覆土		9.5	8.6	3.0	321.8			菅沼圭介他2009『七ノ城遺跡-第3・5地点-』平塚市埋蔵文化財シリーズ43 平塚市教育委員会
234	鉄滓	七ノ城遺跡	遺構外	-		4.3	4.5	1.3	27.6	-		
235	鉄滓	天神前遺跡	1号壺穴住居址	覆土		14.0	11.8	5.40	329.2	8世紀前後		羽石新1992『天神前遺跡-第7地点-』平塚市埋蔵文化財調査報告書第9集 平塚市教育委員会
236	鉄滓	天神前遺跡	1号壺穴住居址	覆土		14.0	12.2	5.00	275.6	8世紀前後		
237	鉄滓	天神前遺跡	1号壺穴住居址	覆土		13.0	11.0	3.40	171.8	8世紀前後		菅沼圭介他2006『天神前遺跡第13地点』『天神前/塚越古墳/十二天』『平成14・15年度市内道路緊急調査報告 平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書12 平塚市教育委員会
238	鉄滓	天神前遺跡	遺構外	-	破片	5.2	6.2	1.80	63.0			
	鉄滓	天神前遺跡	3号壺穴住居址	覆土	破片	-	-	-	-		報告のみ	長澤保崇他2009『天神前遺跡QNo.204』発掘調査報告書-第15地点-』株式会社青藤建設
	鉄滓	天神前遺跡	4号壺穴住居址	覆土	破片	-	-	-	-		報告のみ	
239	鉄滓	天神前遺跡	不明遺構	覆土	破片	5.6	5.0	2.10	-			長澤保崇他2009『天神前遺跡QNo.204』発掘調査報告書-第15地点-』株式会社青藤建設
240	鉄滓	天神前遺跡	SI01	覆土	完形	3.7	2.5	2.60	26.6	10世紀前半		吉岡秀範2012『天神前遺跡第16地点』日本漢学史研究報告第78冊 (株)日本漢学史研究所
241	鉄滓	天神前遺跡	SI02	覆土	完形	6.5	5.5	3.0	64.3	9世紀後半～ 10世紀前半		
242	鉄滓	天神前遺跡	SI07	覆土	完形	2.7	2.0	1.9	599.0	9世紀後半～ 10世紀前半		
243	鉄滓	天神前遺跡	SK58	覆土	完形	9.3	7.0	3.9	196.7	-		

No.	器種名	遺跡名	出土遺構	出土位置	遺存状況	法 量(cm)				遺構の時期	備考	文献名
						長さ	短径	厚み	重量(g)			
244	鉄洋	天神前遺跡	SD04	覆土	完形	7.8	6.8	2.5	164.4	9世紀後半～10世紀前半		古岡考証2012『天神前遺跡第16地点』日本農業史研究報告第78冊(株)日本農業史研究所
245	鉄洋	天神前遺跡	SD10	覆土	完形	6.7	5.2	4.5	162.7	10世紀		
246	鉄洋	天神前遺跡	SE01	覆土	完形	6.3	6.2	2.8	141.3	10～11世紀		
247	鉄洋	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土	-	(10.0)	7.0	3.5	265.0			
248	鉄洋	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土	-	-	4.5	2.8	81.0	9世紀後半～10世紀頃		
249	鉄洋	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土	-	-	-	2.8	75.0			中田英他1982『向原遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告1 神奈川県教育委員会
	鉄洋	向原遺跡	39号竪穴住居址	-	-	-	-	-	46984.0			
250	鉄洋	真田・北金目遺跡群	2区SI24	床面		4.0	5.1	1.7	35.5	9世紀後半		川端清倫他1999『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書1 平塚市真田・北金目遺跡調査会 住宅・都市整備公団
251	鉄洋	真田・北金目遺跡群	4区SD030	覆土		6.4	7.7	3.0	121.5	8世紀中～後半		川端清倫他2001『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書2 平塚市真田・北金目遺跡調査会 都市基盤整備公団
252	鉄洋	真田・北金目遺跡群	遺構外	-		(7.3)	(6.3)	(4.0)	256.6	-		
	鉄洋	真田・北金目遺跡群	29B区SI057	P2 SK2	-	-	-	-	1714.2	9世紀中葉～後葉以前の奈良・平安時代	住居内P2、SK2あわせて69点	若林勝司他2008『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書6 平塚市真田・北金目遺跡調査会 独立行政法人 都市再生機構
253	鉄洋	真田・北金目遺跡群	12G区遺構外	-	-	7.7	5.6	4.6	-	-	須恵器付着	若林勝司他2010『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書7 平塚市真田・北金目遺跡調査会 独立行政法人 都市再生機構
	鉄洋	真田・北金目遺跡群	48区SI010	-	-	-	-	-	1366.3	9世紀後半～10世紀前半	540点 その他 鍛造刃片 19.8g、粒状率 24.3g、その他鉄片17.4g	若林勝司他2011『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書8 平塚市真田・北金目遺跡調査会 独立行政法人 都市再生機構
254	鉄洋	真田・北金目遺跡群	48区P073	覆土		4.1	3.2	1.8	-	9世紀後半～10世紀前半	S3101に隣接同時期と判断	
255	鉄洋	山王久保遺跡	遺構外			9.0	8.3	3.3	283.0			菅沼幸介他1998『山王久保遺跡第8地点』山王久保遺跡地『平塚市埋蔵文化財シリーズ31 平塚市教育委員会
256	鉄洋	No.86根岸B遺跡	遺構外	I-21		9.0	6.8	4.3	310.0			
257	鉄洋	No.86根岸B遺跡	遺構外	E-20		7.4	7.1	3.4	165.0			
258	鉄洋	No.86根岸B遺跡	遺構外	C-19		7.7	6.4	2.1	130.0		陶製鉄洋	後藤孝八郎1999『平塚市No.86根岸B遺跡発掘調査報告書』平塚市No.86根岸B遺跡発掘調査団
259	鉄洋	No.86根岸B遺跡	遺構外	C-10		8.0	4.5	2.5	60.0			
260	鉄洋	No.86根岸B遺跡	遺構外	D-17		5.3	8.7	2.9	170.0		陶製鉄洋	
261	鉄洋	No.86根岸B遺跡	遺構外	J-20		4.9	6.8	2.2	75.0			
262	銅洋	東中原遺跡	SI01	床下		3.6	2.6	2.1	46.2	9世紀後半～10世紀前半		菅沼幸介他2000『東中原遺跡第2地点』『梶谷原遺跡地』平塚市埋蔵文化財シリーズ34 平塚市教育委員会
263	銅洋	東中原遺跡	SI01	床下		4.6	3.0	1.2	49.0			
264	鉄洋	東中原遺跡	SI05	覆土		3.1	4.1	1.7	19.0	9世紀中葉		

【鉄塊】

平塚市

No.	器種名	遺跡名	出土遺構	出土位置	法 量 (cm)				遺構の時期	文献名
					長さ	幅	厚み	重量(g)		
265	素材鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土	5.0	3.8	2.5	74.5	9世紀後半～10世紀頃	中田英他1982『向原遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告1 神奈川県教育委員会
266	素材鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土	3.2	2.5	1.9	28.7		
267	素材鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土	4.1	2.3	1.8	37.4		
268	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	確認面	4.2	2.1	1.6	35.1		
269	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土	4.0	2.5	1.2	21.2		
270	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土	1.5	0.8	1.1	3.7		
271	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土	1.6	1.7	1.2	4.9		
272	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土	1.6	1.1	0.8	3.5		
273	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土	2.5	2.3	1.4	13.6		
274	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土	3.6	1.6	1.4	17.4		
275	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土	2.5	1.5	0.5	3.1		
276	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土	3.4	3.0	1.0	12		
277	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土	1.1	0.6	0.2	0.6		
278	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土	2.5	1.2	0.5	2.7		
279	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土	1.8	1.5	0.8	9.3		
280	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土	2.5	1.1	0.9	6.4		
281	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土	1.6	1.0	0.9	1.3		
282	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土	3.0	1.5	1.0	17.3		
283	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土	2.2	1.6	0.7	9.5		
284	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土	1.9	1.5	1.2	9.3		
285	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土	2.6	2.0	1.7	17.7		
286	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土	2.0	1.2	1.5	9.1		
287	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土	1.2	0.9	0.7	2.3		
288	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土	3.4	1.5	1.0	11.3		
289	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土	2.3	2.1	0.7	7.8		
290	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土	2.4	1.1	0.5	5.5		
291	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土	1.8	1.2	0.9	6.3		
292	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土	2.0	1.5	1.0	5.4		
293	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土下層	3.5	2.5	1.0	14.4		

No.	器種名	遺跡名	出土遺構	出土位置	遺存状況	法 量(cm)			遺構の時期	文献名
						長さ	幅	重量(g)		
294	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土下層		1.9	1.2	0.6	9世紀後半～10世紀頃	中田英他1982『向原遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告1 神奈川県教育委員会
295	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	P16上面		2.5	1.2	0.5		
296	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	P15内		3.5	1.8	0.6		
297	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土下層		3.5	2.1	1.3		
298	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	P15内		1.8	1.8	0.9		
299	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	1号内		2.6	1.3	1.0		
300	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土		4.5	1.8	0.8		
301	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土		2.0	1.4	0.5		
302	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	P19内		2.2	1.5	0.8		
303	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	南東床面		2.1	1.7	1.1		
304	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	P20内		2.1	1.7	1.0		
305	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土		1.5	1.0	0.5		
306	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土		1.3	1.3	0.7		
307	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土		2.5	1.2	0.7		
308	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	P16上面		1.5	1.2	0.8		
309	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	P17内		2.1	1.9	0.7		
310	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土		2.2	1.4	1.0		
311	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土		3.9	1.9	1.5		
312	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	覆土		3.0	1.7	1.3		
313	鉄塊	向原遺跡	39号竪穴住居址	確認面		3.5	2.8	1.10		
314	鉄塊	天神前遺跡	SI07	覆土		4.9	2.8	0.80	-	上原正人1992『天神前遺跡-第6地点』『天神前・桜畑遺跡他』平塚市埋蔵文化財シリーズ21 平塚市教育委員会
	銅鉄	天神前遺跡	SX01			6.3	2.8	0.24	-	小島弘毅他1988『天神前遺跡』『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書1 昭和61年度発掘調査の報告』平塚市教育委員会
	銅鉄	四之宮高林寺遺跡	SK02			4.1	2.6	0.44	-	小島弘毅1988『四之宮高林寺遺跡 第7地区』『諏訪前B・高林寺』平塚市埋蔵文化財シリーズ 6 平塚市教育委員会

《武蔵国》

【増埴/取組】

横浜市

No.	器種名	遺跡名	出土遺構	出土位置	遺存状況	法 量(cm)			遺構の時期	備考	文献名
						口徑	器高	厚み			
315	埴埴	西ノ谷遺跡	R竪穴・鍛冶炉	床面上の作業用小穴P3・4 正位で出土	2/3	9.6	3.2	-	10世紀後半	底面糸切の須恵器(G5窯式)塊状の鉄・銅滓が付着→一部ガラス化	坂本彰他1997『西ノ谷遺跡』『港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告書23 横浜市教育委員会・財団法人横浜市ふるさと歴史財団』

No	器種名	遺跡名	出土遺構	出土位置	遺存状況	法 量(cm)			遺構時期	備考	文献名
						口徑	幅	厚み			
316	埴埴	西ノ谷遺跡	R堅穴・鍛冶炉	-	1/3	(12.0)	-	底厚 2.5	10世紀 後半	土製品 手づくね 内面火ぶくれガラス化。塊状の積層と小塊状の銅滓が確認付着	坂本彰他1997『西ノ谷遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 23 横浜市教育委員会・財団法人横浜市ふるさと歴史財団
317	埴埴	西ノ谷遺跡	R堅穴・鍛冶炉	-	完形	8.0	4.2	1.5	10世紀 後半	手づくね 内面2/3～外面1/2にかけで鉄滓がかけられている。溶けた鉄を流し込んでいた。	
318	埴埴	西ノ谷遺跡		9-J地区		-	3.7	2.6	-	手づくね	
319	埴埴	西ノ谷遺跡	甕M	9-I地区		-	1.5	0.6	-	糸切り底部 珐瑯転用	
320	埴埴	西ノ谷遺跡		9-J地区		-	1.8	1.3	-	台付皿の外底部を転用、内面凹部ガラス化	
321	埴埴か	西ノ谷遺跡		8-I地区		-	-	1.3	-	須恵器・甕、内面凹部ガラス化	
322	埴埴	西ノ谷遺跡		9-J地区		11.0	2.4	0.5	-	灰釉陶器か、珐瑯。内面ガラス化している	
323	埴埴	西ノ谷遺跡		9-I地区		-	-	0.7	-	内面被熱化、ガラス化している。	

【羽口】

横浜市

No	器種名	遺跡名	出土遺構	出土位置	遺存状況	法 量(cm)				遺構時期	備考	文献名
						長さ	幅	厚み	孔徑			
324	羽口	受地だいやま遺跡	J区 堅穴 鍛冶工房址			4.0	3.8	2.0	1.60	9世紀末～ 10世紀中葉		伊藤正義他1986『奈良地区遺跡群 I No. 11地点 受地だいやま遺跡 下巻』奈良遺跡調査団
325	羽口	受地だいやま遺跡	J区 堅穴 鍛冶工房址			2.8	1.8	1.8	1.50			
326	羽口	受地だいやま遺跡	D区 堅穴 鍛冶工房址			8.6	5.6	3.0	2.10	11世紀初～ 後半		
327	羽口	受地だいやま遺跡	D区 堅穴 鍛冶工房址			6.2	4.2	3.4	1.70	11世紀初～ 後半		
328	羽口	受地だいやま遺跡	A区一括			8.0	7.4	2.4	2.40			伊藤正義他1986『奈良地区遺跡群 I No. 11地点 受地だいやま遺跡 下巻』奈良遺跡調査団
329	羽口	受地だいやま遺跡	D区一括			6.4	6.0	3.6	1.80			
330	羽口	上郷深田遺跡	1号が北側柱孔状 ピット			(13.2)	(6.4)	6.8	2.80			平子順一1988『横浜市栄区上郷町 上郷深田遺跡発掘調査概報』横浜市埋蔵文化財調査委員会
331	羽口	上郷深田遺跡	上段 Aトレンチ上方			(12.8)	(6.4)	6.8	2.80			
332	羽口	上郷深田遺跡	土坑群4			(7.6)	(6.0)	6.0	2.40			平子順一1988『横浜市栄区上郷町 上郷深田遺跡発掘調査概報』横浜市埋蔵文化財調査委員会
333	羽口	西ノ谷遺跡	R堅穴			3.8	5.8	2.3	-			坂本彰他1997『西ノ谷遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 23 横浜市教育委員会・財団法人横浜市ふるさと歴史財団
334	羽口	西ノ谷遺跡	R堅穴			8.5	5.1	3.0	-			

No.	部名	遺跡名	出土遺構	出土位置	遺存状況	法 量(cm)				遺構時期	備考	文献名
						長さ	幅	厚み	孔徑			
335	羽口	西ノ谷遺跡	10-K(東C)			6.3	7.5	4.2	-		被熱	坂本彰他1997『西ノ谷遺跡』『港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 23 横浜市教育委員会・財団法人横浜市ふるさと歴史財団』
336	羽口	西ノ谷遺跡	探堀			7.9	7.2	2.3	-		被熱	
337	羽口	西ノ谷遺跡	10-K(黒)			7.5	5.6	2.8	-		被熱	
338	羽口	西ノ谷遺跡	10-I(滑N)			-	-	3.0	-		径7.5	
339	羽口	西ノ谷遺跡	10-I(黒)			4.8	6.7	2.3	-			

川崎市

No.	部名	遺跡名	出土遺構	出土位置	遺存状況	法 量(cm)				遺構時期	備考	文献名
						長さ	幅	厚み	孔徑			
340	羽口	大ヶ谷戸遺跡	2号竪穴住居址	床面より浮いた状態		-	-	-	1.80			呉地英夫他1988『川崎市 大ヶ谷戸遺跡発掘調査報告書』大ヶ谷戸遺跡発掘調査団 玉川文化財研究所

【鉄洋・新洋】

横浜市

No.	部名	遺跡名	出土遺構	出土位置	遺存状況	法 量(cm)				遺構時期	備考	文献名
						長さ	幅	厚み	重量			
	鉄洋	受地だいやま遺跡	J区 聖穴給治工房址			-	-	-	870.0	9世紀末～10世紀中葉	15点	伊藤正治他1987『奈良地区遺跡群 I No. 11地点 受地だいやま遺跡下巻』奈良遺跡調査団
	鉄洋	受地だいやま遺跡	J区 テラス状遺構			-	-	-	116.0		13点	
	鉄洋	受地だいやま遺跡	D区給治南道第1号土坑			-	-	-	-		多孔質の小粒2～3点	
	鉄洋	受地だいやま遺跡	D区給治南道第2号土坑			-	-	-	-	11世紀初～後半	多孔質の小粒2～3点	
	鉄洋	受地だいやま遺跡	D区給治南道第3号土坑			-	-	-	1100.0			
	鉄洋	上郷深田遺跡	-			-	-	-	-		写真のみ数点掲載	平子順一1988『横浜市南区上郷町 上郷深田遺跡発掘調査概報』横浜市埋蔵文化財調査委員会
341	鉄洋	西ノ谷遺跡	9-K			10.0	11.8	4.5	554.0		均ではなく直か	坂本彰他1997『西ノ谷遺跡』『港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 23 横浜市教育委員会・財団法人横浜市ふるさと歴史財団』
	鉄洋	熊ヶ谷遺跡	第11号住居址	覆土上層～下層		-	-	-	-	9世紀後半	15点	矢野文明他 1986『熊ヶ谷遺跡』『奈良地区遺跡群発掘調査報告 Ⅲ』奈良遺跡調査団地蔵堂遺跡・熊ヶ谷遺跡調査班
	鉄洋	笠岡中央公園遺跡	1号竪穴遺構	-		-	-	-	-	8世紀代	本文記載のみ	鹿島保宏他2003『笠岡中央公園遺跡発掘調査報告』横浜市緑政局・財団法人横浜市ふるさと歴史財団
	鉄洋	笠岡中央公園遺跡	17号住居址			-	-	-	-	7世紀末～8世紀初葉	本文記載のみ	
	鉄洋	笠岡中央公園遺跡	26号住居址			-	-	-	-	7世紀末～8世紀初葉	本文記載のみ	
	鉄洋	笠岡中央公園遺跡	39号竪穴住居址			-	-	-	-	古墳時代後葉	本文記載のみ	
	鉄洋	笠岡中央公園遺跡	43号住居址			-	-	-	-	平安時代	本文記載のみ	
342	鉄洋	北川表の上遺跡	56号住	覆土中		3.8	2.4	1.8	-	9世紀第4四半期～10世紀第1四半期		坂上克弘他2009『北川表の上遺跡』『港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 42 財団法人横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター』
343	鉄洋	北川表の上遺跡	56号住	覆土中		4.5	5.0	2.8	-			

No.	標識名	遺跡名	出土遺構	出土位置	遺存状況	法 量 (cm)				遺構時期	備考	文献名
						長さ	幅	厚み	重量			
344	鉄洋	北川表の上遺跡	56号住	覆土中		5.4	3.2	1.2	-	9世紀第4四半期～10世紀第1四半期		坂上克弘他2009『北川表の上遺跡』『東北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告42 財団法人横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター』
345	鉄洋	北川表の上遺跡	56号住	覆土中		6.4	5.4	2.8	-			

川崎市

No.	標識名	遺跡名	出土遺構	出土位置	遺存状況	法 量 (cm)				遺構時期	備考	文献名
						長さ	幅	厚み	重量			
346	鉄洋	上麻生日光台遺跡	SI10			6.8	4.2	2.05	70.6	8世紀末		宮重俊一他2007『上麻生日光台遺跡』(株)日本実業史研究所
347	鉄洋	上麻生日光台遺跡	SB06	掘り方7内埋蔵土中		5.4	5.0	1.75	60.7	9世紀後半		宮重俊一他2007『上麻生日光台遺跡』(株)日本実業史研究所
348	鉄洋	上麻生日光台遺跡	SP01			5.85	3.0	1.6	27.1	11世紀前半		
	鉄洋	上麻生日光台遺跡	H2号住居		-	-	-	-	-	9世紀中頃	写真のみ掲載	中山豊他2007『上麻生日光台遺跡第Ⅲ地区 発掘調査報告書』玉川文化財研究所
	鉄洋	大ヶ谷戸遺跡	2号壑穴住居		-	-	-	-	1480.0		77点出土。2～10cm程度の不整形	奥地英夫他1986『川崎市 大ヶ谷戸遺跡発掘調査報告書』大ヶ谷戸遺跡発掘調査団 玉川文化財研究所

【跡型】

横浜市

No	種別	遺跡名	出土遺構	規模			遺構時期	備考	文献名
				長さ	幅	厚み			
349	跡型	上郷深田遺跡	3号炉	7.3	6.3	2.0	9世紀前半代	散脚跡型を含む面をもつもの	平子順一1989『横浜市栄区上郷町 上郷深田遺跡発掘調査概報』横浜市埋蔵文化財調査委員会
350	跡型	上郷深田遺跡	3号炉	4.8	4.7	1.8	9世紀前半代		
351	跡型	上郷深田遺跡	1号壑穴	4.8	3.3	2.0	9世紀前半代		
352	跡型	上郷深田遺跡	2号壑穴	6.6	4.5	1.8	9世紀前半代		
353	跡型	上郷深田遺跡	2号壑穴	17.3	7.5	1.1	9世紀前半代		
354	跡型	上郷深田遺跡	3号炉	6.5	5.5	1.3	9世紀前半代	偏平なもの 縁のあたりが部分が剥落したような痕跡あり	
355	跡型	上郷深田遺跡	2号壑穴	8.5	6.8	1.1	9世紀前半代		

【伊壁】

横浜市

No.	種別	遺跡名	出土遺構	規模				遺構時期	備考	文献名
				長さ	幅	厚み	重量			
356	伊壁	西ノ谷遺跡	10-J区(P10)	9.0	15.3	6.2	281.6	-	中央泉浴状、内部ガラス化、壁状に垂下 土壁部は小石・スサ含む 内装壁30cm前後	坂本節他1997『西ノ谷遺跡』『東北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告23 横浜市教育委員会・財団法人横浜市ふるさと歴史財団』
	伊壁	受地だいやま遺跡	D区鍛冶工房址	-	-	-	-	11世紀初～後半	13点	伊藤正義他1986『奈良地区遺跡群Ⅰ No. 11地点 受地だいやま遺跡下巻』奈良遺跡調査団

神奈川の中世城館（5）

中世研究プロジェクトチーム

はじめに

これまで「神奈川の中世城館」⁽¹⁾と題し、基礎データの集成⁽²⁾を行い、前回は堀に関する先行研究を概観した。今回はこれまでの集成をもとに考察を行うことを目的とする。最も多く集成できたデータである「上幅」は、後世の削平などの影響を強く受けている場合が多い。そこで、比較的影響が少なく、中世の状況を伺うことができると推測される「断面形態」、「傾斜角度」、「堀底形態と付属施設」についてまとめることにし、「規模」については適宜触れるようにする。そして、最後に中世前期と後期に分けて各考察を横断的に眺めることで、まとめたい。

発掘調査は様々な制約を伴うため、堀という大きな遺構はその一部しか検出されず、十分なデータを得られないことも多い。また、発見時のデータであるため、後世の削平や改変を受けた最後の状態であることが多く、単純比較はできないことも多い。検討対象となる遺跡もある程度広範に調査が行われ、成果が蓄積しているものに限られるため、県内全体の傾向として述べるのが難しい状況にある。しかし、先行研究で概観したとおり、発掘調査成果をもとにした横断的な考察は少ないといえ、今回の試みは今後の研究に寄与することができると考えられる。上記の問題点に注意しながら考察を進めることにしたい。（松葉）

1. 断面形態

堀の断面形に関しては、これまで「(2)」で小田原城について、「(3)」でその他の城館の例について、発掘調査により検出された堀について集成を行い、表に示した。

この集成において、堀の形態として使用した「薬研」「箱薬研」「箱」の語については、原則として報告書中に用いられている表記にしたがった。しかし、断面の形状の表現には各の報告書によって揺れがあることがわかった。同様の形状を示していても、違う語が用いられているケースは非常に多い。また「U字形」「皿形」「浅鉢形」といった表現を用いている場合もある。

当集成では、断面の形態は原則として報告書の表記にしたがったが、報告書で形態・形状が言葉で表現されていないものに関しては、当プロジェクトで判断し、おおむね断面形がV字を呈するものを「薬研」、逆台形を呈するものを「箱」、溝(堀)上部がV字状、下部が逆台形を呈するものを「箱薬研」として記載した。しかし、集成を試みる過程で、細部について統一的な定義を設けることはできなかった。したがって、たとえば薬研の形状を呈していても底部に若干の平場部分をもつものや、溝の上部が後世の削平を受けて遺存しないものは「箱」と記載した場合もある。また、中間的な断面形状を呈する遺構も多く見られる。このように溝の断面形を統一的な条件を設けて3形態に分類することは、かなり難しいことがわかった。

今回は、発掘調査の成果によって堀に囲まれる範囲が明らかになった城館を取り上げ、堀の断面形態を再点検してみる。

宮久保遺跡

綾瀬市所在。渋谷氏に関わる12～14世紀にかけての武士階層の居館とされる。中世の遺構は12世紀後半から13世紀中頃までと、13世紀後半からの2時期を確認している。複数確認された掘立柱建物の周囲を屏や櫓で方形に区画する。また、溝状遺構も検出されているが、いずれも排水を目的としたものとの見解が示されている。このうちほぼ南北75mにわたって検出されたSD02は、「上面幅2～2.4m、底面幅0.5～0.6m、深さ約1mの箱葉研状」。東に流れる目久尻川にほぼ並行するかたちで設けられ、水路としても用いられたと考えられる。

この遺跡を「このタイプの屋敷は防禦系諸施設のあり方に限り開放性の高い空間を形成して」と論じる研究もある(橋口2004)。そして、「中世前期の屋敷地を圍繞する「堀」をはじめとする施設は、「防禦機能」をもつとはいえないものであった。」とする。

堀が防御の目的で構築される前段階の例として、まず捉えておきたい。

大会原遺跡・六ノ城遺跡

平塚市所在。調査区南東に隣接した一帯は「杉浦屋敷跡」の名称をもつ遺跡で、後北条氏の家臣杉浦藤佐衛門の屋敷跡と伝えられるが、これは明治期に生まれた伝承である可能性が高い。ほかに中世にさかのぼる伝承はないが、1・2区では、溝状遺構で圍繞される東西およそ60mの空間が検出されている。周辺の調査事例から、さらに広範囲を幾条もの溝が囲むことが明らかとなっている。覆土から出土した遺物は同安窯系の青磁、瀬美・常滑の甕、古瀬戸製品など。かわらけは15世紀の特徴を備えるものが中心となるが、中世前期から土地利用され、「溝で圍繞された中に、中世後期の生活空間が依存していた」とみられる。溝状遺構は「発見された溝状遺構は、その走行位置から(中略)北西範囲を幾重にも圍繞し、あたかも防衛的な性格を思わせる」、「覆土や溝底の観察からは流水や湛水の痕跡はなく、C12a・b号溝状遺構等は重畳する位置に幾度も掘り返しを行った形跡が認められた。」と報告される。また、区画の役割ももつが、溝の掘り返しは、壁が崩れやすく作り替えを余儀なくされた地質的な要因が考えられることも指摘されている。溝(堀)の規模や形態を考える場合、構築する技術や目的(防御・区画など)と同時に、地質的な要因が影響していることも考慮すべきであろう。

「(3)」の表中ではC9号溝状遺構のような底部に平坦面をもつ形状を「箱」としたが、断面形はV字形にちかく「葉研形」ともいえそうである。C9号溝状遺構からは14世紀後半～15世紀前半・16世紀後葉の遺物が出土している。

また、これらを検出した調査区の東に隣接する8・33区でも、南北に走行する中世前期の溝3条(C1～3号溝状遺構)を検出している(依田ほか2009)。このうちC2号溝状遺構は越州窯系の青磁碗をはじめとして、瀬美の甕、常滑の片口鉢I類など、古代末～中世の遺物が出土していることから、13世紀に埋設したとも考えられる。このC2号溝状遺構は、溝底幅のやや広い溝を埋めて、V字にちかく断面形を呈する溝が掘り直されているという時期差が認められる。切り合い関係から見て、C3号溝はこれよりも古い。

丸山城

伊勢原市所在。鎌倉時代初期の御家人糟屋有季の居城とされ、その後、関東管領扇谷上杉氏の居城となったという伝承がある。現在では、鎌倉時代から扇谷上杉氏による支配の時期を経て、後北条期に至る可能性

のある城郭と認識されている。ただし「丸山城」の名称の初見は近代になってからである。

成瀬第二地区遺跡群下槽屋D地区では形状の違う2条の堀を確認している。1号堀は「箱葉研」。2～4号堀は東西に走行する一連の堀であるが、場所によって規模・構造に差違があるため、便宜上分割して報告されている。この堀には底部に堀障子様の仕切をもつ部分がある。堀障子(障子堀)は後北条氏の城郭を特徴づけるとされているが、ここでの例は、覆土の火山灰から見て15世紀後半との見解もある(安藤2006)。3号堀は堀障子をもたない部分で、「葉研状」と報告される。

下槽屋・丸山遺跡第6地点A地区で検出されたC1号堀は内外に犬走りをもち、内部に土橋状の掘り残しがある。「(3)」ではその形態を「箱」とした。またB地区で検出された堀は「箱葉研形」と報告される。この堀の上層・中層からは多量の瓦片が出土しているが、瀝美産と思われる甍片、見込みに渦巻き状の明瞭なヨコナデ痕を残すかわらけなども混入している。この特徴を持つかわらけは扇谷上杉氏に関わる城館で出土する傾向が指摘されており、中世初期から15世紀の土地利用のなかでこの溝が構築されたと推測される。

玉縄城

鎌倉市所在。伊勢宗瑞(北条早雲)によって永正9年(1512)に築城され、天正18年(1590)北条氏勝が豊臣氏に開城、元和5年(1619)廃城。築城以前の土地利用をうかがわせる遺物が縄文土器片のみであり、16世紀初頭から17世紀初頭に営まれた可能性がかなり明確な遺跡といえる。

曲輪1・2を分断する堀切1は幅10.3m～14m、最深部で深さ4m。3時期が認められるとされ、初期が「浅い葉研形」、二期目・三期目が「皿形」と報告されている。諏訪壇と呼ばれる平場より北東に延びる尾根を分断する堀切2では6時期の掘り直し、「前半3期が葉研形であるのに対し、後半は箱形」と表現される。遺物は縄文時代のもので玉縄城存続期間のものは一点も無いと報告されている。したがって、これらの堀が築かれた年代および埋没した年代は、調査成果からは不明である。しかし、推定される玉縄城本丸の東に位置し、中世前期の土地利用の痕跡が認められないことから、玉縄城が営まれた時代のものであることはほぼ確実であろう。可能性として16世紀前半から17世紀初頭の間に堀が設けられ改変したということになる。この調査区の東側斜面で検出した9条の縦堀については、その断面形は「V字形」「皿形」と報告されている。

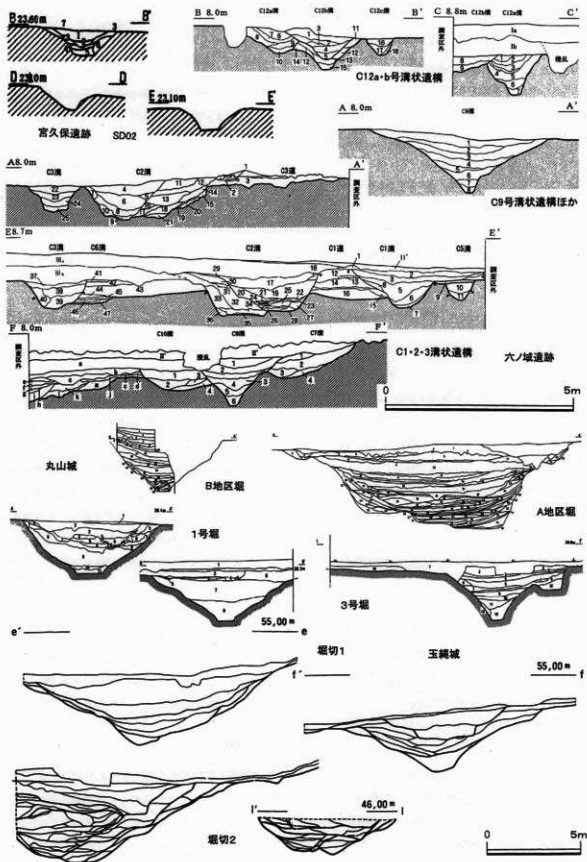
小括

従来、時代的に葉研形の溝が箱葉研形・箱形へと変化する理解とされてきた傾向があるが、見てきたように、個々の遺跡のなかでは箱形が葉研形に改変される例も認められる。また葉研形が中世後期には残らないとは言いきれない。しかし念頭においておきたいのは、はじめに述べたとおり、溝の形態を表す語彙に揺れがあることである。断面の形状がどのように表現されるかは報告者の判断に依るところが大きい。そして、遺構の遺存状態にも大きく影響されていると思われる。

居館の区画・排水を目的と主としたものから、防御を目的としたものに変容していくなかで、堀は当然大規模化する必要を生じる。年代的な隔たりもあり、立地条件や構築された目的も違うものを単純な比較で論じてはならないが、今回例に挙げた遺構の断面図を、試みに縮尺を1/100・1/200に統一して示してみた(第1図)。遺跡の伝承も参考に「古いものから新しいものへ」という一応の流れを踏まえ、溝の形態が比較的明瞭に観察できるものを選んだが、これを溝・堀の規模や形態の変遷ととらえてはならないと考える。

(菊川)

中世研究プロジェクトチーム



第1図 断面形態の例

2. 傾斜角度

県内の各城館

横浜市茅ヶ崎城では、これまでに17ヶ所で堀が確認されており、15ヶ所で傾斜角度が判明している。西郭の南堀が内側55°・外側60°、北堀が内側50°・外側65°、6T内の東堀が60°・西側が65°、北郭外周部の西堀と北堀が内側70°・外側60~70°を測るが、それ以外は70~83°の傾斜を持ち、全体的に急角度に掘られている。堀の深さは22T・24T・25T内、中郭中堀、平成17年度調査区B・C区が3m以上、それ以外は1.0~2.5mを測る。堀の形態は、明らかとなっているものはいずれも箱堀である。

横須賀市奴田城では、SD01が55°、SD02が45°を測る。堀の形態は箱堀で、深さは1.6~1.7mである。

平塚市岡崎城関連では、御所ヶ谷遺跡で発見された7号溝の西側が45°・東側が60°、10号溝が50°を測る。堀の形態は箱堀で、深さは0.7~1.4mを測る。

同市片岡(城)は、1Tが80°、2Tが60°、SD01が55°で、1Tの堀のみ急斜面となっている。堀の形態はいずれも箱堀で、深さは1T・2Tが1.2m・1.1m、SD01が0.9~2.2mを測る。

同市真田城では、真田・北金目遺跡群の10区で6条、19区で2条の堀が調査されている。傾斜角度は10区のSD003が40°、SD004の南側が40°・北側が52°を測るが、それ以外の箇所は60~75°とやや急な角度となっている。堀の形態は箱堀で、深さは1.3~2.3mである。

同市豊田館(豊田堀の内)は、SD46の東側が50°・西側が60°を測る。堀の形態は箱堀で、深さは1.0~1.4mである。

同市堀ノ内館(藤間豊後守屋敷)は、SD01が50°、堀状遺構が80°で、堀状遺構が急角度に掘られている。堀の形態は箱堀で、深さはSD01が1.1m、堀状遺構が1.0~2.3mを測る。

同市吉沢館は、上吉沢市場地区遺跡群1号堀が65°、高林寺遺跡第7・9・12地点のSD01が40~80°とSD01は途中で角度が変わっている。堀の形態は箱堀で、深さは1号堀が1.5m、SD01が1.0~1.6mを測る。

同市杉浦屋敷は、六ノ城遺跡において6条の溝が検出されている。傾斜角度はC8号溝が40°、C21号溝の東側が40°・西側が35°、C9・C11・18・C14・C17号溝は45~60°である。堀の形態は箱堀で、深さはC8号・C14号・C21号溝が1m以下、それ以外が1.2~1.4mを測る。

鎌倉市杉本寺周辺遺跡群は、堀1の東側が40°・西側が45°を測る。堀の形態は薬研堀⁽³⁾で、深さは1.3mである。

同市玉縄城は、堀切4条、堅堀9条が確認されている。堀切の傾斜角度は堀切1・2と西側堀切が30~50°であるが、東側堀切は内が35~75°・外が50~75°と途中で角度が変わっている。堅堀の傾斜は20~40度とやや緩やかな造りである。深さは1.5~10.8mを測るが、8m以上がやや多く認められる。堀の形態は箱堀と薬研堀である。

藤沢市大庭城は、西部211地点遺跡のSD01が80°、SD07の南側が40°・北側が65°を測り、SD01は垂直に近い角度で掘られている。堀の形態は箱堀で、深さは2.3~2.4mである。

茅ヶ崎市近藤右衛門尉経秀居館は、上ノ町遺跡で発見された49・80・87号溝の東側が40~60°・西側が50~60°、1・17号溝の東側が60°・西側が40°と溝の東側と西側が違う角度で掘られている。深さは最

大で1.4m、堀の形態は箱堀である。

相模原市津久井城は、御屋敷、城坂曲輪群、馬込地区の3ヶ所で堀が確認されている。傾斜角度は、御屋敷1号堀が75°、2号堀の北側が75°・南側が50~80°、城坂曲輪群は1号堅堀が39~87°、馬込地区空堀が北側33°・南側22°を測る。御屋敷2号堀、城坂曲輪群1号堅堀4は途中で角度が変わっており、馬込地区の空堀は両者よりも緩やかな傾斜となっている。堀の形態は、城坂曲輪群1号堅堀の一部が葉研堀状を呈するが、箱堀が主体である。深さは御屋敷1号堀が2.5m、2号堀が1.3m、城坂曲輪群堅堀が1.1~3.1m、馬込地区空堀が最深度で5.1mを測る。

大和市深見城は、22ヶ所で堀が確認されている。郭Ⅰの外堀と内堀、郭Ⅱの外堀と内堀、郭Ⅲの外堀と内堀、本郭の内堀、主郭の内堀、外外郭外堀、天竺坂堀、内側堀等である。傾斜角度は、郭Ⅰ外堀が内側85度・外側80°、内堀が内側75°・外側70°、郭Ⅱ外堀が85°、内堀が内側75°・外側70°、郭Ⅲ外堀が50~70°、内堀が内側45~75°・外側75°、本郭内堀85°、主郭西内堀80°、主郭中央内堀の内側75°・外側70°、外外郭外堀60~85°、外外郭中央外堀の内側75°・外側70°、天竺坂堀40~50°、内側堀の内側80°・外側70°を測る。内側と外側の角度の違いが目立ち、天竺坂堀以外は70°以上の比較急な角度を有している。堀の形態は、天竺坂堀のみ葉研堀、それ以外は箱堀である。深さは2.0~2.6mが主体であるが、主郭の内堀が5.5m、天竺坂堀が8.3m、内側堀が7.2mを測る。

伊勢原市丸山城関連の堀または溝は、8遺跡で検出されている。傾斜角度は、上粕屋・小山遺跡の溝(3条)が40~70°、成瀬第二地区遺跡群の堀(3条)が30~60°、成瀬第二地区遺跡群下槽屋C地区第一地点の堀(1条)が40~60°、成瀬第二地区遺跡群下槽屋D地区の堀(4条)が34~75°、丸山遺跡第IV地点の堀(1条)が65°、丸山遺跡第5地点の堀(1条)が40~45°、上粕屋・ノ引北遺跡の堀(1条)が44~49°、下槽屋・丸山遺跡(第6地点)の堀(2条)が15~65°を測る。角度は40~60°で、内側と外側または北側と南側の角度が違っている例がやや多く認められる。堀の形態は、成瀬第二地区遺跡群の堀が葉研堀、その他は箱堀が主体である。深さは1.1~9.8mと様々である。

同市岡崎城は、御殿の堀と二ノ郭の堀が確認されている。傾斜角度は御殿の堀が50~75°、二ノ郭の堀が50~90°を測る。御殿の空堀と第1グリッドの堀は途中で角度が変わっている。90°を測るのはSD-4の外側で、内側とは30°の差がある。肩または片側法面のみを検出した例が多く、堀の形態は不明である。深さは御殿の堀が3.5m、二ノ郭の堀が1.9mを測る。

南足柄市浜居場城は、トレンチ8箇所で見出された空堀が確認されている。4号トレンチでは主郭と西櫓台の間の堀、8号トレンチでは主郭と北櫓台の間の堀、3号トレンチでは西櫓台と西側平場の間の堀である。傾斜角度は、主郭と西櫓台の間の堀が東側45°・西側10°、主郭と北櫓台の間の堀が北側10°・南側27°、西櫓台と西側平場の間の堀が東側37°・西側15°を測る。いずれも東側と西側または北側と南側の角度が違っており、最大で30°の差があるが、比較的緩やかな角度で掘られている。堀の形態は葉研堀で、深さは1.0~3.95mを測る。同市沼田城は、4箇所で大北空堀と空堀(A・B)が確認されている。傾斜角度は、大北空堀の1号トレンチが10~40°、2号トレンチが40~60°、空堀Aが40~55°、空堀Bが20~80°を測る。大北空堀の1号トレンチは比較的緩やかな傾斜、空堀Bは急な傾斜となっているが、いずれも途中で角度が変わっている。堀の形態は箱堀で、深さは1.0m前後を測る。

綾瀬市早川城は、17ヶ所で堀切が確認されている。いずれも内側と外側の角度が違っており、途中で角度が変わっている箇所もやや多く認められる。傾斜角度は40~60°が主体で、内外の角度差はそれほど大きく

ないが、Ⅱ-5 Tの内側70°・外側25°、Ⅴ-9 Tの内側25°・外側40~70°のように差が大きい箇所もある。堀の形態は、ⅠB-1 T・3 T、Ⅳ-6 Tが箱薬研、それ以外は箱堀である。深さは0.3~6.7mと一定していない。

松田町松田城は、空堀、堀切、堅堀が確認されている。傾斜角度は空堀が北側55°・南側60°、堀切が北側45°・南側50°、堅堀が60°を測り、北側と南側に若干の角度差が認められる。堀の形態は、いずれも箱堀で、深さは空堀が1.6~2.6m、堀切が6~8m、堅堀が0.1~1.5mを測る。

山北町河村城は、空堀7条、堀切2条、堅堀1条が確認されている。空堀は20~70°、堀切は40~70°、堅堀は20~50°を測り、それぞれ東側と西側または北側と南側に若干の角度差が認められる。また、途中で角度が変わる例が多い。70°の傾斜を持つのは堀切3の西側と空堀2の西側で、深さは8mを測る。堀の形態は、堀切3のみ薬研堀、それ以外は箱堀である。深さは2.5~12mと幅があるが、5~8mが主体である。

小田原市では小田原城関連の堀や溝が多地点で確認されており、資料が蓄積されつつある。主な堀の傾斜角度は、総構堀が36~63°、二の丸住吉堀が60~70°、鍛冶曲輪北堀が25~70°、三の丸外郭の新堀が30~70°、三の丸北堀が45~70°、三の丸南堀が30~55°、三の丸東堀が15~60°、三の丸元蔵堀が40~65°、三の丸山本内蔵邸跡第Ⅺ地点箱根口跡第Ⅱ地点1~3号堀が30~60°、御長屋跡第Ⅰ~Ⅲ地点1号堀が40~70°、本町遺跡第Ⅲ地点1号堀が45~65°、小峯御鐘ノ台大堀切東堀が45~50°、小峯御鐘ノ台大堀切西堀が40°、八幡山堀切が30~40°、八幡山古郭南曲輪東堀が20~68°、八幡山古郭藤原平南入堀が50~60°となっている。

小括

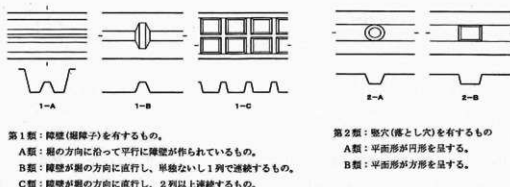
以上のように、神奈川県内の城館の堀の傾斜角度は、構築時期や地域に関係なく40~60°の範囲に収まる例が多い。70~80°の急な角度を持つ堀が主体を占めている城館は茅ヶ崎城と深見城のみである。逆に40°以下の緩やかな傾斜を有する堀が主体を占めているのは玉縄城と浜居場城でこちらもあまり認められない。70°以上の角度を持つ堀は津久井城、丸山城、岡崎城、早川城などでも検出されているが、津久井城や丸山城では40°以下の堀も確認されている。このように同じ城館でも構築場所によって傾斜角度が大きく異なる堀が存在する事例も認められる。傾斜角度は内側と外側で異なっている例が多いが、5~10°が主体で、大きく異なる例は少ない。途中で角度が変わる事例は、丸山城、沼田城、川村城などで複数確認されている他、その他の城館でも1~数例認められる。角度差は10~40°で、20°前後が多い。(木村)

3. 堀底形態及び付属施設

県内で発掘調査が実施された城館で小田原市内では小田原城関係で97ヶ所、小田原市以外で47遺跡126ヶ所の発掘調査報告書から、堀の規模と堀底形態及び付属施設などの集成を行った。

堀底形態

集成に際して堀底の形状は、1類と2類の大大分類、さらに堀底の状況によりA類~C類の小分類を行った。区分については以下のとおりである。



第2図 堀底形状分類模式図

分類の結果、発掘調査報告書より堀底の形状がきらかとなった遺跡は、以下の通りである。

小田原城関係では八幡山古郭、二の丸住吉堀、三の丸箱根口・南堀・東堀・新堀をはじめとする各地点、竜洞院第Ⅰ地点、伝肇西第Ⅰ地点等の総構えの各地点など36ヶ所で確認できた。確認された形状は、堀障子が単独ないし1列で連続する1-B類が32箇所とほとんどである。その他、1-A類は山本内蔵邸跡第Ⅳ地点の1ヶ所、1-C類は二の丸住吉堀、三の丸東堀第Ⅲ地点、三の丸元蔵堀第Ⅴ・Ⅵ地点の3ヶ所でそれぞれ確認されている。三の丸新堀では、上幅8.5m、堀底幅2.9m、深さ5m以上、法面角度55~70°を測る堀が確認されており、堀底に高さ1.12m、上端幅1.7m、基底部の幅2.9mの規模の障壁があり、上面には幅0.6m、深さ0.3mの溝が切られている。伝肇西第Ⅰ地点では、上幅16.5m、堀底幅6.5m、深さ10m、法面角度57~63°を測る堀が確認されており、堀底に高さ1.2~1.7m、上端幅0.5~1.0m、基底部の幅2.4mの規模の障壁があり、上面には幅0.35mの溝が切られている。堀障子の上面に掘られている溝は、片方の堀障子でオーバーフローした水を流し、水位を一定にするためと考えられており、堀障子が水堀として機能していたことが指摘されている。二の丸住吉堀は、堀底に2列の堀障子が確認されているが、上層を17世紀以降の久保氏の薬研堀に削平され、一部は堀門の南側の石垣の下に潜り込んでおり詳細な規模は不明であるが、東西方向に3.4~4.8m、堀底幅2.6~3.8m、深さ1.0~1.4m、法面角度60~70°で堀障子が確認されている。

小田原市以外では横浜市の茅ヶ崎城、鎌倉市の玉縄城、大和市の深見城、伊勢原市の丸山城、山北町の河村城、平塚市の真田城の6城で堀底の形態が確認されている。形状は小田原城と同様に大部分が1-B類であるが、真田城のみは堀底に堅穴状遺構を有する2-A類である。茅ヶ崎城は、扇谷上杉氏の拠点と考えられ、14世紀末~15世紀代に使用されたと考えられる。上幅2.3~5.8m、堀底幅1.1~3.9m、深さ1.0~4.5m、法面角度50~80°の堀障子が確認されている。玉縄城は、小田原の伊勢宗瑞(北条早雲)により、相模国に勢力を張る三浦氏の攻めのために築かれた城で、上幅9.0~20.0m、堀底幅1.3~2.0m、深さ3.5~10.8m、法面角度34~70°を測る堀が確認されている。深見城は、15世紀中頃に実在した「山田伊賀守入道経光」の居城であることが『新編相模国風土記稿』に記されているのみで詳細は不明である。上幅4.0~7.0m、堀底幅1.5~2.7m、深さ1.3~2.2m、法面角度30~50°を測る堀が確認されている。丸山城は、鎌倉時代初期の糟屋左衛門尉有季の居城とされているものである。上幅4.1~17.0m、堀底幅0.4~10.0m、深さ1.1~9.8m、法面角度30~70°を測る堀が確認されている。河村城は、小田原北条氏の甲斐国武田氏に対しての支城として存在した城で、平成元年度より詳細分布調査やトレンチ調査が実施された。調査では、堀切、

空堀、土橋、橋脚遺構、堅穴状遺構群、地表面等の遺構が調査され、古絵図に記載のない空堀も確認されている。上幅 6.0~約 25m、堀底幅 0.5~16.6m、深さ 3.0~12.0m、法面角度 40~70°を測る堀が確認されている。

付属施設

付属施設として、土塁と土橋の存在を確認した。土塁は、小田原城関係では住吉堀、三の丸南堀・東堀・外堀、元藏堀、八幡山古郭八幡堀枝堀、北条幻庵居館跡、小峰御簾ノ台大堀切東堀、伝肇西第1地点等の15ヶ所で確認されている。小田原以外では、茅ヶ崎城、玉縄城、大庭城、津久井城、深見城、丸山城、沼田城、早川城の8ヶ所で確認されている。土橋は小田原城関係では住吉堀、八幡山古郭本曲輪、小峰御簾ノ台大堀切東堀の3ヶ所で確認されている。小田原以外では、茅ヶ崎城、真田城、玉縄城、深見城、丸山城、松田城、河村城の8ヶ所で確認されている。

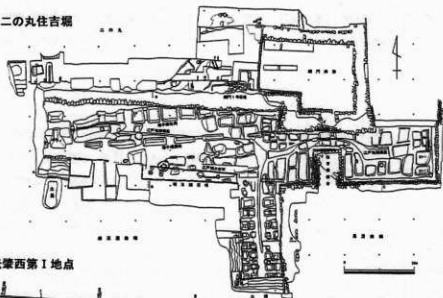
土塁や土橋は、後世の削平のために土橋自体が消滅してしまったものや、調査地点が限られているために調査で確認されないものが多数あり、本来ならばもっと多くが存在していたと考えられる。

次に、堀障子が確認された各遺跡を出土遺物から見てみたい。小田原城の各遺跡からは、青磁・白磁・染付等の中国舶載遺物、瀬戸窯・常滑窯等の国産陶器、かわらけ等、時期的に15世紀後半~16世紀の遺物が出土している。小田原以外では、茅ヶ崎城では、青磁碗などの舶載磁器、常滑壺・瀬戸灰釉皿・播鉢等の国産陶器、見込に渦巻文を持つかわらけ等が出土している。玉縄城では、青磁・白磁・明染付等の舶載磁器、瀬戸灰釉皿・播鉢等の国産陶器、かわらけ等が出土している。深見城では、青磁碗等の舶載磁器、瀬戸緑釉皿・常滑窯等の国産陶器、瓦質火鉢、かわらけ等が出土している。丸山城では、龍泉窯及び同安窯系の青磁碗、古瀬戸壺・常滑窯・片口鉢・瀬美窯等の国産陶器、瓦質火鉢、かわらけ等が出土している。河村城は戦国期の染付・青磁・白磁等の舶載磁器、常滑窯・古瀬戸梅瓶などの国産陶器、かわらけ等が出土している。遺物の時期としては、丸山城から11世紀後半代と13世紀前半代のやや古い時期の遺物が出土しているが、他は14世紀後半~16世紀後半までの時期に比定される遺物がほとんどである。

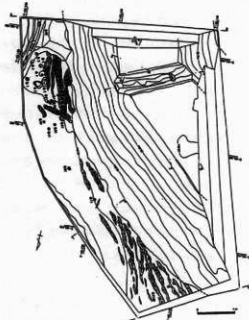
小括

以上、堀底形態と付属施設の確認できたものについてみてきたが、県内で確認されている城館の堀として報告されている数から言えば、限られた条件での調査にならざるを得ず、堀底形態がすべて明らかになってはいない。出土遺物からみると、14世紀後半~16世紀後半がほとんどであり、後北条氏の勢力の伸張に伴い県内の城郭にも堀障子が浸透していったものと考えられる。その中で、三の丸新堀は、朝倉右京進の證文(神奈川県史料編3 九二六八)から天正15年(1587)6月以前には成立していることが指摘され、出土遺物のみならず古文書からも存在が確認できる。また、佐々木氏は小田原城で確認されている堀障子は、「堀の法面には工具痕跡のものもあり、法面は直線的に仕上げられており、コーナーなどの發線は筋が真っ直ぐに通っている。また、法面から底面への角度も鋭角で、神経質とも言える程の直線となっており、堀法面のコンタ図を作成しても、ほぼ等間隔で直線が引かれる」と述べており後北条期の堀の特長だと指摘されている(佐々木 2010)。堀底の形態や付属施設等については、小田原城関係では資料が多く蓄積され堀の状況が解明されつつあるが、小田原城以外では周辺の宅地化や公園化等により発掘調査自体が少なく状況の解明が少ない。今後の調査による資料の蓄積により状況の解明が進むことに期待したい。(宮坂)

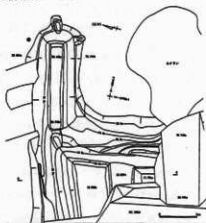
二の丸住吉堀



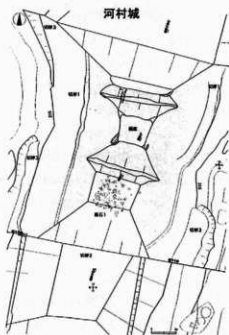
伝蒙西第I地点



三の丸新堀第IV地点



河村城



第3図 各城館の堀底形態

まとめ

中世前期

東国では、防衛系圍繞施設をもつ「方形館」は基本的に中世後期になってからであり(橋口 1987 など)、県内でもその大きな流れのなかで語ることができる。中世前期に帰属して明確に堀と呼べるようなものは非常に少ない。ここでは堀や大溝と呼ばれるもの、それに類すると推測される溝を取り上げておきたい。

鎌倉では鎌倉時代初期に位置付けられる2例を確認しておきたい。大倉幕府跡では幕府東限の施設と推測される堀(遺構 91)が検出された(熊谷 2011)。上幅約 5.1m、深さ約 2.6mを測り、底部幅 30~40 cm程度と考えられている。断面形は菓研で、傾斜角度は 40° である。杉本寺周辺遺跡でも同時期と推測される堀(堀 1)が確認されている。これまでに指摘されているとおり、この時期の堀は断面形が菓研を呈していることが多く、この2例もそれにあたる。傾斜角度は両法面とも 40° 程度で、これも2例類似しており、注目に値する。規模に関しては幅、深さとも大きく異なるが、これが敷設された場所によるものなのか、後世の削平の影響なのか判然としない。土塁などの付属施設は確認されていないが、大倉幕府跡の調査は狭小であるため、不明な部分も残る。ほかより明らかに規模の大きいこれらの溝は、区画以外の機能も有していたと考えられ、防衛性も無視できないと指摘されることが多い。しかし、鎌倉時代中期以降、このような大溝は見られなくなり、大路の側溝など形態も変化する。これには社会変化の影響との指摘もある(岡 2006)。

鎌倉以外では、宮久保遺跡で区画溝(SD02)が発見されている。溝は箱菓研形で、溝上部の傾斜角度が 20~30°、下部が 60~70° となっている。法面に傾斜角度の変化が見られない場合は 40~50° となる。付属施設などはみられない。この溝は堀と指摘されていないが、野生動物との攻防(中澤 2006)という視点を加えるならば、今後の評価も変わるかもしれない。大会原遺跡・六ノ城遺跡では区画以外に防衛性も推測される溝が発見されている。C1~3号溝状遺構の規模は最大で上幅 3.5m、深さ 1.2mである。この3遺跡では、規模がほかの溝より大きいということでは同じだが、それ以外に共通性はない。また、断面形態にも差異が見られる。つまり、遺跡内で規模や形態は完結しており、地域の共通性はないように推測される。

県内ではこの時期の堀は非常に少ない。例として見てきた溝は、規模がほかの溝よりやや大きく、区画や排水以外の機能も示唆されている。形態は様々あるが、大局的に見ると菓研形が多いようである。傾斜角度については 40~50° が多く、両法面はほぼ同じ角度が多い。しかし、前述のとおり、これは中世後期以降にも当てはまることなので、時間的な特徴とするには更なる精査が必要である。堀底形態については、障壁などは確認されず、中世前期にはそのようなものは基本的になかったと推測される。付属施設についてもこれまで確認されていないが、後世の削平の可能性も考慮しなければならない。

中世後期

中世後期になると、軍事的な緊張が多くなるなか、堀や土塁で圍繞された方形居館、戦時の拠点となる城郭が発達する。ここでは居館と城郭にわけて見てみることにする。

調査で方形居館と分かった2遺跡を見てみたい。表の屋敷遺跡では三方を堀(K1号大溝)で、一方を開析谷で囲まれた方形居館が発見されている(近野ほか 1997)。上面は削平が激しい部分もあり、残存のよい箇所では上幅約 4.8m、深さ 2.4mを測る。形態は菓研形と箱形の両方が確認でき、菓研形から箱形への変遷が推測されている。傾斜角度は菓研形で 40~50°、箱形で 60° 前後を測る。菓研形の堀底には一段掘り込まれた

溝を確認できる箇所もある。土橋を有し、直接は確認されていないものの、覆土の状況から内側には土塁が構築されていたと推測されている。上ノ町遺跡では主郭と副郭を囲む大溝(K1号溝、K17号溝)が確認されている。規模などは「(3)」のとおりであり、K17号溝には櫓を伴い、防御性が指摘される(富永 2009)。形態は箱形が主であるが、薬研形も見られる。両遺跡に見られる堀(大溝)の特徴のうち、共通点を挙げておきたい。上幅が4mを越えるなどほかの溝と比べて大きいといえる。形態は薬研形と箱形の両方が確認でき、薬研形が先行するものの、同時期の利用も考えられる。この両形態が併存することは注目に値しよう。堀底には、薬研形で一段掘り込まれた溝が見られるが、箱形では特に見られない。また、土塁・土橋・櫓列など施設は異なるが、堀に伴う遺構が確認されている。

前述のように後北条期の堀は、傾斜角度が急であると指摘されている(佐々木 2010)。集成に当てはめると、60°~70°に相当すると考えられ、一部、80°近いものも見られる。まず小田原城の堀について、傾斜角度が急で、規模や形態が明らかなものを中心に見てみたい。堀の形態については、箱堀が主体で、薬研堀が僅かに確認できる。規模は様々だが、上幅4m以上、深さ2m以上あるものがほとんどで、上幅10m以上、深さ5m以上も見られる。堀底形態が確認できるものは、障壁を有する1-Bである。土塁や土橋などの付属施設は確認できなかったが、中世段階では不明な部分も多い。このような堀は小田原城の一面に集中しているというわけではなく、比較的全体的に確認できるが、今後の調査事例の増加で変わる可能性も十分ある。

後北条氏に関わる城郭は県内にも多い。玉縄城・津久井城・河村城・丸山城などが著名であるが、これらの城郭から発見された堀は、小田原城の堀ほど傾斜角度が急ではなく、40°~60°が多い。これが支城の特徴であるのか、後世の改変の影響なのか判断はできなかった。規模で見ると、上幅10m以上、深さ5m以上の堀も見られ、小田原城と比しても見劣りはしない。また、確認された堀底形態は何れも1-Bであることは注目に値し、地山を掘り残して構築している。これらの城郭からは堅堀も確認されている。形態は薬研形・箱形両方見られる。傾斜角度は30°~40°と比較的緩やかだが、規模は上幅10m以上と大きいものが多い。堅堀はその性格上、配置と規模が重要であり、法面の角度はこの角度で十分であったのだろう。他方、津久井城は小さな堀を接続させる構造で、他とは大きく異なる。検出例が増えてからこの意味は考えなければならない。

以上、中世を前期と後期に分けて考察してきた。断面形態に関しては前期・後期とも薬研形・箱形ともに見られるが、堀障子などの堀底形態は中世後期以降でなければ見られず、城郭と称される遺跡でなければ見られない。前期は堀と呼べそうなものが少なく、規模も小さい。それに比べ後期は大きい傾向はある。また、方形居館より城郭の方がより大きい堀が多い。これが機能差によるものなのか今後も議論が必要である。今後は城館内での位置により、規模や形態に差が見られるのかという点について検討する必要があるだろうが、検討資料の追加を待ち、再検討したい。

(松葉)

注

- (1) 本プロジェクトで行ってきた「神奈川の中世城館(1)~(4)」については、以下「(1)~(4)」と省略する。また、各用語の定義などはこれまでの報告に準じている。
- (2) 基礎データ集成で利用した報告書の出典については「(1)~(3)」を参照頂きたい。なお、集成後に刊行された報告書や遺分については適宜触れていく。また「(4)」で掲載した文献については紙幅の都合上省略する。前出を参照願いたい。
- (3) 「(3)」では断面形態を「箱」と記載していたが、「薬研」の誤りである。ここで訂正しておく。

引用・参考文献

- 安藤洋一 2006 「伊勢原の城館—丸山城跡を中心として—」『神奈川の城館跡』神奈川考古学会
近野正幸・恵田勇・谷口肇 1997 「宮・瀬遺跡群Ⅱ」かながわ考古学財団調査報告 19
依田亮一ほか 2009 「瀬南新道関連遺跡Ⅱ」かながわ考古学財団調査報告 242

研究紀要18

かながわの考古学

発行日 2013(平成25)年3月26日

発行 公益財団法人かながわ考古学財団

〒232-0033 神奈川県横浜市中区中村町3-191-1

TEL:045-252-8689 FAX:045-262-8162

<http://kaf@kaf.or.jp>

印刷 アンクベル・ジャパン株式会社

KANAGAWA NO KOUKOGAKU

Vol.18

(Bulletin of KANAGAWA Archaeology Foundation)

CONTENTS

Project Team for Paleolithic Studies: Paleolithic Artifacts in Kanagawa Prefecture Distribution (6) Layer B2	1
Project Team for Jōmon Period Studies: Change of the Jōmon Culture in Kanagawa Prefecture (IX): An Example in the first part of Late Period. An Aspect of the Horinouti-Type Pottery Period, Part 4	11
Project Team for Yayoi Period Studies: The Corpus of Yayoi pottery-Coffin in Kanagawa Prefecture(2)	23
Project Team for Kofun Period Studies: Track of Dr. Naotada Akaboshi, A Pioneer of Archaeological Research in Kanagawa Prefecture (10): A Report of Materials of the Kofun Period in the So-called "Akaboshi Note"	34
Project Team for Nara-Heian Period Studies: Hardware in the Nara and Heian Periods in Kanagawa Prefecture: The Corpus of iron manufacturing artifacts (3)	44
Project Team for Medieval Age Studies: Castle Site in the Medieval Age in Kanagawa Prefecture (5)	71

March, 2013

KANAGAWA Archaeology Foundation

Yokohama, Japan